

所が昨日と違つて、門を潜つても、子供の鳴らす太鼓の音は聞こえなかつた。玄關には此前目に着かなかつた衝立が立つてゐた。其衝立には淡彩の鶴がたつた一羽佇んでゐる丈で、姿見の様に細長い其格好が、普通の寸法と違つてゐる意味で敬太郎の注意を促した。取次には例の下女が現はれたには相違ないが、其後から遠慮のない足音をどん／＼立てて二人の子供が衝立の影迄来て、珍らしさうな顔をして敬太郎を眺めた。昨日に比べると是丈の變化を認めた彼は、最後に何うぞといふ案内と共に、硝子戸の締まつてゐる座敷へ通つた。其真中にある金魚鉢の様に大きな瀬戸物の火鉢の兩側に、下女は座蒲團を一枚づゝ置いて、其一枚を敬太郎の席とした。其座蒲團は更紗の模様を染めた真丸の形をしたもので、敬太郎は不思議さうに其上へ坐つた。床の間には刷毛でがし／＼と粗末に書いた様な山水の軸が懸かつてゐた。敬太郎は何處が樹で何處が巖だか見分けの附かない畫を、輕蔑に値する裝飾品の如く眺めた。すると其隣に銅鑼が下がつて、それを叩く棒迄添へてゐるので、益變つた室だと思つた。

すると間の襖を開けて隣座敷から黒子のある主人が出て來た。「能く御出でです」と云つたな

り、すぐ敬太郎の鼻の先に坐つたが、其調子は決して愛嬌のある方ではなかつた。唯何處かおつとりして居るので、相手に餘り重きを置かない所が、却て敬太郎に樂な心持を與へた。それで火鉢一つを境に、顔と顔を突き合はせながら、敬太郎は別段氣が詰まる思ひもせずにおられた。其上彼は此間の晩、慥かに自分の顔を此所の主人に覺えられたに違ひないと思ひ込んでゐたにも拘らず、今會つて見ると、覺えて居るのだから、居ないのだから、平然としてそんな素振は、口にも色にも出さないで、彼は猶更氣兼ねの必要を感じなくなつた。最後に主人は昨日雨天のため面會を謝絶した理由も言譯も一言も述べなかつた。述べ度くなかつたのか、述べなくつても構はないと認めてゐたのか、夫すら敬太郎には丸で判断が附かなかつた。

話しは自然の順序として、紹介者になつた田口の事から始まつた。「貴方は是から田口に使つて貰はうといふのでしたね」といふのを冒頭に、主人は敬太郎の志望だの、卒業の成績だのを一通り聞いた。夫から彼の未だ嘗て考へた事もない、社會觀とか人生觀とかいふ小六づかしい方面の問題を、時々持ち出して彼を苦しめた。彼は其時心のうちで、此松本といふ男は世に著はれない學者の一人なのではなからうかと疑つた位、妙な理窟をちら／＼と閃めかされた。夫計りでなく、松本は田口を捕まへて、役には立つが頭の成つてゐない男だと罵つた。

「第一あ、忙しくしてゐるあ、頭の中に組織立つた考への出来る閑がないから駄目です。彼奴の脳と來たら、年が年中摺鉢の中で、播木に攪き廻されてる味噌見たやうなもんでね。あんまり活動し過ぎて、何の形にもならない」

敬太郎には何故此主人が田口に對して斯う迄惡體を吐くのか薩張り譯が分らなかつた。けれども彼の不思議に感じたのは、是程の激語を放つ主人の態度なり口調なりに、毫も毒々しい所だの、小惡らしい點だのの見えない事であつた。彼の罵る言葉は、人を罵つた經驗を知らない様な落附きを具へた彼の聲を通して、敬太郎の耳に響くので、敬太郎も強く反抗する氣になれなかつた。たゞ一種變つた人だといふ感じが新たに刺激を受ける丈であつた。

「夫でゐて、碁を打つ、謠を謠ふ。色々な事を遣る。尤も何れも下手糞なんですが」

「夫が餘裕のある證據ぢやないでせうか」

「餘裕つて君。——僕は昨日雨が降るから天氣の好い日に來て呉れつて、貴方を断つたでせう。其譯は今云ふ必要もないが、何しろそんな我儘な断り方が世間にあると思ひますか。田口だつたら左う云ふ断り方は決して出来ない。田口が好んで人に會ふのは何故だと云つて御覽。田口は世の中を求める所のある人だからです。つまり僕の様な高等遊民でないからです。いくら他の感情

を害したつて、困りやしないといふ餘裕がないからです」

十

「實は田口さんからは何も伺はずに參つたのですが、今御使ひになつた高等遊民といふ言葉は本當の意味で御用ひなのですか」

「文字通りの意味で僕は遊民ですよ。何故」

松本は大きな火鉢の縁へ兩腕を掛けて、其一方の先にある拳骨を頸の支へにしながら敬太郎を見た。敬太郎は初對面の客を客と感じてゐないらしい此松本の様子に、成程高等遊民の本色があるらしくも思つた。彼は煙草道樂と見えて、今日は大きな丸い雁首の附いた木製の西洋パイプを口から離さずに、時々思ひ出した様な濃い煙を、まだ火の消えてゐない證據として、狼煙の如くぱつ／＼と揚げた。其煙が彼の顔の傍で何時の間にか消えて行く具合が、何處にも縮りを設ける必要を認めてゐないらしい彼の眼鼻と相待つて、今迄經驗した事のない一種靜かな心持を敬太郎に與へた。彼は少し薄くなりかゝつた髪を、頭の真中から左右へ分けてゐるので、平たい頭が猶の事尋常に落ち附いて見えた。彼は又普通世間の人を着ない様な茶色の無地の羽織を着て、同じ

色の上足袋を白の上に重ねてゐた。其色がすぐ坊主の法衣を聯想させる所が又變に特別な男らしく敬太郎の眼に映つた。自分で高等遊民だと名乗るものに會つたのは是が始めてではあるが、松本の風采なり態度なりが、如何にもさう云ふ階級の代表者らしい感じを、少し不意を打たれた氣味の敬太郎に投げ込んだのは事實であつた。

「失禮ながら御家族は大勢で入らつしやいますか」

敬太郎は自ら高等遊民と稱する人に對して、何ういふ譯か先づ斯ういふ間が掛けて見たかつたすると松本は「え、子供が澤山ゐます」と答へて、敬太郎の忘れ掛かつてゐたパイプからぱつと烟を出した。

「奥さんは……」

「妻は無論居ます。何故ですか」

敬太郎は取り返しのない愚な問を出して、始末に行かなくなつたのを後悔した。相手が夫程感情を害した様子を見せないしろ、不思議さうに自分の顔を眺めて、解決を豫期してゐる以上は、何とか云はなければ濟まない場合になつた。

「貴方の様な方が、普通の人間と同じ様に、家庭的に暮らして行く事が出来るかと思つて一寸

伺つた迄です」

「僕が家庭的に……。何故。高等遊民だからですか」

「さう云ふ譯でも無いんですが、何だかそんな心持がしたから一寸伺つたのです」

「高等遊民は田口などよりも家庭的なものですよ」

敬太郎はもう何も云ふ事がなくなつて仕舞つた。彼の頭腦の中では、返事に行き詰まつた困却と、此所で問題を變へようとする努力と、これを緒口に、革の手袋を穿めた女の關係を確めたい希望が三つ一所に働いたので、元から夫程秩序の立つてゐない彼の思想に猶更暗い影を投げた。けれど松本はそんな事に丸で注意しない風で、困つた敬太郎の顔を平氣に眺めてゐた。若し是が田口であつたなら手際よく相手を打ち据ゑる代りに、打ち据ゑるとすぐ向うから局面を變へて呉れて、相手に見苦しい立往生などは決してさせない鮮やかな腕を有つてゐるのにと敬太郎は思つた。氣は置けないが、人を取扱ふ點に於て、全く牙えた熟練を缺いてゐる松本の前で、敬太郎は圖らず二人の相違を認めた様な氣がしてゐると、松本は偶然「貴方は左ういふ問題を考へて見た事がないやうですね」と聞いて呉れた。

「え、丸で考へて居ません」

「考へる必要は有りませぬね。一人で下宿してゐる以上は。けれども幾何一人だつて、廣い意味での男對女の問題は考へるでせう」

「考へると云ふより寧ろ興味があるといつた方が適當かも知れません。興味なら無論有ります」

十一

二人は人間として誰しも利害を感ずる此問題に就いて暫時話した。けれども年齒の違ひだか段の違ひだか、松本の云ふ事は肝心の肉を抜いた骨組丈を並べて見せる様で、敬太郎に對しては彼の血の中迄這入り込んで來て、共に流れなければ已まない程の切實な勢ひを丸で持つてゐなかつた。其代り敬太郎の秩序立たない斷片的の言葉も口を出るとすぐ熱を失つて、少しも松本の胸に徹らないらしかつた。

斯んな縁遠い話をしてゐる中で、たゞ一つ敬太郎の耳に新しく響いたのは、露西亞の文學者のゴリキとかいふ人が、自分の主張する社會主義とかを實行する上に、資金の必要を感じて、それを調達のため細君同伴で亞米利加へ渡つた時の話であつた。其時ゴリキは大變な人氣を一身に集めて、招待やら驪迎やらに忙殺される程の景氣のうちに、自分の目的を苦もなく着々と進

行させつゝあつた。所が彼の本國から伴つて來た細君といふのが、本當の細君でなくて單に彼の情婦に過ぎないといふ事實が何處からか曝露した。すると今迄狂熱に達してゐた彼の名聲が、忽ちどさりと落ちて、廣い新大陸に誰一人として彼と握手するものが無くなつて仕舞つたので、ゴリキは已むを得ず其儘亞米利加を去つた。といふのが筋であつた。

「露西亞と亞米利加では是丈男女關係の解釋が違ふんです。ゴリキの遣り口は露西亞なら殆ど問題にならない位些細な事件なんでせうがね。下らない」と松本は全く下らなさうな顔をした。

「日本は何方でせう」と敬太郎は聞いて見た。

「まあ露西亞派でせうね。僕は露西亞派で澤山だ」と云つて、松本は又狼烟の様な濃い烟をばつと口から吐いた。

此所迄來て見ると、此間の女の事を尋ねるのが敬太郎に取つて少しも苦にならない様な氣がし出した。

「先達ての晩神田の洋食店で私は貴方に御目に懸かつたと思ふんですが」

「え、會ひましたね。よく覚えてゐます。夫から歸りにも電車の中で會つたぢやありませんか。君も江戸川迄乗つた様だが、あすこいらに下宿でもしてゐるんですか。あの晩は雨が降つて困つ

たでせう」

松本は果して敬太郎を記憶してゐた。夫を初めから口に出すでもなく、今になつて漸く氣が附いた振をするでもなく、話しても可し話さないでも可しと云つた風の彼の態度が、無邪氣から出るのか、度胸から出るのか、又は鷹揚な彼の生れ附きから出るのか、敬太郎には一寸判断しかねた。

「御伴れが御有りの様でしたか」

「え、別嬪を一人伴れてゐました。貴方は慥か一人でしたね」

「一人です。貴方も御歸りには御一人ぢやなかつたですか」

「左うです」

一寸はさ／＼進んだ問答は此所へ來たらびたりと留まつて仕舞つた。松本が又女の事を云ひ出すかと思つて待つてゐると、「貴方の下宿は牛込ですか、小石川ですか」と丸で無關係の問を敬太郎は掛けられた。

「本郷です」

松本は腑に落ちない顔をして敬太郎を見た。本郷に住んでゐる彼が、何故江戸川の終點迄乗つ

たのか、其説明を聞きたいと云はぬ許りの松本の眼附を見た時、敬太郎は面倒だから此所で一心持よく萬事を打ち明けて仕舞はうと決心した。もし怒られたら、詫る丈で、詫つて聞かれなければ、御辭儀を丁寧にして歸れば好からうと覺悟を極めた。

「實は貴方の後を跟けてわざ／＼江戸川迄來たのです」と云つて松本の顔を見ると、案外にも豫期した程の變化も起らないので、敬太郎は先づ安心した。

「何の爲に」と松本は殆ど何時もの様な緩い口調で聞き返した。

「人から頼まれたのです」

「頼まれた？誰に」

松本は始めて、少し驚いた聲の中に、並より強いアクセントを置いて、斯う聞いた。

十一

「實は田口さんに頼まれたのです」

「田口とは。田口要作ですか」

「左うです」

「だつて君はわざ／＼田口の紹介状を持つて僕に會ひに来たんぢやありませんか」

斯う一句々々問ひ詰められて行くよりは、自分の方で一思ひに今迄の経過を話して仕舞ふ方が
樂な氣がするので、敬太郎は田口の速達便を受取つて、すぐ小川町の停留所へ見張りに出た冒険
の第一節目から始めて、電車が江戸川の終點に着いた後の雨の中の立往生に至る迄の顛末を包ま
ず打ち明けた。固よりたゞ筋の通る丈を目的に、誇張は無論布衞の煩はしさも出来る限り避けた
ので、時間が夫程掛からなかつた所爲か、松本は話しの進行してゐる間一口も敬太郎を遮らな
つた。話しが濟んでからも、直ぐとは聲を出す様子は見えなかつた。敬太郎は主人の此沈黙を、
感情を害した結果ではなからうかと推察して、怒り出されないうちに早く詫るに越した事はない
と思ひ定めた。すると主人の方から突然口を利き始めた。

「どうも怪しからん奴だね、あの田口といふ男は。夫に使はれる君も亦君だ。餘つ程の馬鹿だ
ね」

斯ういつた主人の顔を見ると、呆れ返つてゐる風は誰の目にも着くが、怒氣を帯びた様子は比
較的何處にも表はれてゐないので、敬太郎は寧ろ安心した。此際馬鹿と呼ばれる位の事は、彼に
取つて何でもなかつたのである。

「何うも悪い事をしました」

「詫つて貰ひたくも何ともない。只君が御氣の毒だから云ふのですよ。あんな者に使はれて」

「それ程悪い人なんですか」

「一體何の必要があつて、そんな愚な事を引き受けたのです」

物數奇から引き受けたといふ言葉は、此場合何うしても敬太郎の口へは出て來なかつた。彼は
已むを得ず、衣食問題の必要上何うしても田口に頼らなければならぬ事情があるので、面白く
ないとは知りながら、つい承諾したのだといふ風な答をした。

「衣食に困るなら仕方がないが、もう止した方が可いですよ。餘計な事ぢやありませんか、寒
いのに雨に降られて人の後を跟けるなんて」

「私も少し懲りました。是からはもう遣らない積りです」

此述懐を聞いた松本は何とも云はず、たゞ苦笑ひをしてゐた。それが敬太郎には輕蔑の意味
にも憐愍の意味にも取れるので、彼は何れにしても甚だ肩身の狭い思ひをした。

「貴方は僕に對して濟まん事をした様な風をしてゐるが、實際左うなのですか」
根本義に溯つたら夫程に感じてゐない敬太郎も斯う聞かれると、行き掛り上左うだと思はざる

を得なかつた。又さう答へざるを得なかつた。

「ぢや田口へ行つてね。此間僕の伴れてゐた若い女は高等淫賣だつて、僕自身がさう保証したと云つて呉れ玉へ」

「本當にさういふ種類の女なんですか」

敬太郎は一寸驚かされた顔をして斯う聞いた。

「まあ何でも好いから、高等淫賣だと云つて呉れ玉へ」

「はあ」

「はあぢや不可ない、慥かに左う云はなくつちや。云へますか、君」

敬太郎は現代に教育された青年の一人として、斯ういふ意味の言葉を、年長者の前で口にする無遠慮を憚る程の男ではなかつた。けれども松本が強ひて此四字を田口の耳へ押し込めようとする奥底には、何か不愉快な或物が潜んでゐるらしく思はれるので、さう軽々しい調子で引き受ける氣も起らなかつた。彼が挨拶に困つて六づかしい顔をしてゐると、それを見た松本は「何、君心配しないで可いですよ。相手が田口なもの」と云つたが、暫くして漸と氣が附いた様に「君は僕と田口との關係をまだ知らないでしたね」と聞いた。敬太郎は「まだ何も知りません」と答へた。

十三

「其關係を話すと、君が田口に向つてあの女の事を高等淫賣だと云ふ勇氣が出悪くなる丈だから語り僕には損になるんだが、何時迄罪もない君を馬鹿にするのも氣の毒だから、聞かして上げよう」

斯ういふ前置きを置いた上、松本は田口と自分が社會的に何う交渉してゐるかを説明して呉れた。其説明は最も簡単に済む丈に最も敬太郎を驚かした。それを一言でいふと、田口と松本は近い親類の間柄だつたのである。松本に二人の姉があつて、一人が須永の母、一人が田口の細君、といふ互の縁續きを始めて呑み込んだ時、敬太郎は、田口の義弟に當たる松本が、叔父といふ資格で、彼の娘と時間を極めて停留所で待ち合はした上、ある料理店で會食したといふ事實を、世間の出来事のうちに最も平凡を極めたものの一つの様に見た。それを込み入つた文でも隠してゐるやうに、一生懸命に自分の燃やした陽炎を散らつかせながら、後を追つ掛けて歩いたのが、左も左も馬鹿々々しくなつて來た。

「御嬢さんは何で又彼處迄出張つてゐたんですか。たゞ私を釣る爲なんですか」

「何須永へ行つた歸りなんです。僕が田口で話してゐると、彼の子が電話を掛けて、四時半頃彼所で待ち合はせてゐるから、一寸歸りに降りて呉れといふんです。面倒だから止さうと思つたけれども、是非何とか蚊とかいふから、降りた所がね。今朝御父さんから聞いたら、叔父さんが御歳暮に指環を買つて遣ると云つてゐたから、停留所で待ち伏せをして、逃がさない様に一所に行つて買つて貰へると云はれたから先刻から此所で待つてゐたんだつて、人の知りもしないのに、一人で勝手な請求を持ち出して中々動かない。仕方がないから、まあ西洋料理位で胡魔化して置かうと思つて、とう／＼寶亭へ連れ込んだんです。——實に田口といふ男は篋棒だね。わざ／＼夫程の手續を掛けて、何もそんな下らない真似をするにも當たらないうぢやないか。騙された君よりも餘つ程田口の方が篋棒ですよ」

敬太郎には騙された自分の方が遙かに愚物に思はれた。さうと知つたら、探偵の結果を報告する時にも、もう少しは手加減が出来たものと、自ら赧い顔もしなければならなかつた。

「貴方は丸で御承知ない事なんですなね」

「知るものかね、君。いくら高等遊民だつて、そんな暇の出る筈がないぢやありませんか」

「御嬢さんは何うでせう。多分御存じなんだらうと思ひますが」

「左うさ」と云つて松本はしばらく思案してゐたが、やがて判切した口調で、「いや知るまい」と斷言した。「あの篋棒の田口に、一つ取柄があると云へば云はれるのだが、彼の男はね、幾何悪戯をしても、其悪戯をされた當人が、もう少しで恥を掻きさうな際どい時になると、びたりと留めて仕舞ふか、又は自分が其場へ出て来て、當人の體面に拘らない内に綺麗に始末を附ける。其所へ行くと篋棒には違ひないが感心な所があります。つまり遣り方は悪辣でも、結末には妙に温かい情の籠もつた人間らしい點を見せて來るんです。今度の事でも恐らく自分一人で呑み込んでゐる丈でせう。君が僕の家へ來なかつたら、僕は屹度此事件を知らずに濟むんだつたらう。自分の娘にだつて、君の馬鹿を證明する様な策略を、始めから吹聴する程無慈悲な男ぢやない。だから序に悪戯も止せば可いんだがね、夫が何うしても止せない所が、要するに篋棒ですよ」

田口の性格に對する松本の斯ういふ批評を黙つて聞いてゐた敬太郎は、自分の馬鹿な振舞を顧る後悔よりも、自分を馬鹿にした責任者を怨むよりも、寧ろ悪戯をした田口を頼もしいと思ふ心が、わが胸の裏で一番勝ちを制したのを自覺した。が、果して左ういふ人ならば、何故彼の前に出て話しをしてゐる間に、あんな窮屈な感じが起るのだらうといふ不審も自づと萌さない譯に行

かなかつた。

「貴方の御話で大分田口さんが解つて来た様ですが、私はあの方の前へ出ると、何だか気が落ち附かなくつて變に苦しいです」

「そりや向うでも君に氣を許さないからさ」

十四

斯う云はれて見ると、田口が自分に氣を許してゐない眼遣ひやら言葉附やらがあり／＼と敬太郎の胸に、疑ひもない記憶として讀まれた。けれども田口程の老巧のものに、何で學校を出た許りの青臭い自分が、夫程苦になるのか、敬太郎は全く合點が行かなかつた。彼は見た通りの儘の自分で、誰の前へ出て通用するものと今迄固く己を信じてゐたのである。彼はたゞ斯様な青年として、他に憚られたり氣を置かれたりする資格さへない様に自分を見縊つてゐた丈に、経験の程度の違ふ年長者から、自分の思はくと違ふ待遇を受けるのを寧ろ不思議に考へ出した。

「私はそんな裏表のある人間と見えますかね」

「何うだか、そんな細かい事は初めて會つた丈ぢや分らないですよ。然し有つても無くつても、

僕の君に對する待遇には一向關係がないから可いぢやありませんか」

「けれども田口さんから左う思はれちや……」

「田口は君だから左う思ふんぢやない、誰を見ても左う思ふんだから仕方がないさ。あゝして長い間人を使つてゐるうちには、大分騙されなくつちやならないからね。偶に自然其儘の美しい人間が自分の前に現はれて來ても、矢つ張り氣が許せないんです。夫があゝ云ふ人の因果だと思へば夫で好いぢやないか。田口は僕の義兄だから、斯う云ふと變に聞こえるが、本來は美質なんです。決して悪い男ぢやない。唯あゝして何年となく事業の成功といふ事丈を重に眼中に置いて、世の中と闘つてゐるものだから、人間の見方が妙に片寄つて、此奴は役に立つだらうかとか、此奴は安心して使へるだらうかとか、まあそんな事ばかり考へてゐるんだね。あゝなると女に惚れられても、是や自分に惚れたんだらうか、自分の持つてゐる金に惚れたんだらうか、直ぐ其所を疑らなくつちや居られなくなるんです。美人でさへ左うなんだから君見たいな野郎が窮屈な取扱ひを受けるのは當然だと思はなくつちや不可ない。其所が田口の田口たる所なんだから」

敬太郎は此批評で田口といふ男が自分にも判切呑み込めた様な氣がした。けれども斯ういふ風に一々彼を肯はせる程の判断を、彼の頭に鐵槌で叩き込む様に入れて呉れる松本は抑何者だら

うか、其點になると敬太郎は依然として茫漠たる雲に對する思ひがあつた。批評に上らない前の田口でさへ、此男よりは却て活きた人間らしい氣がした。

同じ松本に就いて見ても、此間の晩神田の洋食屋で、田口の娘を相手にして珊瑚樹の珠が何うしたとか斯うしたとか云つてゐた時の方が、餘つ程活きて動いてゐた。今彼の前に坐つてゐるのは、大きなパイプを銜へた木像の靈が、口を利くと同じ様な感じを敬太郎に與へる丈なので、彼はたゞ其人の本體を髣髴するに苦しむに過ぎなかつた。彼が一方では明瞭な松本の批評に心服しながら、一方では松本の何者なるかを斯ういふ風に考へつゝ、自分は頭腦の悪い、直覺の鈍い、世間並以下の人物ぢやあるまいかと疑り始めた時、此漠然たる松本が又口を開いた。

「夫でも田口が篋棒を遣つて呉れた爲、君は却て仕合せをした様なものですね」

「何故ですか」

「屹度何か位置を拵へて呉れますよ。是なりで放つて置きや田口でも何でもありません。夫は責任を持つて受合つて上げて宜い。が、詰らないのは僕だ。全く探偵のされ損だから」

二人は顔を見合はせて笑つた。敬太郎が丸い更紗の座蒲團の上から立ち上がった時、主人はわざわざ玄關迄送つて出た。其所に飾つてあつた墨繪の鶴の衝立の前に、瘠せた高い身體をしぼら

く佇まして、靴を穿く敬太郎の後姿を眺めてゐたが、「妙な洋杖を持つてゐますね。一寸拜見」と云つた。さうして夫を敬太郎の手から受取つて、「へえ、蛇の頭だね。中々旨く刻つてある。買つたんですか」と聞いた。「いえ素人が刻つたのを貰つたんです」と答へた敬太郎は、夫を振りながら又矢來の坂を江戸川の方へ下つた。

雨の降る日

雨の降る日に面會を謝絶した松本の理由は、遂に當人の口から聞く機會を得ずに久しく過ぎた。敬太郎も其内に取り紛れて忘れて仕舞つた。不圖それを耳にしたのは、彼が田口の世話で、ある地位を得たのを縁故に、遠慮なく同家へ出入の出来る身になつてからの事である。其時分の彼の頭には、停留所の經驗が既に新しい匂ひを失ひ掛けてゐた。彼は時々須永から其話を持ち出されては苦笑するに過ぎなかつた。須永はよく彼に向つて、何故其前に僕の所へ来て打ち明けなかつたのだと詰問した。内幸町の叔父が人を擔ぐ位の事は、母から聞いて知つて居る筈なのに、奢める事もあつた。仕舞には、君があんまり色氣が有り過ぎるからだと言ひ出した。敬太郎は其度に「馬鹿云へ」で通してゐたが、心の内では毎も、須永の門前で見た後姿の女を思ひ出した。其女が取りも直さず停留所の女であつた事も思ひ出した。さうして何處か遠くの方で氣恥づかしい心持がした。其女の名が千代子で、其妹の名が百代子である事も、今の敬太郎には珍らしい

報知ではなかつた。

彼が松本に會つて、凡て内幕の消息を聞かされた後、田口へ顔を出すのは多少極りの悪い思ひをする丈であつたに拘らず、顔を出さなければ締め括りが附かないといふ行き掛りから、笑はれるのを覺悟の前で、又田口の門を潜つた時、田口は果して大きな聲を出して笑つた。けれども其笑ひの中には己の機略に誇る高慢の響よりも、迷つた人を本來の路に返して遣つた喜びの勝利が聞こえてゐるのだと敬太郎には解釋された。田口は其時訓戒の爲だとか教育の方法だとかいつた風の、恩に着せた言葉を一切使はなかつた。たゞ悪意でした譯でないから、怒つては不可ないと斷つて、すぐ其場で相當の位置を拵へて呉れる約束をした。それから手を鳴らして、停留所に松本を待ち合はせてゐた方の姉娘を呼んで、是が私の娘だとわざ／＼紹介した。さうして此方は市さんの御友達だよと云つて敬太郎を娘に教へてゐた。娘は何で斯ういふ人に引き合はされるのか、一寸解しかねた風をしながら、極めて餘所々々しく丁寧な挨拶をした。敬太郎が千代子といふ名を覺えたのは其時の事であつた。

是が田口の家庭に接觸した始めての機會になつて、敬太郎は其後も用事なり訪問なりに縁を藉りて、同じ人の門を潜る事が多くなつた。時々は玄關脇の書生部屋へ這入つて、嘗て電話で口を

利き合つた事のある書生と世間話さへした。奥へも無論通る必要が生じて来た。細君に呼ばれて内向きの用を足す場合もあつた。中學校へ行く長男から英語の質問を受けて窮する事も稀ではなかつた。出入りの度数が斯う重なるにつれて、敬太郎が二人の娘に接近する機会も自然多くなつて来たが、一種間の延びた彼の調子と、比較的引き締まつた田口の家風と、差向ひで坐る時間の缺乏とが、容易に打ち解け難い境遇に彼等を置き去りにした。彼等の間に取り換はされた言葉は、無論形式丈を重んずる堅苦しいものではなかつたが、大抵は五分と掛からない當用に過ぎないので、親しみは夫程出る暇がなかつた。彼等が公然と膝を突き合はせて、例になく長い時間を、遠慮の交らない談話に更かしたのは、正月半ばの歌留多會の折であつた。其時敬太郎は千代子から、貴方随分鈍いのねと云はれた。百代子からは、妾貴方と組むのは厭よ、負けるに極まつてるからと怒られた。

夫から又一ヶ月程経つて、梅の音信の新聞に出る頃、敬太郎はある日曜の午後を、久し振に須永の二階で暮らした時、偶然遊びに来てゐた千代子に出逢つた。三人して夫から夫へと纏まらな話を續けて行くうちに、不圖松本の評判が千代子の口に出つた。

「あの叔父さんも随分變つてるのね。雨が降ると一しきり能く御客を斷つた事があつてよ。今

でも左うか知ら」

二

「實は僕も雨の降る日に行つて斷られた一人なんだが……」と敬太郎が云ひ出した時、須永と千代子は申し合はせた様に笑ひ出した。

「君も随分運の悪い男だね。大方例の洋杖を持つて行かなかつたらう」と須永は調戲ひ始めた。

「だつて無理だわ、雨の降る日に洋杖なんか持つて行けつたつて。ねえ田川さん」
此理攻めの辯護を聞いて、敬太郎も苦笑した。

「一體田川さんの洋杖つて、何んな洋杖なの。妾一寸見たいわ。見せて頂戴、ね、田川さん。下へ行つて見て来てても好くつて」

「今日は持つて来ません」

「何故持つて来ないの。今日は貴方夫でも好い御天氣よ」

「大事な洋杖だから、いくら好い御天氣でも、只の日には持つて出ないんだと云」

「本當？」

「まあ其んなものです」

「ぢや旗日に丈突いて出るの」

敬太郎は一人で二人に當たつてゐるのが少し苦しくなつた。此次内幸町へ行く時は、屹度持つて行つて見せるといふ約束をして漸く千代子の追窮を逃れた。其代り千代子から何故松本が雨の降る日に面會を謝絶したかの原因を話して貰ふ事にした。

夫は珍らしく秋の日の曇つた十一月のある午過ぎであつた。千代子は松本の好きな雲丹を母から言附かつて矢來へ持つて來た。久し振に遊んで行かうか知らと云つて、わざ／＼乗つて來た車迄返して、緩り腰を落ち附けた。松本には十三になる女を頭に、男、女、男と互違ひに順序よく四人の子が揃つてゐた。是等は皆二つ違ひに生れて、何れも世間並に成長しつゝあつた。家庭に華やかな匂を着ける此生き／＼した裝飾物の外に、松本夫婦は取つて二つになる宵子を、指環に嵌めた眞珠の様に大事に抱いて離さなかつた。彼女は眞珠の様に透明な青白い皮膚と、漆の様に濃い大きな眼を有つて、前の年の雛の節句の前の宵に松本夫婦の手に落ちたのである。千代子は五人のうちで、一番この子を可愛がつてゐた。來る度に屹度何か玩具を買つて來て遣つた。或時

は餘り多量に甘いものを當てがつて叔母から怒られた事さへある。すると千代子は、大事さうに宵子を抱いて縁側へ出て、ねえ宵子さんと云つては、わざと二人の親しい様子を叔母に見せた。叔母は笑ひながら、何だね喧嘩でもしやしまいしと云つた。松本は、御前そんなに其子が好きな御祝ひの代りに上げるから、嫁に行くとき持つて御出でと調戲つた。

其日も千代子は坐ると直ぐ宵子を相手にして遊び始めた。宵子は生れてからつひぞ月代を剃つた事がないので、頭の毛が非常に細く柔らかに延びてゐた。さうして皮膚の青白い所爲か、其髪の色が日光に照らされると、潤澤の多い紫を含んでひか／＼縮れ上がつてゐた。「宵子さんかんかん結つて上げませう」と云つて、千代子は丁寧に其縮れ毛に櫛を入れた。それから乏しい片鬢を一束に割いて、其根元に赤いリボンを括り附けた。宵子の頭は御供の様に平に丸く開いてゐた。彼女は短かい手をやつと其御供の片隅へ乗せて、リボンの端を抑へながら、母のゐる所迄よたよた歩いて來て、イボン／＼と云つた。母があゝ好くかん／＼が結へましたねと賞めると、千代子は嬉しさに笑ひながら、子供の後姿を眺めて、今度は御父さんの所へ行つて見せて入らつしやいと指圖した。宵子は又足元の危い歩き附きをして、松本の書齋の入口迄來て、四つ這ひになつた。彼女が父に禮をするときには必ず四つ這ひになるのが例であつた。彼女は其所で自分の尻を

出来る丈高く上げて、御供の様な頭を敷居から二三寸の所迄下げて、又イボン／＼と云つた。書見を一寸已めた松本が、あゝ好い頭だね、誰に結つて貰つたのと聞くと、宵子は頸を下げた儘、ちい／＼と答へた。ちい／＼と云ふのは、舌の廻らない彼女の千代子を呼ぶ常の符徴であつた。後に立つて見てゐた千代子は小さい唇から出る自分の名前を聞いて、又嬉しさに大きな聲で笑つた。

三

其内子供がみんな學校から歸つて來たので、今迄赤いリボンに占領されてゐた家庭が、急に幾色かの華やかさを加へた。幼稚園へ行く七つになる男の子が、巴の紋の附いた陣太鼓の様なものを持つて來て、宵子さん叩かして上げるから御出でと連れて行つた。其時千代子は巾着の様な恰好をした赤い毛織の足袋が廊下を動いて行く影を見詰めてゐた。其足袋の紐の先には丸い房が附いてゐて、それが小さな足を運ぶ度にばつ／＼と飛んだ。

「あの足袋は慥か御前が編んで遣つたのだつたね」
「えゝ可愛らしいわね」

千代子は其所へ坐つて、しばらく叔父と話してゐた。其うちに曇つた空から淋しい雨が落ち出したと思ふと、それが見る／＼音を立てて、空坊主になつた梧桐をしたゝか濡らし始めた。松本も千代子も申し合はせた様に、硝子越しの雨の色を眺めて、手焙に手を翳した。

「芭蕉があるもんだから餘計音がするのね」

「芭蕉はよく持つものだよ。此間から今日は枯れるか、今日は枯れるかと思つて、毎日斯うして見てゐるが中々枯れない。山茶花が散つて、青桐が裸になつても、まだ青いんだからなあ」

「妙な事に感心するのね。だから恒三は閑人だつて云はれるのよ」

「其代り御前の御父さんには芭蕉の研究なんか死ぬ迄出来つこない」

「爲たかないわ、そんな研究なんか。だけど叔父さんは内の御父さんよりか全く學者ね。妾本當に敬服してよ」

「生意氣云ふな」

「あら本當よ貴方。だつて何を聞いても知つてゐるんですもの」

二人が斯んな話しをしてゐると、只今此方が御見えになりましたと云つて、下女が一通の紹介状の様なものを持つて來て松本に渡した。松本は「千代子待つて御出で。今に又面白い事を教へ

て遣るから」と笑ひながら立ち上がった。

「厭よ又此間見たいに、西洋煙草の名なんか澤山覚えさせちや」

松本は何も答へずに客間の方へ出て行つた。千代子も茶の間へ取つて返した。其所には雨に降り込められた空の光を補ふため、もう電氣燈が點つてゐた。臺所では既に夕飯の支度を始めた。見えて、瓦斯七輪が二つとも忙しく青い燄を吐いてゐた。やがて子供は大きな食卓に二人づゝ向ひ合せて坐つた。宵子丈は別に下女が附いて食事をするのが例になつてゐるので、此晩は千代子が其役を引き受けた。彼女は小さい朱塗の椀と小皿に盛つた魚肉とを盆の上に載せて、横手にある六疊へ宵子連れ込んだ。其所は家のものの着更へをする爲に多く用ひられる室なので、箆筒が二つと姿見が一つ、壁から飛び出した様に据ゑてあつた。千代子は其姿見の前に玩具の様な椀と茶碗を載せた盆を置いた。

「さあ宵子さん、まんまよ。御待ち遠さま」

千代子が粥を一匙宛掬つて口へ入れて遣る度に、宵子は甘い〜だの、頂戴々々だの色々な藝を強ひられた。仕舞に自分一人で食べると云つて、千代子の手から匙を受け取つた時、彼女は又丹念に匙の持ち方を教へた。宵子は固より極めて短かい單語より外に發音出来なかつた。さう

持つのではないと叱られると、屹度御供の様な平たい頭を傾げて、斯う？斯う？と聞き直した。それを千代子が面白がつて、何遍も繰り返さしてゐるうちに、何時もの通り斯う？と半分言ひ懸けて、心持ち横にした大きな眼で千代子を見上げた時、突然右の手に持つた匙を放り出して、千代子の膝の前に俯伏せになつた。

「何うしたの」

千代子は何の氣も附かずに宵子を抱き起した。すると丸で眠つた子を抱へた様に、たゞ手應へがぐたりとした丈なので、千代子は急に大きな聲を出して、宵子さん宵子さんと呼んだ。

四

宵子はうと〜寐入つた人の様に眼を半分閉ぢて口を半分開けた儘千代子の膝の上に支へられた。千代子は平手で其背中を二三度叩いたが、何の效目もなかつた。

「叔母さん、大變だから來て下さい」

母は驚いて箸と茶碗を放り出したなり、足音を立てて這入つて來た。何うしたのと云ひながら、電燈の眞下で顔を仰向けにして見ると、唇にもう薄く紫の色が注してゐた。口へ掌を當てがつて

も、呼吸の通ふ音はしなかつた。母は呼吸の塞まつた様な苦しい聲を出して、下女に濡手拭を持つて來させた。それを宵子の額に載せた時、「脈はあつて」と千代子に聞いた。千代子はすぐ小さい手頸を握つたが脈は何處にあるか丸で分らなかつた。

「叔母さん何うしたら好いでせう」と蒼い顔をして泣き出した。母は茫然と其所に立つて見てゐる子供に、「早く御父さんと呼んで入らつしやい」と命じた。子供は四人とも客間の方へ馳け出した。其足音が廊下の端づれで止まつたと思ふと、松本が不思議さうな顔をして出て來た。「何うした」と云ひながら、蔽ひ被さる様に細君と千代子の上から宵子を覗き込んだが、一目見ると急に眉を寄せた。

「醫者は……」

醫者は時を移さず來た。「少し模様が變です」と云つてすぐ注射をした。然し何の效能もなかつた。「駄目でせうか」といふ苦しく張り詰めた問が、固く結ばれた主人の唇を洩れた。さうして絶望を怖れる怪しい光に充ちた三人の眼が一度に醫者の上に据ゑられた。鏡を出して瞳孔を眺めてゐた醫者は、此時宵子の裾を捲くつて肛門を見た。

「是では仕方がありません。瞳孔も肛門も開いて仕舞つてゐますから。何うも御氣の毒です」

醫者は斯う云つたが又一筒の注射を心臓部に試みた。固より夫は何の手段にもならなかつた。松本は透き徹る様な娘の肌針の突き刺される時、自ら眉間を險しくした。千代子は涙をぼろぼろ膝の上に落とした。

「病因は何でせう」

「何うも不思議です。たゞ不思議といふより外に云ひ様がないやうです。何う考へても……」と醫者は首を傾けた。「辛子湯でも使はして見たら何うですか」と松本は素人料簡で聞いた。「好いでせう」と醫者はすぐ答へたが、其顔には毫も獎勵の色が出なかつた。

やがて熱い湯を盥へ汲んで、湯氣の濛々と立つ真中へ辛子を一袋空けた。母と千代子は黙つて宵子の着物を取り除けた。醫者は熱湯の中へ手を入れて、「もう少し注水めませう。餘り熱いと火傷でもなされると不可せんから」と注意した。

醫者の手に抱き取られた宵子は、湯の中に五六分浸けられてゐた。三人は息を殺して柔らかな皮膚の色を見詰めてゐた。「もう好いでせう。餘り長くなると……」と云ひながら、醫者は宵子を盥から出した。母はすぐ受取つてタオルで丁寧に拭いて元の着物を着せて遣つたが、ぐたく／＼になつた宵子の様子に、些とも前と變りがないので、「少しの間此儘寐かして置いて遣りませう」

と恨めしさうに松本の顔を見た。松本は夫が可からうと答へた儘、又座敷の方へ取つて返して、來客を玄關に送り出した。

小さい蒲團と小さい枕がやがて宵子の爲に戸棚から取り出された。其上に常の夜の安らかな眠りに落ちたとしか思へない宵子の姿を眺めた千代子は、わつと云つて突伏した。

「叔母さん飛んだ事をしました……」

「何も千代ちゃんが生かした譯ぢやないんだから……」

「でも妾が御飯を喫べさしてゐたんですから……叔父さんにも叔母さんにも洵に濟みません」千代子は途切れ／＼の言葉で、先刻自分が夕飯の世話をしてゐた時の、平生と異なる元氣な様子を、何遍も繰り返して聞かした。松本は腕組をして「何うも矢つ張り不思議だよ」と云つたが、「おいお仙、此所へ寐かして置くのは可哀さうだから、あつちの座敷へ連れて行つてやらう」と細君を促した。千代子も手を貸した。

五

手頃な屏風がないので、唯都合の好い位置を擇つて、何の圍ひもない所へ、そつと北枕に寐か

した。今朝方玩弄にしてゐた風船玉を茶の間から持つて來て、お仙が其枕元に置いて遣つた。顔へは白い晒し木綿を掛けた。千代子は時々それを取り除けて見ては泣いた。「一寸貴方」とお仙が松本を顧みて「丸で觀音様の様に可愛い顔をしてゐます」と鼻を詰まらせた。松本は「左うか」と云つて、自分の坐つてゐる席から宵子の顔を覗き込んだ。

やがて白木の机の上に、櫛と線香立と白團子が並べられて、蠟燭の灯が弱い光を放つた時、三人は始めて眠りから覺めない宵子と自分達が遠く離れて仕舞つたといふ心細い感じに打たれた。彼等は代る／＼線香を上げた。其烟の香が、二時間前とは全く違ふ世界に誘ひ込まれた彼等の鼻を斷えず刺激した。外の子供は平生の通り早く寐かされた後に、咲子といふ十三になる長女丈が起きて線香の側を離れなかつた。

「御前も御寐よ」

「まだ内幸町からも神田からも誰も來ないのね」

「もう來るだらう。好いから早く御寐」

咲子は立つて廊下へ出たが、其所で振り回つて、千代子を招いた。千代子が同じく立つて廊下へ出ると、小さな聲で、怖いから一所に便所へ行つて呉れると頼んだ。便所には電燈が點けてな

かつた。千代子は燐寸を擦つて雪洞に灯を移して、咲子と一所に廊下を曲がつた。歸りに下女部屋を覗いて見ると、飯焚が出入りの車夫と火鉢を挟んでひそ／＼何か話してゐた。千代子には夫が宵子の不幸を細かに語つてゐるらしく思はれた。外の下女は茶の間で來客の用意に盆を拭いたり茶碗を並べたりしてゐた。

通知を受けた親類のものが其内二三人寄つた。何れ又來るからと云つて歸つたのもあつた。千代子は來る人毎に宵子の突然な最後を繰り返し／＼語つた。十二時過ぎからお仙は通夜をする人の爲に、わざと置火燵を拵へて室に入れたが、誰もあたるものはなかつた。主人夫婦は無理に勧められて寢室へ退いた。其後で千代子は幾度か短かくなつた線香の烟を新しく繼いだ。雨はまだ降り已まなかつた。夕方芭蕉に落ちた響はもう聞こえない代りに、亞鉛葺の廂にあたる音が、非常に淋しくて悲しい點滴を彼女の耳に絶えず送つた。彼女は此雨の中で、時々宵子の顔に當てた晒を取つては啜り泣きをしてゐるうちに夜が明けた。

其日は女がみんなして宵子の經帷子を縫つた。百代子が新たに内幸町から來たのと、外に懇意の家の細君が二人程見えたので、小さい袖や裾が、方々の手に渡つた。千代子は半紙と筆と硯とを持つて廻つて、南無阿彌陀佛といふ六字を誰にも一枚づゝ書かした。「市さんも書いて上げ

て下さい」と云つて、須永の前へ來た。「何うするんだい」と聞いた須永は、不思議さうに筆と紙を受取つた。

「細かい字で書ける丈一面に書いて下さい。後から六字宛を短冊形に剪つて棺の中へ散らしにして入れるんですから」

皆畏まつて六字の名號を認めた。咲子は見ちや厭よと云ひながら袖屏風をして曲がりくねつた字を書いた。十一になる男の子は僕は假名で書くよと斷つて、ナムアミダブツと電報の様に幾何も並べた。午過ぎになつて愈棺に入るとき松本は千代子に「御前着物を着換へさして御遣りな」と云つた。千代子は泣きながら返事もせず、冷たい宵子を裸にして抱き起した。その背中には紫色の斑點が一面に出てゐた。着換へが済むとお仙が小さい珠數を手にかけてやつた。同じく小さい編笠と藁草履を棺に入れた。昨日の夕方迄穿いてゐた赤い毛糸の足袋も入れた。其紐の先に附けた丸い珠のぶら／＼動く姿がすぐ千代子の眼に浮かんた。みんなの呉れた玩具も足や頭の所へ押し込んだ。最後に南無阿彌陀佛の短冊を雪の様に振り掛けた上へ蓋をして、白綸子の被をした。

友引は善くないといふお仙の説で、葬式を一日延ばしたため、家の中は陰気な空気の裡に常よりは賑はつた。七つになる嘉吉といふ男の子が、何時もの陣太鼓を叩いて叱られた後、そつと千代子の傍へ来て、宵子さんはもう歸つて来ないのと聞いた。須永が笑ひながら、明日は嘉吉さんも焼場へ持つて行つて、宵子さんと一所に焼いて仕舞ふ積りだと調戲ふと、嘉吉はそんな積りなんか僕厭だぜと云ひながら、大きな眼をくるく／＼させて須永を見た。咲子は、御母さん妾も明日御葬式に行きたいわとお仙に強請つた。妾もねと九つになる重子が頼んだ。お仙は漸く氣が附いた様に、奥で田口夫婦と話しをしてゐた夫を呼んで、「貴方、明日入らしつて」と聞いた。

「行くよ。御前も行つてやるが好い」

「え、行く事に極めてます。子供には何を着せたら可いでせう」

「紋附で可いちやないか」

「でも餘り模様様が派手だから」

「袴を穿けば可いよ。男の子は海軍服で澤山だし。御前は黒紋附だらう。黒い帯は持つてるか

「持つてます」

「千代子、御前も持つてるなら喪服を着て供に立つて御遣り」

斯んな世話を焼いた後で、松本は又奥へ引き返した。千代子も亦線香を上げに立つた。棺の上を見ると、何時の間にか綺麗な花環が載せてあつた。「何時来たの」と傍に居る妹の百代に聞いた。百代は小さな聲で「先刻」と答へたが、「叔母さんが子供のだから、白い花だけでは淋しいつて、わざと赤いのを交ぜましたんですつて」と説明した。姉と妹はしばらく其所に竝んで坐つてゐた。十分ばかりすると、千代子は百代の耳に口を附けて、「百代さん貴方宵子さんの死顔を見て」と聞いた。百代は「え、」と首肯した。

「何時」

「ほら先刻御棺に入れる時見たんぢやないの。何故」

千代子は夫を忘れてゐた。妹が若し見ないと云つたら、二人で棺の蓋をもう一遍開けようと思つたのである。「御止しなさいよ、怖いから」と云つて百代は首を掉つた。

晩には通夜僧が来て御經を上げた。千代子が傍で聞いてゐると、松本は坊さんを捕まへて、三

部經がどうだの、和讃がどうだのといふ變な話しをしてゐた。其會話の中には親鸞上人と蓮如上人といふ名が度々出て來た。十時少し廻つた頃、松本は菓子と御布施を僧の前に並べて、もう宜しいから御引き取り下さいと斷つた。坊さんの歸つた後でお仙が其理由を聞くと、「何坊さんも早く寐た方が勝手だあね。宵子だつて御經なんか聴くのは嫌ひだよ」と濟ましてゐた。千代子と百代子は顔を見合はせて微笑した。

あくる日は風のない明らかな空の下に、小さな棺が靜かに動いた。路端の人はそれを何か不可思議のものでもあるかの様に目送した。松本は白張の提灯や白木の輿が嫌ひだと云つて、宵子の棺を喪車に入れたのである。其喪車の周圍に垂れた黒い幕が揺れる度に、白綸子の覆をした小さな棺の上に飾つた花環がちら／＼見えた。其所いらに遊んでゐた子供が駆け寄つて來て、珍らしくさうに車の中を覗き込んだ。車と行き逢つた時、脱帽して過ぎた人もあつた。

寺では讀經も焼香も形式通り濟んだ。千代子は廣い本堂に坐つてゐる間、不思議に涙も何も出なかつた。叔父叔母の顔を見ても是といつて憂ひに鎖された様子は見えなかつた。焼香の時、重子が香を撮んで香爐の裏へ燻べるのを間違へて、灰を一撮み取つて、抹香の中へ打ち込んだ折には、可笑しくなつて吹き出した位である。式が果ててから松本と須永と別に一二人棺に付き添つ

て火葬場へ廻つたので、千代子は外のものと一所に又矢來へ歸つて來た。車の上で、切なさの少し減つた今よりも、苦しい位悲しかつた昨日一昨日の氣分の方が、清くて美しい物を多量に含んでゐたらしく考へて、其時味はつた痛烈な悲哀を却て戀しく思つた。

七

骨上げにはお仙と須永と千代子と夫に平生宵子の守をしてゐた清といふ下女が附いて都合四人で行つた。柏木の停車場を下りると二丁位な所を、つい氣が附かずに宅から車に乗つて出たので時間は却て長く掛かつた。火葬場の經驗は千代子に取つて生れて始めてであつた。久しく見ずにゐた郊外の景色も忘れ物を思ひ出した様に嬉しかつた。眼に入るものは青い麥島と青い大根島と常磐木の中に赤や黄や褐色を雜多に交ぜた森の色であつた。前へ行く須永は時々後を振り返つて、穴八幡だの諏訪の森だのを千代子に教へた。車が暗いだら／＼坂へ來た時、彼は又小高い杉の木立の中にある細長い塔を千代子の爲に指さした。夫には弘法大師千五十年供養塔と刻んであつた。その下に熊笹の生ひ茂つた吹井戸を控へて、一軒の茶見世が橋の袂を左も田舎道らしく見せてゐた。折々坊主になりかけた高い樹の枝の上から、色の變つた小さい葉が一つづつ落ちて來た。夫

が空中で非常に早くさきり／＼舞ふ姿が鮮やかに千代子の眼を刺激した。夫が容易に地面の上へ落ちずに、何時迄も途中でひら／＼するの、彼女には眼新しい現象であつた。

火葬場は日當りの好い平地に南を受けて建てられてゐるので、車を門内に引き入れた時、思つたより陽気な影が千代子の胸に射した。お仙が事務所の前で、松本ですがと云ふと、郵便局の受付口見た様な窓の中に坐つてゐた男が、鍵は御持ちでせうねと聞いた。お仙は變な顔をして急に懐や帶の間を探り出した。

「飛んだ事をしたよ。鍵を茶の間の用筆筒の上へ置いたなり……」

「持つて來なかつたの。おや困るわね。まだ時間があるから急いで市さんに取つて來て貰ふと好いわ」

二人の問答を後の方で冷淡に聞いてゐた須永は、鍵なら僕が持つて來てゐると云つて、冷たい重いものを袂から出して叔母に渡した。お仙が夫を受附口へ見せてゐる間に、千代子は須永を窘めた。

「市さん、貴方本當に悪らしい方ね。持つてるなら早く出して上げれば可いのに。叔母さんは宵子さんの事で、頭が益槍してゐるから忘れるんぢやありませんか」

須永は唯微笑して立つてゐた。

「貴方の様な不人情な人は斯んな時には一層來ない方が可いわ。宵子さんが死んだつて、涙一つ零すぢやなし」

「不人情なんぢやない。まだ子供を持つた事がないから、親子の情愛が能く解らないんだよ」
「まあ。能く叔母さんの前でそんな呑氣な事が云へるのね。おや妾なんか何うしたの。何時子供持つた覺えがあつて」

「あるか何うか僕は知らない。けれども千代ちゃんは女だから、大方男より美しい心を持つてるんだらう」

お仙は二人の口論を聞かない人の様に、用事を済ますとすぐ待合所の方へ歩いて行つた。其所へ腰を掛けてから、立つてゐる千代子を手招きした。千代子はすぐ叔母の傍へ來て座に着いた。須永も續いて這入つて來た。さうして二人の向う側にある涼み臺見た様なものの上に腰を掛けた。清も御掛けと云つて自分の席を割いて遣つた。

四人が茶を呑んで待ち合はしてゐる間に、骨上げの連中が二三組見えた。最初のは田舎染みた御婆さん丈で、是はお仙と千代子の服装に對して遠慮でもしたらしく口敷を多く利かなかつた。

次には尻を絡げた親子連が来た。活潑な聲で、壺を下さいと云つて、一番安いのを十六錢で買つて行つた。三番目には散髪に角帯を締めた男とも女とも片の附かない盲者が、紫の袴を穿いた女の子に手を引かれて遣つて来た。さうして未だ時間はあるだらうねと念を押して、袂から出した巻煙草を吸ひ始めた。須永は此盲者の顔を見ると立ち上がつてふいと表へ出たぎり中々返つて来なかつた。所へ事務所のものがお仙の傍へ来て、用意が出来ましたから何うぞと促したので、千代子は須永を呼びに裏手へ出た。

八

真鍮の掛札に何々殿と書いた並等の竈を、薄氣味悪く左右に見て裏へ抜けると、廣い空地の隅に松薪が山の様に積んであつた。周囲には綺麗な孟宗藪が蒼々と茂つてゐた。其下が麥畠で、麥畠の向うが又岡續きに高く蜿蜒してゐるので、北側の眺めは殊に晴々しかつた。須永は此空地の端に立つて廣い眼界をぼんやり見渡してゐた。

「市さん、もう用意が出来たんですつて」

須永は千代子の聲を聞いて黙つた儘歸つて来たが、「あの竹藪は大變見事だね。何だか死人の膏

が肥料になつて、あゝ生々延びる様な氣がするぢやないか。此所に出来る筈は屹度旨いよ」と云つた。千代子は「おゝ厭だ」と云ひ放しにして、さつさと又並等を通り抜けた。宵子の竈は上等の一號といふので、扉の上に紫の幕が張つてあつた。その前に昨日の花環が少し凋み掛けて、臺の上に靜かに横たはつてゐた。夫が昨夜宵子の肉を焼いた熱氣の記念の様に思はれるので、千代子は急に息苦しくなつた。御坊が三人出て来た。其内の一番年を取つたのが「御封印を……」と云ふので、須永は「よし、構はないから開けて呉れ」と頼んだ。畏まつた御坊は自分の手で封印を切つて、かちやりと響く音をさせながら錠を抜いた。黒い鐵の扉が左右へ開くと、薄暗い奥の方に、灰色の丸いものだの、黒いものだの、白いものだのが、形を成さない一塊となつて臃氣に見えた。御坊は「今出ませう」と斷つて、レールを二本前の方に繼ぎ足して置いて、鐵の環に似たものを二つ棺臺の端に掛けたかと思ふと、忽然がらくといふ音と共に、かの形を成さない一塊の焼残りが四人の立つてゐる鼻の下へ出て来た。千代子は其なかで、例の御供に似てふつくらと膨らんだ宵子の頭蓋骨が、生きてゐた時其儘の姿で残つてゐるのを認めて急に手帛を口に銜へた。御坊は此頭蓋骨と頰骨と外に二つ三つの大きな骨を残して、「あとは綺麗に飾つて持つて參りませう」と云つた。

四人は各自木箸と竹箸を一本宛持つて、臺の上の白骨を思ひくりに拾つては、白い壺の中へ入れた。さうして誘ひ合はせた様に泣いた。たゞ須永丈は蒼白い顔をして口も利かず鼻も鳴らさなかつた。「齒は別になさいますか」と聞きながら、御坊が小器用に齒を拾ひ分けて呉れた時、顎をくしやくと潰して其中から二三枚擇り出したのを見た須永は、「斯うなると丸で人間の様な気がしないな。砂の中から小石を拾ひ出すと同じ事だ」と獨り言の様に云つた。下女が三和土の上にはぼたくと涙を落とした。お仙と千代子は箸を置いて手帛を顔へ當てた。

車に乗るとき千代子は杉の箱に入れた白い壺を抱いて夫を膝の上に乗せた。車が駆け出すと冷たい風が膝掛と杉箱の間から吹き込んだ。高い樗が白茶けた幹を路の左右に竝べて、彼等を送り迎へる如くに細い枝を揺り動かした。其細い枝が遙か頭の上で交叉する程繁く兩側から出てゐるのに、自分の通る所は存外明るいのを奇妙に思つて、千代子は折々頭を上げては、遠い空を眺めた。宅へ着いて遺骨を佛壇の前に置いた時、すぐ寄つて來た子供が、蓋を開けて見せて呉れといふのを彼女は斷然拒絶した。

やがて家内中同じ室で晝飯の膳に向つた。「斯うして見ると、まだ子供が澤山ゐるやうだが、是で一人もう缺けたんだね」と須永が云ひ出した。

「生きてゐる内は夫程にも思はないが、逝かれて見ると一番惜しい様だね。此所にゐる連中のうちで誰か代りになれば可いと思ふ位だ」と松本が云つた。

「非道いわね」と重子が咲子に耳語いた。

「叔母さん又奮發して、宵子さんと瓜二つの様な子を拵へて頂戴。可愛がつて上げるから」

「宵子と同じ子ぢや不可ないでせう、宵子でなくつちや。御茶碗や帽子と違つて代りが出來たつて、亡くしたのを忘れる譯にや行かないんだから」

「己は雨の降る日に紹介状を持つて會ひに來る男が厭になつた」

須永の話

敬太郎は須永の門前で後姿の女を見て以来、此二人を結び附ける縁の糸を常に想像した。其絲には一種夢の様な匂があるので、二人を眼の前に、須永とし又千代子として眺める時には、却て何處かへ消えて仕舞ふ事が多かつた。けれども彼等が普通の人間として敬太郎の肉眼に現實の刺激を與へない折々には、失はれた糸が又二人の中を離すべからざる因果の如くに繋いだ。田口の家へ出入りする様になつてからも、須永と千代子の關係に就いては、一口でさへ誰からも聞いた事はなし、又二人の様子を直かに觀察しても尋常の從兄弟以上に何物も仄めいてゐなかつたには違ひないが、斯ういふ當初からの聯想に支配されて、彼は頭の何處かに、二人を常に一對の男女として認める傾きを有つてゐた。女の連れ添はない若い男や、男の手を組まない若い女は、要するに敬太郎から見れば自然を損なつた片輪に過ぎないので、彼が自分の知る彼等を頭のうちで斯様に組み合はせたのは、まだ片輪の境遇に迷見附いてゐる二人に、自然が生み附けた通りの資格

を早く與へて遣りたいといふ道義心の要求から起つたのかも知れなかつた。

それは小六づかしい理窟だから、假令何んな要求から起らうと敬太郎の爲に辯ずる必要はないが、此頃になつて偶然千代子の結婚談を耳にした彼が、頭の中の世界と、頭の外にある社會との矛盾に、一寸首を捻つたのは事實に相違なかつた。彼は其話を書生の佐伯から聞いたのである。尤も佐伯の様なもの、まだ事の纏まらない先から、奥の委しい話を知らう筈がなかつた。彼はたゞ漠然とした顔の筋肉を何時もより緊張させて、何でもそんな評判ですと云ふ丈であつた。千代子を貰ふ人の名前も無論分らなかつたが、自分の實業家である事は慥かに思はれた。

「千代子さんは須永君の所へ行くのだと計り思つてゐたが、左うぢやないのかね」

「左うも行かないでせう」

「何故」

「何故つて聞かれると、僕にも明瞭な答は出來悪いんですが、一寸考へて見ても六づかしさうです」

「左うかね、僕は又丁度好い夫婦だと思つてゐるがね。親類ぢやあるし、年だつて五つか六つ違ひなら可笑しかなしさ」

「知らない人から見ると一寸さう見えるでせうがね。裏面には色々複雑な事情もある様ですか
ら」

敬太郎は佐伯の云はゆる「複雑な事情」なるものを根掘り葉掘り聞きたくなつたが、何だか自分
分を門外漢扱ひにする様な彼の言葉が癢に障るのと、高が玄關番の書生から家庭の内幕を聞き出
したと云はれては自分の品格に拘るのと、最後には、口程詳しい事情を佐伯が知つてゐる氣遣ひ
がないのとで、夫限り其話しは已めにした。其折序ながら奥へ行つて細君に挨拶をして少時話し
たが、別に平生と何の變る様子もないので、御目出たう御座いますと云ふ勇氣も出なかつた。
是は敬太郎が須永の宅で矢來の叔父さんの家にあつた不幸を千代子から聞いたついで二三日前の
事であつた。其日彼が久し振に須永を訪問したのも、實は其結婚問題に就いて須永の考へを確め
る積りであつた。須永が何處の何人と結婚しようとして、千代子が何處の何人に片附かうと、夫は敬
太郎の關係する所ではなかつたが、此二人の運命が、夫程容易く右左へ未練なく離れぬになり
得るものか、又は自分の想像した通り幻に似た絲の様なものが、二人にも見えない縁となつて、
彼等を冥々のうちに繋ぎ合はせてゐるものか。夫とも此夢で織つた帯とでも形容して然るべき散
ら散らすものが、或時は二人の眼に明らかに見え、或時は全く切れて、彼等をばらばらに孤立

させるものか、——其所いらが敬太郎には知りたかつたのである。固より夫は單なる物數奇に過
ぎなかつた。彼は明らかに左うだと自覺してゐた。けれども須永に對してなら、此物數奇を満足
させても無禮に當たらぬ事も自覺してゐた。夫計りか此物數奇を満足させる權利があると迄信
じてゐた。

其日は生憎千代子に妨げられた上、仕舞には須永の母さへ出て來たので、大分長く坐つてゐた
にも拘らず、立ち入つた話しは一切持ち出す機會がなかつた。たゞ敬太郎は偶然にも自分の前に
竝んだ三人が、有りの儘の今の姿で、現に似合はしい夫婦と姑に成り終せてゐるといふ事に不圖
思ひ及んだ時、彼等を世間並の形式で纏めるのは、最も容易い仕事の様考へて歸つた。
次の日曜が又幸ひな暖かい日和を凡ての勧め人に恵んだので、敬太郎は朝早くから須永を尋ね
て、郊外に誘はうとした。無精で我儘な彼は玄關先迄出て來ながら、中々應じさうにしなかつた
のを、母親が無理に勧めて漸く靴を穿かした。靴を穿いた以上彼は、敬太郎の意志通り何方へで
も動く人であつた。其代りいくら相談を掛けても、ある判切した方角へ是非共足を運ばなければ

ならないと主張する男ではなかつた。彼と矢來の松本と一所に出ると、二人とも行先を考へずに歩くので、一致して飛んでもない所へ到着する事がまゝ有つた。敬太郎は現に此人の母の口から其例を聞かされたのである。

此日彼等は兩國から汽車に乗つて鴻の臺の下迄行つて降りた。夫から美しい廣い河に沿つて土堤の上をのそく歩いた。敬太郎は久し振に晴々とした好い気分になつて、水だの岡だの帆懸船だのを見廻した。須永も景色は賞めたが、まだ斯んな吹き晴らしの土堤などを歩く季節ぢやないと云つて、寒いのに伴れ出した敬太郎を恨んだ。早く歩けば暖かくなると云つて敬太郎はさつさと歩き始めた。須永は呆れた様な顔をして跟いて來た。二人は柴又の帝釋天の傍迄來て、川甚といふ家へ這入つて飯を食つた。其所で眺へた鰻の蒲焼が甘垂るくて食へないと云つて、須永は又苦い顔をした。先刻から二人の気分が熱しないので、しんみりした話をする餘地が出て來ないのを苦しがつてゐた敬太郎は、此時須永に「江戸つ子は贅澤なものだね。細君を貰ふときにも左う贅澤を云ふかね」と聞いた。

「云へれば誰だつて云ふさ。何も江戸つ子に限りあしない。君見た様な田舎ものだつて云ふだらう」

須永は斯う答へて澄ましてゐた。敬太郎は仕方なしに「江戸つ子は無愛嬌なものだね」と云つて笑ひ出した。須永も突然可笑しくなつたと見えて笑ひ出した。夫から後は二人の気分と同じ様に、二人の會話も圓滿に進行した。敬太郎が須永から「君も此頃は大分落ち附いて來た様だ」と評されても、彼は「少し眞面目になつたかね」と大人しく受けるし、彼が須永に「君は益偏窟に傾くぢやないか」と調戲つても、須永は「何うも自分ながら厭になる事がある」と快く己の弱點を承認する丈であつた。

斯ういふ打ち解けた心持で、二人が差向ひに互の眼の奥を見透して恥づかしがらない時に、千代子の問題が持ち出されたのは、其真相を聞かうとする敬太郎に取つて偶然の仕合せであつた。彼は先づ一週間程前耳にした彼女が近いうちに結婚するといふ噂を皮切りに須永を襲つた。其時須永は少しも昂奮した様子を見せなかつた。寧ろ何時もより沈んだ調子で「又何か縁談が起り掛けてゐるやうだね。今度は旨く纏まれば可いが」と答へたが、急に口調を更へて「なに君は知らない事だが、今迄もさう云ふ話は何度もあつたんだよ」と左も陳腐らしさうに説明して聞かせた。

「君は貰ふ氣はないのかい」
「僕が貰ふ様に見えるかね」

話しは斯んな風に、御互で引き摺る様にして段々先へ進んだが、愈際どい所迄打ち明けるか、左もなければ題目を更へるより外に仕方がないといふ點迄押し詰められた時、須永はとう／＼敬太郎に「又洋杖を持つて来たんだね」と云つて苦笑した。敬太郎も笑ひながら縁側へ出た。其所から例の洋杖を取つて又這入つて来たが「此通りだ」と蛇の頭を須永に見せた。

三

須永の話は敬太郎の豫期したよりも遙かに長かつた。――
僕の父は早く死んだ。僕がまだ親子の情愛を能く解しない子供頃に突然死んで仕舞つた。僕は子がないから、自分の血を分けた温かい肉の塊りに對する情は、今でも比較的薄いかも知れないが、自分を生んで呉れた親を懐かしいと思ふ心は其後大分發達した。今の心を其時分持つてゐたならと考へる事も稀ではない。一言でいふと、當時の僕は父には甚だ冷淡だつたのである。尤も父も決して甘い方ではなかつた。今の僕の胸に映る彼の顔は、骨の高い血色の勝れない、親しみの薄い、厳格な表情に充ちた肖像に過ぎない。僕は自分の顔を鏡の裡に見るたびに、それが胸の中に收めた父の容貌と大變似てゐるのを思ひ出しては不愉快になる。自分が父と同じ厭な印

象を、傍の人に與へはしまいかと苦に病んで、其所で氣が引ける計りではない。斯んな陰鬱な眉や額が代表するよりも、まだ増しな温かい情愛を、血の中に流してゐる今の自分から推して、あんなに冷酷に見えた父も、心の底には自分以上に熱い涙を貯へてゐたのではなからうかと考へると、父の記念として、彼の悪い上皮丈を覚えてゐるのが、子として如何にも情ない心持がするからである。父は死ぬ二三日前僕を枕元に呼んで、「市藏、おれが死ぬと御母さんの厄介にならなくつちやならないぞ。知つてゐるか」と云つた。僕は生れた時から母の厄介になつてゐたのだから、今更改めて父からそれを聞かされるのを妙に思つた。仕方がないから黙つて坐つてゐると、父は骨計りになつた顔の筋を無理に動かす様にして、「今の様に腕白ぢや、御母さんも構つて呉れないぞ。もう少し大人しくしないと」と云つた。僕は母が今迄構つて呉れたんだから此儘の僕で澤山だといふ氣が充分あつた。それで父の小言を丸で必要のない餘計な事の様にかへて病室を出た。父が死んだ時母は非常に泣いた。葬式が出る間際になつて、僕は着物を着換へさせられた儘、手持無沙汰だから、一人縁側へ出て、蒼い空を覗き込む様に眺めてゐると、白無垢を着た母が何を思つたか不意に其所へ出て来た。田口や松本を始め、供に立つものはみんな向うの方で混雑してゐたので、傍には誰も見えなかつた。母は突然自分の坊主頭へ手を載せて、泣き腫らした眼を

自分の上に据ゑた。さうして小さい聲で、「御父さんが御亡くなりになつても、御母さんが今迄通り可愛がつて上げるから安心なさいよ」と云つた。僕は何とも答へなかつた。涙も落とさなかつた。其時は夫で濟んだが、両親に對する僕の記憶を、生長の後に至つて、遠くの方で曇らすものは、二人の此時の言葉であるといふ感じが其後次第々々に強く明らかになつて來た。何の意味も附ける必要のない彼等の言葉に、僕は何故厚い疑惑の裏打ちをしなければならぬのか、それは僕自身に聞いて見ても丸で説明が附かなかつた。時々母に向つて直かに問ひ糺して見たい氣も起つたが、母の顔を見ると急に勇氣が摧けて仕舞ふのが例であつた。さうして心の中の何處かで、それを打ち明けたが最後、親しい母子が離れ々々になつて、永久今の睦まじさに戻る機會はないと僕に耳語くものが出て來た。夫でなくても、母は僕の眞面目な顔を見守つて、そんな事が有つたつかなかねと笑ひに紛らしさうなので、さう剥ぐらかされた時の残酷な結果を豫想すると、到底口へ出された義理ぢやないと思ひ直しては黙つてゐた。

僕は母に對して決して柔順な息子ではなかつた。父の死ぬ前に枕元へ呼び附けられて意見された丈あつて、小さいうちから能く母に逆らつた。大きくなつて、女親だけに猶更優しくして遣りたいといふ分別が出来た後でも、矢つ張り彼女の云ふ通りにはならなかつた。此二三年は殊に心

配ばかり掛けてゐた。が、幾何勝手を云ひ合つても、母子は生れて以來の母子で、此貴い觀念を傷つけられた覺えは、重手にしろ淺手にしろ、まだ經驗した試しがないといふ考へから、若し彼の事を云ひ出して、二人共後悔の痕痕を遺さなければ濟まない瘡を受けたなら、夫こそ取り返しに附かない不幸だと思つてゐた。此畏怖の念は神經質に生れた僕の頭で拵へるのかも知れないとも疑つて見た。けれども僕にはそれが現在よりも明らかな未來として存在してゐる事が多かつた。だから僕は彼の時の父と母の言葉を、それなり忘れて仕舞ふ事が出来なかつたのを、今でも情なく感ずるのである。

四

父と母の間は何れ程圓滿であつたか、僕には分らない。僕はまだ妻を貰つた經驗がないから、さう云ふ事を口にする資格はないかも知れないが、如何な仲の善い夫婦でも、時々は氣不味い思ひを爲合ふのが人間の常だらうから、彼等だつて永く添つてゐるうちには面白くない汚點を双方の胸の裏に見出だしつゝ、世間も知らず互も口にしなない不満を、自分一人苦く味はつて我慢した場合もあつたのだらうと思ふ。尤も父は疝癪の強い割に陰性な男だつたし、母は長唄をうたふ時

より外に、大きな聲の出せない性分なので、僕は二人の言ひ争ふ現場を、父の死ぬ迄未だ曾て目撃した事がなかつた。要するに世間から云へば、僕等の宅程静かに整つた家庭は滅多に見當たらなかつたのである。あの位他の悪口を露骨にいふ松本の叔父でさへ、今だにさう認めて間違ひないものと信じ切つてゐる。

母は僕に對して死んだ父を語る毎に、世間の夫のうちで最も完全に近いものの様に説明して已まない。是は幾分か僕の腹の底に濁つた儘沈んでゐる父の記憶を清めたい爲の辯護とも思はれる。又は彼女自身の記憶に時間の布巾を掛けて段々光澤を出す積りとも見られる。けれども慈愛に充ちた親としての父を僕に紹介する時には、彼女の態度が全く一變する。平生僕が目の當りに見てゐるあの柔和な母が、何うして斯う眞面目になれるだらうと驚く位、嚴肅な氣象で僕を打ち据ゑる事さへあつた。が、夫は僕が中學から高等學校へ移る時分の昔である。今はいくら母に強請つて同じ話しを繰り返して貰つても、そんな氣高い氣分には到底なれない。僕の情報はその頃から學校を卒業する迄の間に、近頃の小説に出る主人公の様に、丸で荒み果てたのだらう。現代の空氣に中毒した自分を咒ひたくになると、僕は時々もう一遍で好いから、母の前であゝ云ふ崇高な感じに觸れて見たいといふ望みを起すが、同時に其望みが到底遂げられない過去の夢であるといふ悲

しみも湧いて来る。

母の性格は吾々が昔から用ひ慣れた慈母といふ言葉で形容さへすれば、夫で盡きてゐる。僕から見ると彼女は此二字の爲に生れて此二字の爲に死ぬと云つても差支へない。まことに氣の毒であるが、夫でも母は生活の満足を此一點にのみ集注してゐるのだから、僕さへ充分の孝行が出来れば、是に越した彼女の喜びはないのである。が、もし其僕が彼女の意に背く事が多かつたら、是程の不幸は又彼女に取つて決してない譯になる。それを思ふと僕は非常に心苦しい事がある。

思ひ出したから此所で一寸云ふが、僕は生れてからの一人息子ではない。子供の時分に妙ちやんといふ妹と毎日遊んだ事を覚えてゐる。其妹は大きな模様のある被布を平生着て、人形の様髪を切り下げてゐた。さうして僕の事を常に市藏ちやん市藏ちやんと云つて、兄さんとは決して呼ばなかつた。此妹は父の亡くなる何年前かに實扶的里亞で死んで仕舞つた。其頃は血清注射がまだ發明されない時分だったので、治療も大變に困難だつたのだらう。僕は固より實扶的里亞と云ふ名前さへ知らなかつた。宅へ見舞に來た松本に、御前も實扶的里亞かと調戲はれて、うん左うちやないよ僕軍人だよと答へたのを今だに忘れずにゐる。妹が死んでから當分は六つかしい父の顔が大分優しく見えた。母に向つて、まことに御前には氣の毒な事をしたといつた顔が殊

に穩やかだつたので、子供ながら、つい其時の言葉迄小さい胸に刻み附けて置いた。然し母が夫に對して何う答へたかは全く知らない。いくら思ひ出さうとしても思ひ出せない所をもつて見ると、初めから覺えなかつたのだらう。是程鋭敏に父を觀察する能力を、子供の時から持つてゐた僕が、母に對する注意に缺けてゐたのも不思議である。人間が自分よりも餘計に他を知りたがる癖のあるものだとすれば、僕の父は母よりも餘程他人らしく僕に見えてゐたのかも分らない。それを逆に云ふと、母は觀察に價しない程僕に親しかつたのである。——兎に角妹は死んだ。それからの僕は父に對しても母に對しても一人息子であつた。父が死んで以後の今の僕は母に對しての一人息子である。

五

だから僕は母を出来る丈大事にしなければ濟まない。が、實際は同じ原因が却て僕を我儘にしてゐる。僕は去年學校を卒業してから今日迄、まだ就職といふ問題について唯の一日も頭を使つた事がない。出た時の成績は寧ろ好い方であつた。席次を目安に人を探る今の習慣を利用しようと思へば、随分友達を羨ましがらせる位置に坐り込む機會もないではなかつた。現に一度はある

方面から人選の依託を受けた某教授に呼ばれて意向を聞かれた記憶さへ有つてゐる。夫だのに僕は動かなかつた。固より自慢で斯う云ふ話をするのではない。眞底を打ち明ければ寧ろ自慢の反對で、全く信念の缺乏から來た引込み思案なのだから不愉快である。が、朝から晩迄氣骨を折つて、世の中に持つて囃された所で、何處が何うしたんだといふ横着は、無論斷る時から附け纏つてゐた。僕は時めくために生れた男ではないと思ふ。法律などを修めないで、植物學か天文學でも遣つたらまだ性に合つた仕事か天から授かるかも知れないと思ふ。僕は世間に對しては甚だ氣の弱い癖に、自分に對しては大變辛抱の好い男だから左う思ふのである。

斯ういふ僕の我儘を我儘なりに通して呉れるものは、云ふ迄もなく父が遺して行つた僅ばかりの財産である。もし此財産がなかつたら、僕は何んな苦しい思ひをしても、法學士の肩書を利用して、世間と戦はなければならぬのだと考へると、僕は死んだ父に對して改めて感謝の念を捧げたくなると同時に、自分の我儘は此財産のためにやつと存在を許されてゐるのだから餘程腰の坐らない淺墓なものに違ひないと推斷する。さうして其犠牲にされてゐる母が一層氣の毒になる。母は昔堅氣の教育を受けた婦人の常として、家名を揚げるのが子たるものの第一の務めだといふ様な考へを、何より先に抱いてゐる。然し彼女の家名を揚げるといふのは、名譽の意味か、財

産の意味か、権力の意味か、又は徳望の意味か、其所へ行くと全く何の分別もない。たゞ漠然と、一つが頭の上に落ちて来れば、凡て其他が後を追つて門前に輻湊する位に思つてゐる。然し僕はさういふ問題に就いて、何事も母に説明して遣る勇氣がない。説明して聞かせるには、先づ僕の見識で尤もと認められた家名の揚げ方をした上でないと、僕に其資格が出来ないからである。僕は如何なる意味に於ても家名を揚げ得る男ではない。たゞ汚さない丈の見識を頭に入れて置く計りである。さうして其見識は母に見せて喜んで貰へる所か、彼女とは丸で懸け離れた縁のないものなのだから、母も心細いだらう。僕も淋しい。

僕が母に掛ける心配の數あるうちで、第一に擧げなければならぬのは、今話した通りの僕の缺點である。然し此缺點を矯めずに母と不足なく暮らして行かれる程、母は僕を愛してゐて呉れるのだから、唯濟まないと思ふ心を失はずに、此儘で押せば押せない事もないが、此我儘よりももつと鋭い失望を母に與へさうなので、僕が私に胸を痛めてゐるのは結婚問題である。結婚問題と云ふより僕と千代子を取り巻く周囲の事情と云つた方が適當かも知れない。夫を説明するには話しの順序として先づ千代子の生れない當時に溯る必要がある。其頃の田口は決して今程の幅利きでも資産家でもなかつた。たゞ將來見込のある男だからと云ふので、父が母の妹に當たるあ

の叔母を嫁に遣るやうに周旋したのである。田口は固より僕の父を先輩として仰いでゐた。何蚊につけて相談もしたり、世話にもなつた。兩家の間に新しく成立した此親しい關係が、月と共に加速度を以て圓滿に進行しつゝある際に千代子が生れた。其時僕の母は何う思つたものか、大きくなつたら此子を市藏の嫁に呉れまいかと田口夫婦に頼んだのださうである。母の語る所によると、彼等は其折快く母の頼みを承諾したのだと云ふ。固より後から百代が生れる。吾一といふ男の子も出来る、千代子を遣らうとすれば何處へでも遣られるのだが、屹度僕に遣らなければならぬ程確かに母に受合つたか何うか、其所は僕も知らない。

六

兎に角僕と千代子の間には兩方共物心の附かない當時から既に斯ういふ絆があつた。けれども其絆は僕等二人を結び附ける上に於て頗る怪しい絆であつた。二人は固より天に上がる雲雀の如く自由に生長した。絆を縋つた人でさへ確と其端を握つてゐる氣ではなかつたのだらう。僕は怪しい絆といふ文字を奇縁といふ意味で此所に使ふ事の出来ないのを深く母の爲に悲しむのである。母は僕の高等學校に這入つた時分夫となく千代子の事を仄めかした。其頃の僕に色氣のあつた

のは無論である。けれども未來の妻といふ觀念は丸で頭に無かつた。そんな話に取り合ふ落ち附きさへ持つてゐなかつた。殊に子供の時から一所に遊んだり喧嘩をしたり、殆ど同じ家に生長したと違はない親しみのある少女は、餘り自分に近過ぎるためか甚だ平凡に見えて、異性に對する普通の刺激を與へるに足りなかつた。是は僕の方ばかりではあるまい、千代子も恐らく同感だらうと思ふ。其證據には長い交際の前後を通じて、僕は未だ曾て男として彼女から取り扱はれた経験を記憶する事が出来ない。彼女から見た僕は、怒らうが泣かうが、科をしようが色眼を使はうが、常に變らない從兄に過ぎないのである。尤も是は幾分か、純粹な氣性を受けて生れた彼女の性情からも出るので、其所になると又僕程彼女を知り抜いてゐるものはないのだが、單に夫であつた男女の牆壁が取り除けられる譯のものではあるまい。たゞ一度……然し是は後で話す方が宜からうと思ふ。

母は自分のいふ事に耳を借さなかつた僕を羞恥家と解釋して、再び時機を待つものの如くに、此問題を懷に收めた。羞恥は僕と雖も否定する勇氣がない。然し千代子に意があるから羞恥んだのだと取つた母は、全くの反對を事實と認めたと同じ事である。要するに母は未來に對する準備といふ考へから、僕等二人を成る可く仲善く育て上げよう／＼と力めた結果、男女としての二人

を次第に遠ざからした。さうして自分では知らずにゐた。夫を知らなければならぬ様にした僕は全く残酷であつた。

其日の事を語るのが僕には實際の苦痛である。母は高等學校時代に匂はした千代子の問題を、僕が大學の二年になる迄、凝と懷に抱いた儘一人で温めてゐたと見えて、ある晩——春休みの頃の花の咲いたといふ噂のあつた或日の晩——そつと僕の前に出して見せた。其時は僕も大分大人らしくなつてゐたので、靜かに其問題を取り上げて、裏表から丁寧に吟味する餘裕が出来てゐた。母も其時にはたゞ遠くから匂はせる丈でなくて、自分の希望に正當の形式を與へる事を忘れなかつた。僕は何心なく從妹は血屬だから厭だと答へた。母は千代子の生れた時呉れると頼んで置いたのだから貰つたら可いだらうと云つて僕を驚かした。何故そんな事を頼んだのかと聞くと、何故でも私の好きな子で、御前も嫌ふ筈がないからだ、赤ん坊には應用の利かない様を挨拶をして僕を弱らせた。段々其所を押して見ると、仕舞に涙ぐんで、實は御前の爲ではない、全く私の爲に頼むのだと云ふ。しかも何うして夫が母の爲になるのか、其理由は幾何聞いても語らない。最後に何でも蚊でも千代子は厭かと聞かれた。僕は厭でも何でもないと答へた。然し當人も僕の所へ來る氣はなし、田口の叔父も叔母も僕に呉れたくないのだから、そんな事を申し込むのは

止した方が好い、先方で迷惑する丈だからと教へた。母は約束だから迷惑しても構はない、又迷惑する筈がないと主張して、昔田口が父の世話になつたり厄介になつたりした例を數へ擧げた。僕は已むを得ないから此問題は卒業する迄解決を着けずに置かうと云ひ出した。母は不安の裏に一縷の望みを現はした顔色をして、もう一遍篤と考へて見て呉れと頼んだ。

斯ういふ事情で、今迄母一人で懐に抱いてゐた問題を、其後は僕も抱かなければならなくなつた。田口は又田口流に、同じ問題を解しつゝあるのではなからうか。假令千代子を外へ縁附けるにしても、いざと云ふ場合には一應此方の承諾を得る必要があるとすれば、叔父も氣掛りに違ひない。

七

僕は不安になつた。母の顔を見る度に、彼女を欺いて其日々々を姑息に送つてゐる様な氣がして濟まなかつた。一頃は思ひ直して出來得るならば母の希望通り千代子を貰つて遣りたいとも考へた。僕は其爲にわざ／＼用もない田口の家へ遊びに行つて夫となく叔父や叔母の様子を見た。彼等は僕の母の肉薄に應ずる準備として前以て僕を疎んずる様な素振を口にも舉動にも決して示

さなかつた。彼等は夫程淺薄な又不親切な人間ではなかつたのである。けれども彼等の娘の未來の夫として、僕が彼等の眼に如何に憐むべく映じてゐたかは、遠き前から僕の見抜いてゐた所と、ちつとも變化を來さないばかりか、近頃になつて益其傾きが著しくなる様に思はれた。彼等は第一に僕の弱々しい體格と僕の蒼白い顔色とを婿として肯はない積りらしかつた。尤も僕は神經の鋭く動く性質だから、物を誇大に考へ過ぎたり、要らぬ僻みを起して見たりする弊がよくあるので、自分の胸に收めた委しい叔父叔母の觀察を遠慮なく此所に述べる非禮は憚りたい。たゞ一言で云ふと、彼等は其當時千代子を僕の嫁にしようと言明したのだらう。少なくとも遣つても可い位には考へてゐたのだらう。が、其後彼等の社會に占め得た地位と、彼等とは背中合せに進んで行く僕の性格が、二重に實行の便宜を奪つて、たゞ惚けかゝつた空しい義理の抜け殻を、彼等の頭の何處かに置き去りにして行つたと思へば差支へないのである。

僕と彼等とはあらゆる人の結婚問題に就いても多くを語る機會を持たなかつた。たゞある時叔母と僕との間に斯んな會話が取り換はされた。

「市さんも最う徐々奥さんを探さなくつちやなりませんね。姉さんは疾うから心配してゐるやうですよ」

「好いのがあつたら母に知らして遣つて下さらう」

「市さんには大人しくつて優しい、親切な看護婦見た様な女が可いでせう」

「看護婦見た様な嫁はないかつて探しても、誰も來手はあるまいな」

僕が苦笑しながら、自ら嘲る如く斯う云つた時、今迄向うの隅で何かしてゐた千代子が、不意に首を上げた。

「妾行つて上げませうか」

僕は彼女の眼を深く見た。彼女も僕の顔を見た。けれども兩方共其所に意味のある何物をも認めなかつた。叔母は千代子の方を振り向きもしなかつた。さうして、「御前の様な露骨のがらくした者が、何で市さんの氣に入るものかね」と云つた。僕は低い叔母の聲のうちに、窘める様な又怖れる様な一種の響を聞いた。千代子は唯からく面白さうに笑つた丈であつた。其時百代子も傍に居た。是は姉の言葉を聞いて微笑しながら席を立つた。形式を具へない斷りを云はれたと解釋した僕はしばらくして又席を立つた。

此事件後僕は同じ問題に關して母の満足を買ふための努力を益々屑しとしなくなつた。自尊心の強い父の子として、僕の神経は斯ういふ點に於て自分でも驚く位過敏なのである。勿論僕は

其折の叔母に對して決して感情を害しはしなかつた。此方からまだ正式の申し込みを受けてゐない叔母としては、あつより外に意向の洩らし方も無かつたのだらうと思ふ。千代子に至つては何を云はうが笑はうが、何時でも蟠りのない彼女の胸の中を、其儘外に表はしたに過ぎないと考へてゐた。僕は其時の千代子の言葉や様子から察して、彼女が僕の所へ來たがつてゐない事丈は、従前通り慥かに認めたが、同時に、もし差し向ひで僕の母にしんみり話し込まれでもしたら、ええさういふ譯なら御嫁に來て上げませうと其場ですぐ承知しないとも限るまいと思つて、ひそかに掛念を抱いた位である。彼女はさう云ふ時に、平氣で自分の利害や親の意思を犠牲に供し得る極めて純粹の女だと僕は常から信じてゐたからである。

八

意地の強い僕は母を嬉しがらせるよりも成る可く自我を傷つけない様にと祈つた。其結果千代子が僕の知らない間に、母から説き落とされてはと掛念して、暗に夫を防ぐ分別をした。母は彼女の生れ落ちた當初既に僕の嫁と極めた丈あつて、多くある姪や甥の中で、取り分け千代子を可愛がつた。千代子も子供の時分から僕の家を生家の如く心得て遠慮なく寐泊りに來た。其緣故で、

田口と僕の家が昔に比べると比較的疎くなつた今日でも、千代子丈は叔母さん叔母さんと云つて、生みの親にでも逢ひに来る様な朗らかな顔をして、しげ／＼出入りをして居た。單純な彼女は、自分の身を的に時々起る縁談をさへ、隠す所なく母に打ち明けた。人の好い母は又夫を素直に聞いて遣る丈で、恨めしい眼附一つも見せ得なかつた。僕の恐れる懇談は、斯ういふ關係の深い二人の間に、何時起らないとも限らなかつたのである。

僕の分別といふのは先づ此點に關して、當分母の口を塞いで置かうとする用心に過ぎなかつた。所がいざ改まつて母にそれを切り出さうとすると、唯自分の我を通す爲に、弱い親の自由を奪ふのは残酷な子に違ひないといふ心持が、何處にか萌すので、つい夫なりにして已める事が多かつた。尤も年寄の眉を曇らすのがたゞ情ない計りで已めたとも云はれない。是程親しい間柄でさへ今迄思ひ切つた所を千代子に打ち明け得なかつた母の事だから、假令此儘にして置いても、まあ當分は大丈夫だらうといふ考へが、母に對する僕を多少抑へたのである。

夫で僕は千代子に關して何といふ明瞭な處置も取らずに過ぎた。尤も斯ういふ不安な状態で日を送つた時期にも、丸で田口の家と打絶えた譯ではなかつたので、會には單に母の喜ぶ顔を見るだけの目的をもつて内幸町迄電車を利用した覺えさへあつたのである。さういふ或日の晩、僕

は久し振に千代子から、習ひ立ての珍らしい手料理を御馳走するからと引き止められて、夕飯の膳に就いた。何時も留守勝ちな叔父が其日は丁度内に居て、食事中例の氣作な話しをし續けにしたため、若い人の陽氣な笑ひ聲が障子に響く位家の中が賑はつた。飯が濟んだ後で、叔父は何ういふ考へか、突然僕に「市さん久し振に一局やらうか」と云ひ出した。僕は左程氣が進まなかつたけれども折角だから、遣りませうと答へて、叔父と共に別室へ退いた。二人は其所で二三番打つた。固より下手と下手の勝負なので、時間の掛かる筈もなく、碁石を片附けても未だ夫程遅くはならなかつた。二人は煙草を呑みながら又話しを始めた。其時僕は適當な機會を利用してわざと叔父に「千代子さんの縁談はまだ纏まりませんか」と聞いた。それは固より僕が千代子に對して他意のないといふ事を示すためであつた。が又一方では、一日も早く此問題の解決が着けば、自分も安心だし、千代子も幸福だと考へたからである。すると叔父は流石に男だけあつて、何の躊躇もなく斯う云つた。

「いや未だ中々左う行きさうもない。段々そんな話を持つて來て呉れるものはあるが、何しろ六つかしくつて弱る。其上調べれば調べる程面倒になる丈だし、まあ大抵の所で纏まるなら纏めて仕舞はうかと思つてる。——縁談なんてものは妙なものでね。今だから御前に話すが、實は千

代子の生れたとき、御前の御母さんが、是を市藏の嫁に欲しいつてね——生れ立ての赤ん坊をだ

よ」
叔父は此時笑ひながら僕の顔を見た。

「母は本気で左う云つたんださうです」

「本氣さ。姉さんは又正直な人だからね。實に好い人だ。今でも時々眞面目になつて叔母さんに其話しをするさうだ」

叔父は再び大きな聲を出して笑つた。僕は果して叔父が斯う軽く此事件を解釋してゐるなら、母の爲に少し辯じて遣らうかと考へた。が、もし是が世慣れた人の巧妙な覺らせ振だとすれば、一口でも云ふ丈が愚だと思ひ直して黙つた。叔父は親切な人で又世慣れた人である。彼の此時の言葉は何方の眼で見ても可いのか、僕には今以て解らない。たゞ僕が其時以來千代子を貰はない方へ愈傾いたのは事實である。

九

夫から二ヶ月許りの間僕は田口の家へ近寄らなかつた。母さへ心配しなければ、夫限り内幸

町へは足を向けずに済ましたかも知れなかつた。たとひ母が心配するにしても、單に彼女に對する懸念丈が問題なら、或は僕の氣隨をいざといふ極點迄押し通したかも知れなかつた。僕はそんな風に生み附けられた男なのである。所が二ヶ月の末になつて、僕は突然自分の片意地を翻さなければ不利だといふ事に氣が附いた。實を云ふと、僕が田口と疏遠になればなる程、母はあらゆる機會を求めて、益千代子と接觸する様に力め出したのである。さうして何時なんどき僕の最も恐れる直接の談判を、千代子に向つて開かないとも限らない様に、漸々形勢を切迫させて來たのである。僕は思ひ切つて、此危機を一帳場先へ繰り越さうとした。さうして其決心と共に又田口の敷居を跨ぎ出した。

彼等の僕を遇する態度に固より變りはなかつた。僕の彼等に對する様子も亦二ヶ月前の通りであつた。僕と彼等とは故の如く笑つたり、巫山戯たり、揚足の取りつ競をしたりした。要するに僕の田口で費やした時間は、騒がしい位陽氣であつた。本當の所をいふと、僕には少し陽氣過ぎたのである。従つて腹の中が常に空虚な努力に疲れてゐた。鋭い眼で注意したら、何處かに偽りの影が射して、本來の自分を醜く彩どつてゐたらうと思ふ。其内で自分の氣分と自分の言葉が、半紙の裏表の様にびたりと合つた愉快を感じた覺えが唯一遍ある。夫は家例として年に一度か二

度田口の家族が揃つて遊びに出る日の出来事であつた。僕は知らずに奥へ通つて、千代子一人が閑静に坐つてゐるのを見て驚いた。彼女は風邪を引いたと見えて、咽喉に濕布をして居た。常にも似ない蒼い顔色も淋しく思はれた。微笑しながら、「今日は妾御留守居よ」と云つた時、僕は始めて皆出拂つた事に気が附いた。

其日の彼女は病氣の所爲か何時もよりしんみり落ち附いてゐた。僕の顔さへ見ると、屹度冷やかに文句を並べて、何うしても悪口の云ひ合ひを挑まなければ已まない彼女が、一人ぼつちで妙に沈んでゐる姿を見たとき、僕は不圖可憐な心を起した。夫で席に着くや否や、優しい慰藉の言葉を口から出す氣もなく自ら出した。すると千代子は一種變な表情をして、「貴方今日は大變優しいわね。奥さんを貰つたら左ういふ風に優しく仕て上げなくつちや不可ないわね」と云つた。遠慮がなくて親しみ丈持つてゐた僕は、今迄千代子に對していくら無愛嬌に振舞つても差支へないものと暗に自ら許してゐたのだといふ事に此時始めて氣が附いた。さうして千代子の眼の中に何處か嬉しさうな色の微かながら漂ふのを認めて、自分が悪かつたと後悔した。

二人は殆ど一所に生長したと同じ様な自分達の過去を振り返つた。昔の記憶を語る言葉が互の唇から當時を蘇生らせる便りとして洩れた。僕は千代子の記憶が、僕よりも遙かに勝れて、細

かい所迄鮮やかに行き渡つてゐるのに驚いた。彼女は今から四年前、僕が玄關に立つた儘袴の綻びを彼女に縫はせた事迄覚えてゐた。其時彼女の使つたのは木綿糸でなくて絹糸であつた事も知つてゐた。

「妾貴方の描いて呉れた畫をまだ持つてよ」

成程左う云はれて見ると、千代子に畫を描いて遣つた覺えがあつた。けれども夫は彼女が十二三の時の事で、自分が田口に買つて貰つた繪の具と紙を僕の前へ押し附けて無理矢理に描かせたものである。僕の畫道に於ける嗜好は、夫から以後今日に至る迄、つひぞ畫筆を握つた試しがないのでも分るのだから、赤や緑の單純な刺激が、一通り彼女の眼に映つて仕舞へば、興味は其所に盡きなければならぬ筈のものであつた。夫を保存してゐると聞いた僕は迷惑さうに苦笑せざるを得なかつた。

「見せて上げませうか」

僕は見ないでも可いと斷つた。彼女は構はず立ち上がつて、自分の室から僕の畫を納めた手文庫を持つて來た。

千代子は其中から僕の描いた畫を五六枚出して見せた。それは赤い椿だの、紫の東菊だの、色變りのダリヤだので、孰れも單純な花卉の寫生に過ぎなかつたが、要らない所にわざと手を掛けて、時間の浪費を厭はずに、細かく綺麗に塗り上げた手際は、今の僕から見ると殆ど驚くべきものであつた。僕は是程綿密であつた自分の昔に感服した。

「貴方それを描いて下すつた時分は、今より餘つ程親切だつたわね」

千代子は突然斯う云つた。僕には其意味が丸で分らなかつた。畫から眼を上げて、彼女の顔を見ると、彼女も黒い大きな瞳を僕の上に凝と据ゑてゐた。僕は何ういふ譯でそんな事を云ふのかと尋ねた。彼女はそれでも答へずに僕の顔を見詰めてゐた。やがて何時もより小さな聲で「でも近頃頼んだつて、そんなに精出して描いては下さらないでせう」と云つた。僕は描くとも描かないとも答へられなかつた。たゞ腹の中で、彼女の言葉を尤もだと首肯つた。

「夫でも能く斯んな物を丹念に仕舞つて置くね」

「妾御嫁に行く時も持つてく積りよ」

僕は此言葉を聞いて變に悲しくなつた。さうして其悲しい氣分が、すぐ千代子の胸に應へさうなのが猶恐ろしかつた。僕は其刹那既に涙の溢れさうな黒い大きな眼を自分の前に想像したのである。

「そんな下らないものは持つて行かないが可いよ」

「可いわ、持つて行つたつて。妾のだから」

彼女は斯う云ひつゝ、赤い椿や紫の東菊を重ねて、又文庫の中へ仕舞つた。僕は自分の氣分を變へるためわざと彼女に何時頃嫁に行く積りかと聞いた。彼女はもう直さに行くのだと答へた。

「然しまだ極まつた譯ぢやないんだらう」

「いゝえ、もう極まつたの」

彼女は明らかに答へた。今迄自分の安心を得る最後の手段として、一日も早く彼女の縁談が纏まれば好いと念じてゐた僕の心臓は、此答と共にどさんと音のする浪を打つた。さうして毛穴から這ひ出す様な膏汗が、背中と腋の下を不意に襲つた。千代子は文庫を抱いて立ち上がった。障子を開けると、上から僕を見下ろして、「嘘よ」と一口判切云ひ切つた儘、自分の室の方へ出て行つた。

僕は動く考へもなく故の席に坐つてゐた。僕の胸には忌々しい何物も宿らなかつた。千代子の嫁に行く行かないが、僕に何う影響するかを、此時始めて實際に自覚する事の出来た僕は、それを自覚させて呉れた彼女の翻弄に對して感謝した。僕は今迄気が附かずに彼女を愛してゐたのかも知れなかつた。或は彼女が気が附かないうちに僕を愛してゐたのかも知れなかつた。——僕は自分といふ正體が、夫程解り悪い怖いものなのだらうかと考へて、しばらく茫然としてゐた。すると彼方の方で電話がちりん／＼と鳴つた。千代子が縁傳ひに急ぎ足で遣つて来て、僕に一所に電話を掛けて呉れと頼んだ。僕には一所に掛けるといふ意味が呑み込めなかつたが、すぐ立つて彼女と共に電話口へ行つた。

「もう呼び出してあるのよ。妾聲が暖れて、咽喉が痛くつて話しが出来ないから貴方代理をして頂戴。聞く方は妾が聞くから」

僕は相手の名前も分らない、又向うの話しの通じない電話を掛けるべく、前屈みになつて用意をした。千代子は既に受話器を耳に宛ててゐた。それを通して彼女の頭へ送られる言葉は、獨り彼女が占有する丈なので、僕はたゞ彼女の小声でいふ挨拶を大きくして譯も解らず先方へ取次ぐに過ぎなかつた。夫でも始めの内は滑稽も構はず暇が掛かるのも厭はず平氣で遣つてゐたが、次

第に僕の好奇心を挑發する様な返事や質問が千代子の口から出て来るので、僕は曲んだ儘、お一寸それを御貸しと聲を掛けて左手を眞直に千代子の方へ差し伸べた。千代子は笑ひながら否々をして見せた。僕は更に姿勢を正しくして、受話器を彼女の手から奪はうとした。彼女は決して夫を離さなかつた。取らうとする取らせまいとする争ひが二人の間に起つた時、彼女は手早く電話を切つた。さうして大きな聲を揚げて笑ひ出した。

十一

斯ういふ光景が若し今より一年前に起つたなら僕は其後何遍も繰り返し／＼思つた。さう思ふ度に、もう遅過ぎる、時機は既に去つたと運命から宣告される様な氣がした。今からでも斯ういふ光景を二度三度と重ねる機會は捉まへられるではないかと、同じ運命が暗に僕を咬す日もあつた。成程二人の情愛を互に反射させ合ふ爲にのみ眼の光を使ふ手段を憚らなかつたなら、千代子と僕とは其日を基點として出立しても、今頃は人間の利害で割く事の出来ない愛に陥つてゐたかも知れない。たゞ僕はそれと反對の方針を取つたのである。

田口夫婦の意向や僕の母の希望は、他人の入れ智慧同様に意味の少ないものとして、單に彼女

と僕を裸にした生れ付き丈を比較すると、僕等は到底一所になる見込のないものと僕は平生から信じてゐた。是は何故と聞かれても満足に行く様に答辯が出来ないかも知れない。僕は人に説明する爲にさう信じてゐるのでないから。僕はかつて文學好きのある友達からダヌンチオと一少女の話聞いた事がある。ダヌンチオといふのは今の以太利で一番有名な小説家ださうだから、僕の友達の主意は無論彼の勢力を僕に紹介する積りだつたのだらうが、僕には其所へ引合ひに出された少女の方が彼よりも遙かに興味が多かつた。其話は斯うである。

ある時ダヌンチオが招待を受けてある會合の席へ出た。文學者を國家の裝飾の様に持て囃す西洋の事だから、ダヌンチオは其席に群がる凡ての人から多大の尊敬と愛嬌を以て偉人の如く取扱はれた。彼が滿堂の注意を一身に集めて、衆人の間を彼所此所徘徊してゐるうち、何ういふ機会か自分の手巾を足の下へ落とした。混雜の際と見えて、彼は固より、傍のものも一向それに氣が附かずにゐた。すると未だ年の若い美しい女が一人其手巾を床の上から取り上げて、ダヌンチオの前へ持つて來た。彼女はそれをダヌンチオに渡す積りで、是は貴方のでせうと聞いた。ダヌンチオは難有うと答へたが、女の美しい器量に對して一寸愛嬌が必要になつたと見えて「貴方のにして持つて入らつしやい、進上しますから」と恰も少女の喜びを豫想した様な事を云つた。女は

一口の答もせず黙つて其手巾を指先で撮んだ儘燵の傍迄行つていきなり夫を火の中に投げ込んだ。ダヌンチオは別にして其他の席に居合はせたものは悉く微笑を洩らした。

僕は此話を聞いた時、年の若い茶褐色の髪毛を有つた以太利生れの美人を思ひ浮かべるよりも、其代りとしてすぐ千代子の眼と眉を想像した。さうして夫が若し千代子でなくつて妹の百代子であつたなら、たとひ腹の中は何うあらうとも、其場は禮を云つて快く手巾を貰ひ受けたに違ひあるまいと思つた。たゞ千代子には夫が出来ないのである。

口の悪い松本の叔父は此姉妹に渾名を附けて常に大蝦蟆と小蝦蟆と呼んでゐる。二人の口が唇の薄い割に長過ぎる所が銀貨入れの墓口だと云つては常に二人を笑はせたり怒らせたりする。是は性質に關係のない顔形の話であるが、同じ叔父が口癖の様に此姉妹を評して、小墓は大人しくつて好いが、大墓は少し猛烈過ぎると云ふのを聞く度に、僕はあの叔父が何う千代子を觀察してゐるのだらうと考へて、必ず彼の眼識に疑ひを挟みたくなる。千代子の言語なり舉動なりが時に猛烈に見えるのは、彼女が女らしくない粗野な所を内に藏してゐるからではなくつて、餘り女らしい優しい感情に前後を忘れて自分を投げ掛けるからだとい僕は固く信じて疑はないのである。彼女の有つてゐる善悪是非の分別は殆ど學問や經驗と獨立してゐる。たゞ直覺的に相手を目當てに

燃え出す丈である。夫だから相手は時によると稲妻に打たれた様な思ひをする。當りの強く烈しく来るのは、彼女の胸から純粹な塊りが一度に多量に飛んで出るといふ意味で、刺だの毒だの腐蝕劑だのを吹き掛けたり浴びせ掛けたりするのは丸で譯が違ふ。其證據にはたとひ何れ程烈しく怒られても、僕は彼女から清いもので自分の腸を洗はれた様な氣持のした場合が今迄に何遍もあつた。氣高いものに出會つたといふ感じさへ稀には起した位である。僕は天下の前になど一人立つて、彼女はあらゆる女のうちに尤も女らしい女だと辯護したい位に思つてゐる。

十一

是程好く思つてゐる千代子を妻として何處が不都合なのか。——實は僕も自分で自分の胸に斯う聞いた事がある。其時理由も何もまだ考へない先に、僕はまづ恐ろしくなつた。さうして夫婦としての二人を長く眼前に想像するに堪へなかつた。斯んな事を母に云つたら定めし驚くだらう、同年配の友達に話しても或は通じないかも知れない。けれども強ひて沈黙のなかに、記憶を埋める必要もないから、それを自分丈の感想に止めないで此所に自白するが、一口に云ふと、千代子は恐ろしい事を知らない女なのである。さうして僕は恐ろしい事丈知つた男なのである。だから

唯釣り合はない計りでなく、夫婦となれば正に逆に出來上がるより外に仕方がないのである。

僕は常に考へてゐる。「純粹な感情程美しいものはない。美しいもの程強いものはない」と。強いものが恐れないのは當り前である。僕がもし千代子を妻にするとしたら、妻の眼から出る強烈な光に堪へられないだらう。其光は必ずしも怒を示すとは限らない。情の光でも、愛の光でも、若しくは渴仰の光でも同じ事である。僕は屹度其光の爲に射竦められるに極まつてゐる。それと同程度或はより以上の輝くものを、返禮として彼女に與へるには、感情家として僕が餘りに貧弱だからである。僕は芳烈な一樽の清酒を貰つても、それを味はひ盡くす資格を持たない下戸として、今日迄世間から教育されて來たのである。

千代子が僕の所へ嫁に來れば必ず殘酷な失望を経験しなければならぬ。彼女は美しい天賦の感情を、有るに任せて惜し氣もなく夫の上に注ぎ込む代りに、それを受け入れる夫が、彼女から精神上の營養を得て、大いに世の中に活躍するのを唯一の報酬として夫から豫期するに違ひない。年の行かない、學問の乏しい、見識の狭い點から見ると氣の毒と評して然るべき彼女は、頭と腕を擧げて實世間に打ち込んで、肉眼で指す事の出來る権力か財力を攫まなくては男子でないと考へてゐる。單純な彼女は、たとひ僕の所へ嫁に來ても、矢張りさう云ふ働き振を僕から要求し、

又要求さへすれば僕に出来るもののみ思ひ詰めてゐる。二人の間に横たはる根本的の不幸は此所に存在すると云つても差支へないのである。僕は今云つた通り、妻としての彼女の美しい感情を、さう多量に受け入れる事の出来ないに至つて燻つた性質なのだが、よし焼石に水を濺いだ時の様に、それを悉く吸ひ込んだ所で、彼女の望み通りに利用する譯には到底行かない。もし純粹な彼女の影響が僕の何處かに表はれるとすれば、それは幾何説明しても彼女には全く分らない所に、思ひも寄らぬ形となつて發現する丈である。萬一彼女の眼に留まつても、彼女はそれをコスメチックで塗り堅めた僕の頭や羽二重の足袋で包んだ僕の足よりも難有がらないだらう。要するに彼女から云へば、美しいものを僕の上に永久浪費して、次第々々に結婚の不幸を嘆くに過ぎないのである。

僕は自分と千代子を比較する毎に、必ず恐れない女と恐れる男といふ言葉を繰り返したくなる。仕舞にはそれが自分の作つた言葉でなくつて、西洋人の小説に其儘出てゐる様な氣を起す。此間講釋好きの松本の叔父から、詩と哲學の區別を聞かされて以來は、恐れない女と恐れる男といふと、忽ち自分に縁の遠い詩と哲學を想ひ出す。叔父は素人學問ながら斯んな方面に興味を有つてゐる丈に、面白い事を色々話して聞かしたが、僕を捕まへて「御前の様な感情家は」と暗に詩人

らしく僕を評したのは間違つてゐる。僕に云はせると、恐れないのが詩人の特色で、恐れるのが哲人の運命である。僕の思ひ切つた事の出来ずに愚圖々々してゐるのは、何より先に結果を考へて取越苦勞をするからである。千代子が風の如く自由に振舞ふのは、先の見えない程強い感情が一度に胸に湧き出るからである。彼女は僕の知つてゐる人間のうちで、最も恐れない一人である。だから恐れる僕を輕蔑するのである。僕は又感情といふ自分の重みで蹴爪附きさうな彼女を、運命のアイロニーを解せざる詩人として深く憐むのである。否時によると彼女の爲に戰慄するのである。

十三

須永の話しの末段は少し敬太郎の理解力を苦しめた。事實を云へば彼は又彼なりに詩人とも哲學者とも云ひ得る男なのかも知れなかつた。然し夫は傍から彼を見た眼の評する言葉で、敬太郎自身は決して何方とも思つてゐなかつた。従つて詩とか哲學とかいふ文字も、月の世界でなければ役に立たない夢の様なものとして、殆ど一顧に價しない位に見限つてゐた。其上彼は理窟が大嫌ひであつた。右か左へ自分の身體を動かさし得ない唯の理窟は、いくら旨く出来ても彼には用の

ない賈造紙幣と同じ物であつた。従つて恐れる男とか恐れぬ女とかいふ辻占に似た文句を、黙つて聞いてゐる筈はなかつたのだが、しつとりと潤つた身の上話の續きとして、感想が其所へ流れ込んで来たものだから、敬太郎も能く解らないながら素直に耳を傾けなければ濟まなかつたのである。

須永も其所に氣が附いた。

「話が理窟張つて六づかしくなつて来たね。あんまり一人で調子に乗つて饒舌つてゐるものだから」

「いや構はん。大變面白」

「洋杖の効果がありやしないか」

「何うも不思議にあるやうだ。序にもう少し先迄話す事にしようぢやないか」

「もう無いよ」

須永はさう云ひ切つて、静かな水の上に眼を移した。敬太郎も少時黙つてゐた。不思議にも今聞かされた須永の詩だか哲學だか分らないものが、形の判然しない雲の峯の様に、頭の中に聳えて容易に消えさうにしなかつた。何事も話らないで彼の前に坐つてゐる須永自身も、平生の紋切

形を離れた怪しい一種の人物として彼の眼に映じた。何うしてもまだ話しの續きがあるに違ひないと思つた敬太郎は、今の一番仕舞の物語は何時頃の事かと須永に尋ねた。それは自分の三年生の時の出来事だと須永は答へた。敬太郎は同じ關係が過去一年餘りの間に何ういふ徑路を取つて何う進んで、今は何んな解決が附いてゐるか聞き返へした。須永は苦笑して、先づ外へ出てからにしようと言つた。二人は勘定を濟まして外へ出た。須永は先へ立つ敬太郎の得意に振り動かす洋杖の影を見て又苦笑した。

柴又の帝釋天の境内に來た時、彼等は平凡な堂宇を、義理に拜ませられたやうな顔をしてすぐ門を出た。さうして二人共汽車を利用してすぐ東京へ歸らうといふ氣を起した。停車場へ來ると間怠こい田舎汽車の發車時間にはまだ大分間があつた。二人はすぐ其所にある茶店に入つて休息した。次の物語は其時敬太郎が前約を楯に須永から聞かして貰つたものである。――
僕が大學の三年から四年に移る夏休みの出来事であつた。宅の二階に籠もつて此暑中を何う暮らしたら宜からうと思案してゐると、母が下から上がつて來て、閑になつたら鎌倉へ一寸行つて來たら何うだと云つた。鎌倉には其一週間程前から田口のものが避暑に行つてゐた。元來叔父は餘り海邊を好まない性質なので、一家のものは毎年輕井澤の別莊へ行くのを例にしてゐたのだが、

其年は是非海水浴がしたいと云ふ娘達の希望を容れて材木座にある、或人の邸宅を借り入れたのである。移る前に千代子が暇乞かた／＼報知に来て、まだ行つては見ないけれども、山陰の涼しい崖の上に、二段か三段に建てた割合手廣な住居ださうだから是非遊びに来いと母に勧めてゐたのを、僕は傍で聞いてゐた。夫で僕は母に貴方こそ行つて遊んで來たら氣保養になつて可からうと忠告した。母は懐から千代子の手紙を出して見せた。夫には千代子と百代子の連名で、母と僕と一所に來る様にと、彼等の女親の命令を傳へる如く書いてあつた。母が行くとすれば年寄一人を汽車に乗せるのは心配だから、是非共僕が附いて行かなければならなかつた。變窟な僕からいふと、さう混雜した所へ二人で押し掛けるのは、世話にならないにしても氣の毒で厭だつた。けれども母は行きたい様な顔をした。さうして夫が僕の爲に行きたい様な顔に見えるので僕は益厭になつた。が、とゞの詰りと／＼行く事にした。斯う云つても人には通じないかも知れないが、僕は意地の強い男で、又意地の弱い男なのである。

十 四

母は内氣な性分なので平生から餘り旅行を好まなかつた。昔風に重きを置かなければ承知しな

い嚴格な父の生きてゐる頃は外へもさう度々は出られない様子であつた。現に僕は父と母が娯樂の目的をもつて一所に家を留守にした例を覚えてゐない。父が死んで自由が利くやうになつても、さう勝手な時に好きな所へ行く機會は不幸にして僕の母には與へられなかつた。一人で遠くへ行つたり、長く宅を空けたりする便宜を有たない彼女は、母子二人の家庭に斯うして幾年を老いたのである。

鎌倉へ行かうと思ひ立つた日、僕は彼女のために一個の鞆を携へて直行の汽車に乗つた。母は車の動き出す時、隣に腰を掛けた僕に、汽車も久し振だねと笑ひながら云つた。さう云はれた僕にも實は餘り頻繁な經驗ではなかつた。新しい氣分に誘はれた二人の會話は平生よりは生々してゐた。何を話したか自分にも一向覺えない事を、聞いたり聞かれたりして斷續に任せてゐるうちに車は目的地に着いた。豫め通知をしてないので停車場には誰も迎へに來てゐなかつたが、車を雇ふとき某さんの別荘と注意したら、車夫はすぐ心得て引き出した。僕はしばらく見ないうちに、急に新しい家の多くなつた砂道を通りながら、松の間から遠くに見える畠中の黄色い花を美しく眺めた。それは一寸見ると丸で菜種の花と同じ趣きを具へた目新しいものであつた。僕は車の上で、この散ら／＼する色は何だらうと考へ抜いた揚句、突然唐茄子だと氣が附いたので獨り

可笑しがつた。

車が別荘の門に着いた時、戸障子を取り外した座敷の中に動く人の影が往來から能く見えた。僕はそのうちに白い浴衣を着た男のゐるのを見て、多分叔父が昨日あたり東京から來て泊つてゐるのだらうと思つた。所が奥に居るものが悉く僕等を迎へるために玄關へ出て來たのに、其男丈は少しも顔を見せなかつた。勿論叔父なら其位の事は有る可き筈だと思つて、座敷へ通つて見ると、其所にも彼の姿は見えなかつた。僕がさよ／＼してゐるうちに、叔母と母が汽車の中は嘸暑かつたらうとか、見晴らしの好い所が手に入つて結構だとか、年寄の女だけに口數の多い挨拶の遣り取りを始めた。千代子と百代子は母の爲に浴衣を勧めたり、脱ぎ捨てた着物を晒干して呉れた。僕は下女に風呂場へ案内して貰つて、水で顔と頭を洗つた。海岸からは大分道程のある山手だけれども水は存外悪かつた。手拭を絞つて金盥の底を見てゐると、忽ち砂の様な滓が澱んだ。

「是を御使ひなさい」といふ千代子の聲が突然後でした。振り返ると、乾いた白いタオルが肩の所に出た。僕はタオルを受取つて立ち上がった。千代子は又傍にある鏡臺の抽出から櫛を出して呉れた。僕が鏡の前に坐つて髪を解かしてゐる間、彼女は風呂場の入口の柱に身體を持た

して、僕の濡れた頭を眺めてゐたが、僕が何も云はないので、向うから「悪い水でせう」と聞いた。僕は鏡の中を見たなり、何うして斯んな色が着いてゐるのだらうと云つた。水の問答が済んだとき、僕は櫛を鏡臺の上に置いて、タオルを肩に掛けた儘立ち上がった。千代子は僕より先に柱を離れて座敷の方へ行かうとした。僕は藪から棒に後から彼女の名を呼んで、叔父は何處にゐるか尋ねた。彼女は立ち止まつて振り返つた。

「御父さんは四五日前一寸入らしたけど、一昨日又用が出來たつて東京へ御歸りになつた限りよ」

「此所にや居ないのか」

「えゝ。何故。ことによると今日の夕方吾一さんを連れて、又入らつしやるかも知れないけども」

千代子は明日もし天氣が好ければ皆と魚を漁りに行く筈になつてゐるのだから、田口が都合して今日の夕方迄に來て呉れなければ困るのだと話した。さうして僕にも是非一所に行けと勧めた。僕は魚の事よりも先刻見た浴衣掛けの男の居所が知りたかつた。

「先刻誰だか男の人が一人座敷に居たぢやないか」

「あれ高木さんよ。ほら秋子さんの兄さんよ。知つてるでせう」

僕は知つて居るとも居ないとも答へなかつた。然し腹の中では、此高木と呼ばれる人の何者かをすぐ了解した。百代子の學校朋輩に高木秋子といふ女のある事は前から承知してゐた。其人の顔も、百代子と一所に撮つた寫眞で知つてゐた。手蹟も繪端書で見た。一人の兄が亞米利加へ行つてゐるのだとか、今歸つて來た許りだとかいふ話も其頃耳にした。困らない家庭なのだらうから、其人が鎌倉へ遊びに來てゐる位は怪しむに足らなかつた。よし此所に別荘を持つてゐた所で不思議はなかつた。が、僕は其高木といふ男の住んでゐる家を千代子から聞き度くなつた。

「つい此下よ」と彼女は云つた限りであつた。

「別荘かい」と僕は重ねて聞いた。

「えゝ」

二人はそれ以外を語らずに座敷へ歸つた。座敷では母と叔母がまだ海の色が何うだとか、大佛

が何方の見當に中たるとかいふ左程でもない事を、問題らしく聞いたり教へたりしてゐた。百代子は千代子に彼等の父が其日の夕方迄に來ると云つて、わざ／＼知らせて來た事を告げた。二人は明日魚を漁りに行く時の楽しみを、今眼の當りに描き出して、既に手の内に握つた人の如く語り合つた。

「高木さんも入らつしやるんでせう」

「市さんも入らつしやう」

僕は行かないと答へた。其理由として、少し宅に用があつて、今夜東京へ歸らなければならぬいからといふ説明を加へた。然し腹の中では只でさへ斯う混雜してゐる處へ、もし田口が吾一でも連れて來たら、夫こそ自分の寐る場所さへ無くなるだらうと心配したのである。其上僕は姉妹の知つてゐる高木といふ男に會ふのが厭だつた。彼は先刻迄二人と僕の評判をしてゐたが、僕の來たのを見て、遠慮して裏から歸つたのだと百代子から聞いた時、僕はまづ窮屈な思ひを逃れて好かつたと喜んだ。僕は夫程知らない人を怖がる性分なのである。

僕の歸ると云ふのを聞いた二人は、驚いた様な顔をして留めに掛かつた。殊に千代子は躍起になつた。彼女は僕を捉まへて變人だと云つた。母を一人殘してすぐ歸る法はないと云つた。歸る

ど云つても歸さないと言つた。彼女は自分の妹や弟に對してよりも、僕に對しては遙かに自由な言葉を使ひ得る特權を有つてゐた。僕は平生から彼女が僕に對して振舞ふ如く大膽に率直に（或時は善意ではあるが）威壓的に、他人に向つて振舞ふ事が出来たなら、僕の様な他に缺點の多いものでも、嘸愉快に世の中を渡つて行かれるだらうと想像して、大いに此小さな暴君を羨ましがつてゐた。

「えらい權幕だね」

「貴方は親不孝よ」

「ぢや叔母さんに聞いて来るから、もし叔母さんが泊つて行く方が可いつて、仰しやつたら、泊つて入らつしやい。ね」

百代子は仲裁を試みる様な口調で斯う云ひながら、すぐ年寄の話してゐる座敷の方へ立つて行つた。僕の母の意向は無論聞く迄もなかつた。従つて百代子の年寄二人から齎した返事も此所に述べるのは蛇足に過ぎない。要するに僕は千代子の捕虜になつたのである。

僕はやがて一寸町へ出て來るといふ口實の下に、午後の暑い日を洋傘で遮りながら別荘の附近を順序なく徘徊した。久しく見ない土地の昔を偲ぶ爲と云へば云へない事もないが、僕にそんな

寂びた心持を嬉しがる風流があつたにした所で、今は夫に耽る落附きも餘裕も與へられなかつた。僕は只うろ／＼と其所等の標札を讀んで歩いた。さうして比較的立派な平屋建の門の柱に、高木の二字を認めた時、是だらうと思つて、しばらく門前に佇んだ。夫から後は全く何の目的もなしに猶緩漫な歩行を約十五分許り續けた。然し是は僕が自分の心に、高木の家を見る爲にわざ／＼表へ出たのではないと申し渡したと同じ様なものであつた。僕はさつさと引き返した。

十六

實を云ふと、僕は此高木といふ男に就いて、殆ど何も知らなかつた。只一遍百代子から彼が適當な配偶を求めつゝある由を聞いた丈である。其時百代子が、御姉さんには何うかしらと、丁度相談でもする様に僕の顔色を見たのを覚えてゐる。僕は何時もの通り冷淡な調子で、好いかも知れない、御父さんか御母さんに話して御覽と云つたと記憶する。夫から以後僕の田口の家に入れた度数は何遍あるか分らないが、高木の名前は少なくとも僕のゐる席ではつひぞ誰の口にも上らなかつたのである。夫程親しみの薄い、顔さへ見た事のない男の住居に何の興味があつて、僕はわざ／＼砂の焼ける暑さを冒して外出したのだらう。僕は今日迄其理由を誰にも話さずにゐ

た。自分自身にも其時には能く説明が出来なかつた。たゞ遠くの方にある一種の不安が、僕の身體を動かして来たといふ漠たる感じが胸に射した計りであつた。それが鎌倉で暮らした二日の間に、紛れもないある形を取つて發展した結果を見て、僕を散歩に誘ひ出したのも矢張り同じ力に違ひないと今から思ふのである。

僕が別荘へ歸つて一時間経つか経たないうちに、僕の注意した門札と同じ名前の男が忽ち僕の前に現はれた。田口の叔母は、高木さんですと云つて丁寧に其男を僕に紹介した。彼は見るからに肉の緊まつた血色の好い青年であつた。年から云ふと、或は僕より上かも知れないと思つたが、其さび／＼した顔附を形容するには、是非共青年といふ文字が必要になつた位彼は生氣に充ちて居た。僕は此男を始めて見た時、是は自然が反對を比較する爲に、わざと二人を同じ座敷に並べて見せるのではなからうかと疑つた。無論其不利益な方面を代表するのが僕なのだから、斯う改まつて引き合はされるのが、僕にはたゞ悪い洒落としか受取られなかつた。

二人の容貌が既に意地の好くない對照を與へた。然し様子とか應對振とかになると僕は更に甚しい相違を自覺しない譯に行かなかつた。僕の前にゐるものは、母とか叔母とか従妹とか、皆親しみの深い血屬ばかりであるのに、夫等に取り捲かれてゐる僕が、此高木に比べると、却て何處

からか客にでも来たやうに見えた位、彼は自由に遠慮なく、しかも或程度の品格を落とす危険なしに己を取扱ふ術を心得てゐたのである。知らない人を怖れる僕に云はせると、此男は生れるや否や交際場裏に棄てられて、其儘今日迄同じ所で人と成つたのだと評したかつた。彼は十分と經たないうちに、凡ての會話を僕の手から奪つた。さうして夫を悉く一身に集めて仕舞つた。其代り僕を除け物にしない爲の注意を拂つて、時々僕に一句か二句の言葉を與へた。夫が又生憎僕には興味の乗らない話題ばかりなので、僕はみんなを相手にする事も出来ず、高木一人を相手にする譯にも行かなかつた。彼は田口の叔母を親しげに御母さん御母さんと呼んだ。千代子に對しては、僕と同じ様に、千代ちやんといふ幼馴染に用ひる名を、自然に命ぜられたかの如く使つた。さうして僕に、先程御着きになつた時は、丁度千代ちやんと貴方の御噂をしてゐた所でしたと云つた。

僕は初めて彼の容貌を見た時から既に羨ましかつた。話しをする所を聞いて、すぐ及ばないと思つた。夫丈でも此場合に僕を不愉快にするには充分だつたかも知れない。けれども段々彼を観察してゐるうちに、彼は自分の得意な點を、劣者の僕に見せ附ける様な態度で、誇り顔に發揮するのではなからうかといふ疑ひが起つた。其時僕は急に彼を憎み出した。さうして僕の口を利く

べき機會が廻つて來てもわざと沈黙を守つた。

落ち附いた今の氣分で其時の事を回顧して見ると、斯う解釋したのは或は僕の僻みだつたかも知らない。僕はよく人を疑る代りに、疑る自分も同時に疑はずには居られない性質だから、結局他に話しをする時にも何方と判然した所が云ひ悪くなるが、若し夫が本當に僕の僻み根性だとすれば、其裏面には未だ凝結した形にならない嫉妬が潜んでゐたのである。

十七

僕は男として嫉妬の強い方か弱い方か自分にも能く解らない。競争者のない一人息子として寧ろ大事に育てられた僕は、少なくとも家庭のうちで嫉妬を起す機會を有たなかつた。小學や中學は自分より成績の好い生徒が幸ひにしてさう無かつた爲か、至極太平に通り返けた様だと思ふ。高等學校から大學へ掛けては、席次に左程重きを置かないのが、一般の習慣であつた上、年毎に自分を高く見積る見識といふものが加はつて來るので、點數の多少は大した苦にならなかつた。此等を外にして、僕はまだ痛切な戀に落ちた經驗がない。一人の女を二人で争つた覺えは猶更な。自白すると僕は若い女殊に美しい若い女に對しては、普通以上に精密な注意を拂ひ得る男なので

ある。往來を歩いて綺麗な顔と綺麗な着物を見ると、雲間から明らかな日が射した時の様に晴れやかな心持になる。會にはその所有者になつて見たいと云ふ者へも起る。然し其顔と其着物が何う果敢なく變化し得るかをすぐ豫想して、酔ひが去つて急にぞつとずる人の淺間しさを覺える。僕をして執念く美しい人に附け纏はらせないものは、正に此酒に棄てられた淋しみの障害に過ぎない。僕は此氣分に乗り移られるたびに、若い自分が突然老人か坊主に變つたのではあるまいかと思つて、非常な不愉快に陥る。が、或は夫が爲に戀の嫉妬といふものを知らずに済ます事が出來たかも知れない。

僕は普通の人間でありたいといふ希望を有つてゐるから、嫉妬心のないのを自慢にたくも何ともないけれども、今話した様な譯で、眼の當りに此高木といふ男を見る迄は、さういふ名の附く感情に強く心を奪はれた試しがなかつたのである。僕は其時高木から受けた名状し難い不快を明らかに覺えてゐる。さうして自分の所有でもない、又所有にする氣もない千代子が原因で、此嫉妬心が燃え出したのだと思つた時、僕は何うしても僕の嫉妬心を抑へ附けなければ自分の人格に對して申し譯がない様な氣がした。僕は存在の權利を失つた嫉妬心を抱いて、誰にも見えない腹の中で苦悶し始めた。幸ひ千代子と百代子が日が薄くなつたから海へ行くと云ひ出したので、

高木が必ず彼等に跟いて行くに違ひないと思つた僕は、早く跡に一人残りたたい願つた。彼等は果して高木を誘つた。所が意外にも彼は何とか言譯を拵へて容易に立たうとしなかつた。僕はそれを僕に對する遠慮だらうと推察して、益眉を暗くした。彼等は次に僕を誘つた。僕は固より應じなかつた。高木の面前から一刻も早く逃れる機會は、與へられないでも手を出して奪ひたい位に思つてゐたのだが、今の氣分では二人と濱邊まで行く努力が既に厭であつた。母は失望した様な顔をして、一所に行つて御出でなと云つた。僕は黙つて遠くの海の上を眺めてゐた。姉妹は笑ひながら立ち上がった。

「相變らず偏窟ね貴方は。丸で腕白小僧見たいだわ」

千代子に斯う罵られた僕は、實際誰の目にも立派な腕白小僧として見えたらう。僕自身も腕白小僧らしい思ひをした。調子の好い高木は縁側へ出て、二人の爲に菅笠の様に大きな麥藁帽を取つて遣つて、行つて入らつしやいと挨拶をした。

二人の後姿が別荘の門を出た後で、高木は猶しばらく年寄を相手に話してゐた。斯うやつて避暑に來てゐると氣樂で好いが、何うして日を送るかが大問題になつて却て苦痛になる杯と、實際活氣に充ちた身體を暑さと退屈さに持ち扱つてゐる風に見えた。やがて、是から晚迄何をして暮

らさうかしらと獨り言の様に云つて、不意に思ひ出した如く、玉は何うですと僕に聞いた。幸ひにして僕は生れてからまだ玉突といふ遊戯を試みた事がなかつたのですぐ斷つた。高木は丁度好い相手が出來たと思つたのに残念だと云ひながら歸つて行つた。僕は活潑に動く彼の後影を見送つて、彼は是から姉妹のゐる濱邊の方へ行くに違ひないといふ氣がした。けれども僕は坐つてゐる席を動かさなかつた。

十八

高木の去つた後、母と叔母は少時彼の噂をした。初對面の人丈に母の印象は殊に深かつた様に見えた。氣の置けない、至つて行き届いた人らしいと云つて賞めてゐた。叔母は又母の批評を一實例に照らして確める風に見えた。此時僕は高木に就いて知り得た極めて乏しい知識の殆ど全部を訂正しなければならぬ事を發見した。僕が百代子から聞いたものでは、亞米利加歸りといふ話であつた彼は、叔母の語る所によると、さうではなくつて全く英吉利で教育された男であつた。叔母は英國流の紳士といふ言葉を誰かから聞いたと見えて、二三度それを使つて、何の心得もない母を驚かしたのみか、だから何處となく品の善い所があるんですよと母に説明して聞かせたり

した。母は只へえと感心するのみであつた。

二人が斯んな話しをしてゐる内、僕は殆ど一口も口を利かなかつた。唯上部から見ても平生の調子と何の變る所もない母が、此際高木と僕を比較して、腹の中で何う思つてゐるだらうと考へると、僕は母に對して氣の毒でもあり又恨めしくもあつた。同じ母が、千代子對僕と云ふ古い關係を一方に置いて、更に千代子對高木といふ新しい關係を一方に想像するなら、果して何んな心持になるだらうと思ふと、假令少しの不安でも、避け得られる所をわざと與へるために彼女を連れ出したも同じ事になるので、僕は唯でさへ不愉快な上に、年寄に濟まないといふ苦痛をもう一つ重ねた。

前後の様から推す丈で、實際には事實となつて現はれて來なかつたから何とも云ひ兼ねるが、叔母は此場合を利用して、若し縁があつたら千代子を高木に遣る積りである位の打明け話を、僕等母子に向つて、相談とも宣告とも片附かない形式の下に、する氣だつたかも知れない。凡てに氣が附く癖に、斯うなると却て僕よりも迂遠い母は何うだか、僕は其場で叔母の口から、僕と千代子と永久に手を別へべき談判の第一節を豫期してゐたのである。幸か不幸か、叔母がまだ何も云ひ出さないうちに、姉妹は濱から廣い麥藁帽の縁をひらく／＼として歸つて來た。僕が僕の占ひ

的の中しなかつたのを、母の爲に喜んだのは事實である。同時に同じ出來事が僕を焦躁しがらせたのも嘘ではない。

夕方になつて、僕は姉妹と共に東京から來る筈の叔父を停車場に迎へるべく母に命ぜられて家を出た。彼等は揃ひの浴衣を着て白い足袋を穿いてゐた。それを後から見送つた彼等の母の眼に彼等が如何なる誇りとして映じたらう。千代子と竝んで歩く僕の姿が又僕の母には畫として普通以上に何んなに價が高かつたらう。僕は母を欺く材料に自然から使はれる自分を心苦しく思つて、門を出る時振り返つて見たら、母も叔母もまだ此方を見てゐた。

途中迄來た頃、千代子は思ひ出した様に突然留まつて、「あつ高木さんを誘ふのを忘れた」と云つた。百代子はすぐ僕の顔を見た。僕は足の運びを止めたが、口は開かなかつた。「最う好いぢやないの、此所迄來たんだから」と百代子が云つた。「だつて妾先刻誘つて呉れつて頼まれたのよ」と千代子が云つた。百代子は又僕の顔を見て逡巡つた。

「市さん貴方時計持つて入らしつて。今何時」
僕は時計を出して百代子に見せた。

「まだ間に合はない事はない。誘つて來るなら來ると好い。僕は先へ行つて待つてゐるから」

「最う遅いわよ貴方。高木さん、もし入らつしやる積りなら屹度一人でも入らしつてよ。後から忘れまして詫つたら夫で好かないの」

姉妹は二三度押し問答の末遂に後戻りをしない事にした。高木は百代子の豫言通りまだ汽車の着かないうちに急ぎ足で構内へ這入つて来て、姉妹に、何うも非道い、あれ程頼んで置くのにと云つた。夫から御母さんとは聞いた。最後に僕の方を向いて、先程はと愛想の好い挨拶をした。

十九

其晩は叔父と従弟を待ち合はした上に、僕等母子が新に食卓に加はつたので、食事の時間が何時もより、大分後れた計りでなく、私に恐れられた通り甚しい混雑の中に箸と茶碗の動く光景を見せられた。叔父は笑ひながら、市さん丸で火事場の様だらう、然し會には斯んな騒ぎをして飯を食ふのも面白いものだよと云つて、間接の言譯をした。閑静な膳に慣れた母は、此賑やかさの中に實際叔父の言葉通り愉快らしい顔をしてゐた。母は内氣な癖に斯ういふ陽氣な席が好きなのである。彼女は其時偶然口に上つた一鹽にした小鱈の焼いたのを美味いと云つて頻りに賞めた。

「漁師に頼んどくと幾何でも拵へて来て呉れますよ。何なら、歸りに持つて入らしやいな。」

姉さんが好きだから上げたいと思つてたんですが、つい序が無かつたもんだから。夫にすぐ腐くなるんでね」

「妾も何時か大磯で詠へてわざ／＼東京迄持つて歸つた事があるが、餘つ程氣を附けないと途中でね」

「腐るの」と千代子が聞いた。

「叔母さん興津鯛御嫌ひ。妾はよか興津鯛の方が美味しいわ」と百代子が云つた。

「興津鯛は又興津鯛で結構ですよ」と母は大人しい答をした。

斯んなくだ／＼しい會話を、僕が何故覺えてゐるか云ふと、僕は其時母の顔に表はれた、さも満足らしい氣持を能く注意して見てゐたからであるが、最う一つは僕が母と同じ様に一鹽の小鱈を好いてゐたからでもある。

序だから此所で云ふ。僕は自分の嗜好や性質の上に於て、母に大變能く似た所と、全く違つた所と兩方有つてゐる。是はまだ誰にも話さない祕密だが、實は單に自分の心得として、過去幾年かの間、僕は母と自分と何處が何う違つて、何處が何う似てゐるかの詳しい研究を人知れず重ねたのである。何故そんな眞似をしたかと母に聞かれては云ひ兼ねる。たとひ僕が自分に聞き糺し

て見ても判切云へなかつたのだから、理由は話せない。然し結果からいふと斯うである。――缺點でも母と共に具へてゐるなら僕は太變嬉しかつた。長所でも母になくつて僕丈有つてゐると甚だ不愉快になつた。其内で僕の最も氣になるのは、僕の顔が父に丈似て、母とは丸で縁のない目鼻立に出来上がつてゐる事であつた。僕は今でも鏡を見るたびに、器量が落ちて構はないから、もつと母の人相を多量に受け繼いで置いたら、母の子らしくつて無心持が好いだらうと思ふ。

食事の後れた如く、寐る時間も順繰りに延びて大分遅くなつた。其上急に人数が増えたので、床の位置やら部屋割を極める丈が叔母に取つての一骨折であつた。男三人は一所に固められて、同じ蚊帳に寐た。叔父は肥つた身體を持ち扱つて、團扇をしきりにばた／＼云はした。

「市さん何うだい、暑いぢやないか。是ぢや東京の方が餘つ程樂だね」

僕も僕の隣にゐる吾一も東京の方が樂だと云つた。夫では何を苦しんでわざ／＼鎌倉下り迄出掛けて来て、狭い蚊帳へ押し合ふ様に寐るんだか、叔父にも吾一にも僕にも説明のしやうがなかつた。

「是も一興だ」

疑問は叔父の此一句で忽ち納りが附いたが、暑さの方は中々去らないので誰もすぐは寐つかれ

なかつた。吾一は若い丈に、明日の魚捕りの事を叔父に向つてしきりに質問した。叔父は又眞面目だか冗談だか、船に乗りさへすれば、魚の方で風を望んで降る様な旨い話をして聞かせた。夫がたゞ自分の俸を相手にする計りでなく、時々はねえ市さんと、そんな事に丸で冷淡の僕迄聽手にするのだから少し變であつた。然し僕の方はそれに對して相當な挨拶をする必要があるので、話しの濟む前には、僕は當然同行者の一人として受け答へをする様になつてゐた。僕は固より行く積りでも何でもなかつたのだから、此變化は僕に取つて少し意外の感があつた。氣樂さうに見える叔父は其内大きな鼾聲をかき始めた。吾一もすやく／＼寐入つた。たゞ僕は開いてゐる眼をわざと閉ぢて、更ける迄色々な事を考へた。

二十

翌日眼が覺めると、隣に寐てゐた吾一の姿が何時の間にかもう見えなくなつてゐた。僕は寐足らない頭を枕の上に着けて、夢とも思索とも名の附かない路を辿りながら、時々別種の人間を偷み見る様な好奇心を以て、叔父の寐顔を眺めた。さうして僕も寐てゐる時は、傍から見ると、矢張り斯う苦のない顔をしてゐるのだらうかと考へ忤した。其所へ吾一が這入つて来て、市さん何

うだらう天氣はと相談した。一寸起きて見ると促すので、起き上がつて縁側へ出ると、海の方には一面に柔らかない靄の幕が掛かつて、近い岬の木立さへ常の色には見えなかつた。降つてるのかねと僕は聞いた。吾一はすぐ庭先へ飛び下りて、空を眺め出したが、少し降つてると答へた。彼は今日の船遊びの中止を深く氣遣ふものの如く、二人の姉妹縁側へ引つ張り出して、頻りに何うだらう何うだらうを繰り返した。仕舞に最後の審判者たる彼の父の意見を必要と認められたものか、まだ寐てゐる叔父をとう／＼呼び起した。叔父は天氣杯は何うでも好いと云つた様な眠たい眼をして、空と海を一應見渡した上、何此模様なら今に屹度晴れるよと云つた。吾一はそれで安心したらしかつたが、千代子は當てにならない無責任な天氣豫報だから心配だと云つて僕の顔を見た。僕は何とも云へなかつた。叔父は、なに大丈夫大丈夫と受合つて風呂場の方へ行つた。食事を済ます頃から霧の様な雨が降り出した。それでも風がないので、海の上は平生よりも却て穏やかに見えた。生憎な天氣なので人の好い母はみんなに氣の毒がつた。叔母は今に屹度本降りになるから今日は止したが好からうと注意した。けれども若いものは悉く行く方を主張した。叔父はぢや御婆さん丈残して、若いものが揃つて出掛ける事にしようと言つた。すると叔母が、では御爺さんは何方になさるとわざと叔父に聞いて、みんなを笑はした。

「今日は是でも若いものの部だよ」

叔父は此言葉を證據立てる爲だか何だか、早速立つて浴衣の尻を端折つて下へ降りた。姉弟三人も其儘の姿で縁から降りた。

「御前達も尻を捲くるが好い」

「厭な事」

僕は山賊の様な毛脛を露出したにした叔父と、靜御前の笠に似た恰好の麥藁帽を被つた女二人と、黒い兵兒帯をこま結びにした弟を、縁の上から見下ろして、全く都離れのした不思議な團體の如く眺めた。

「市さんが又何か悪口を云はうと思つて見てゐる」と百代子が薄笑ひをしながら僕の顔を見た。

「早く降りて入らつしやい」と千代子が叱る様に云つた。

「市さんに悪い下駄を貸して上げるが好い」と叔父が注意した。

僕は一も二もなく降りたが、約束のある高木が來ないので、夫が又一つの問題になつた。大方此天氣だから見合はしてゐるのだらうと云ふのが、みんなの意見なので、僕等がそろ／＼歩いて行く間に、吾一が馳足で迎ひに行つて連れて來る事にした。

叔父は例の調子でしきりに僕に話し掛けた。僕も相手になつて歩調を合はせた。其うちに、男の足だものだから、何時の間にか姉妹を乗り越した。僕は一度振り返つて見たが、二人は後れた事に一向頓着しない様子で、毫も追ひ附かうとする努力を示さなかつた。僕には夫がわざと後から来る高木を待ち合はせる爲の様にしか取れなかつた。それは誘つた人に對する禮儀として、彼等の取るべき當然の所作だつたのだらう。然し其時の僕にはさう思へなかつた。さう思ふ餘地があつても、さうは感ぜられなかつた。早く来いといふ合圖をしようといふ考へで振り向いた僕は、合圖を止めて又叔父と歩き出した。さうして其儘小坪へ這入る入口の岬の所迄来た。其所は海へ出張つた山の裾を、人の通れる丈の狭い幅に削つて、ぐるりと向う側へ廻り込まれる様にした坂道であつた。叔父は一番高い坂の角迄来て留まつた。

二十一

彼は突然彼の體格に相應した大きな聲を出して姉妹を呼んだ。自白するが、僕は夫迄に何度も後を振り返つて見ようとしたのである。けれども氣が咎めると云ふのか、自尊心が許さないと云ふのか、振り向かうとする毎に、首が猪の様に堅くなつて後へ回らなかつたのである。

見ると二人の姿はまだ一町程下にあつた。さうして其すぐ後に高木と吾一が續いてゐた。叔父が遠慮のない大きな聲を出して、おゝいと呼んだ時、姉妹は同時に僕等を見上げたが、千代子はすぐ後にゐる高木の方を向いた。すると高木は被つてゐた麥藁帽を右の手に取つて、僕等を目當てに頻りに振つて見せた。けれども四人のうちで聲を出して叔父に應じたのは只吾一丈であつた。彼は又學校で號令の稽古でもしたものと見えて、海と崖に反響する様な答と共に両手を一度に頭の上に差し上げた。

叔父と僕は崖の鼻に立つて彼等の近寄るのを待つた。彼等は叔父に呼ばれた後も呼ばれない前と同じ遅い歩調で、何か話しながら上がつて来た。僕には夫が尋常でなくつて、大いに巫山戯てゐる様に見えた。高木は茶色のだぶくした外套の様なものを着て時々隠袋へ手を入れた。此暑いのにまさか外套は着られまいと思つて、最初は不思議に眺めてゐたが、段々近くなるに従つて、それが薄い雨除である事に氣が附いた。其時叔父が突然、市さんヨットに乗つて其所いらを遊んで歩くのも面白いだらうねと云つたので、僕は急に氣が附いた様に高木から眼を轉じて脚の下を見た。すると磯に近い所に、真白に塗つた空船が一艘、静かな波の上に浮いてゐた。糠雨と迄も行かない細かいものが猶降り已まないので、海は一面に暈されて、平生なら手に取る様に見える

向う側の絶壁の樹も岩も、殆ど一色に眺められた。其内四人は漸く僕等の傍迄来た。

「何うも御待たせ申しまして、實は髭を剃つてゐたものだから、途中で已める譯に行かず……」
と高木は叔父の顔を見るや否や云ひ譯をした。

「えらい物を着込んで暑かありませんか」と叔父が聞いた。

「暑くつたつて脱ぐ譯に行かないのよ。上はハイカラでも下は蠻殻なんだから」と千代子が笑つた。高木は雨外套の下に、直かに半袖の薄い襦袢を着て、變な半洋袴から餘つた脛を丸出しにして、黒足袋に俎下駄を引つ掛けてゐた。彼は此通りと雨外套の下を僕等に示した上、日本へ歸ると服装が自由で貴女の前でも氣兼ねがなくなつて好いと云つてゐた。

一同がぞろ／＼揃つて道幅の六尺ばかりな汚苦しい漁村に這入ると、一種不快な臭ひがみんなの鼻を撲つた。高木は隠袋から白い手巾を出して短かい髭の上を掩つた。叔父は突然其所に立つて僕等を見てゐた子供に、西の者で南の方から養子に來たものの宅は何處だと奇體な質問を掛けた。子供は知らないと言つた。僕は千代子に何でそんな妙な聞き方をするのかと尋ねた。昨夕聞き合せに人を遣つた家の主人が云ふには、名前は忘れたから是々の男と云つて探して歩けば分ると教へたからだと言つた千代子が話して聞かした時、僕は此吞氣な教へ方と、同じく吞氣な聞き方を、

如何にも餘裕なくこせつゝいてゐる自分と比べて見て、妙に羨ましく思つた。

「それで分るんでせうか」と高木が不思議な顔をした。

「分つたら餘つ程奇體だわね」と千代子が笑つた。

「何大丈夫分るよ」と叔父が受合つた。

吾一は面白半分人の顔さへ見れば、西のもので南の方から養子に來たものの宅は何處だと聞いては、其度にみんなを笑はした。一番仕舞に、編笠を被つて白の手甲と脚絆を着けた月琴彈きの若い女の休んでゐる汚い茶店の婆さんに同じ間を掛けたら、婆さんは案外にもすぐ其所だと容易く教へて呉れたので、みんなが又手を拍つて笑つた。それは往來から山手の方へ三級ばかりに仕切られた石段を登り切つた小高い所にある小さい藁葺の家であつた。

二二二

此細い石段を思ひ／＼の服装をした六人が前後してぞろ／＼登る姿は、傍で見えてゐたら定めし變なものだつたらうと思ふ。其上六人のうちで、是から何をするか明瞭した考へを有つてゐたものは誰もないのだから甚だ氣樂である。肝心の叔父さへ唯船に乗る事を知つてゐる丈で、後は網

だか釣りだか、又何處迄漕いで出るのか一向辨別へないらしかつた。百代子の後から足の力で擦り減らされて凹みの多くなつた石段を踏んで行く僕は斯んな無意味な行動に、己を委ねて悔いなき所を、避暑の趣きとでも云ふのかと思ひつゝ上つた。同時に此無意味な行動のうちに、意味ある劇の大切な一幕が、ある男とある女の間に暗に演ぜられつゝあるのでは無からうかと疑つた。さうして其一幕の中で、自分の務めなければならぬ役割が若し有るとすれば、穏やかな顔をした運命に、軽く翻弄される役割より外にあるまいと考へた。最後に何事も打算しないで唯無雑作に遣つて除ける叔父が、人に氣の附かないうちに、此幕を完成するとしたら、彼こそ比類のない巧妙な手際を有つた作者と云はなければならぬといふ氣を起した。僕の頭に斯ういふ影が射した時、すぐ後から跟いて上がつて來る高木が、是ぢや暑くつて堪まらない、御免蒙つて雨防衣を脱がうと云ひ出した。

家は下から見たよりも猶小さくて汚かつた。戸口に杓子が一つ打ち附けてあつて、夫に百日風邪吉野平吉一家一同と書いてあるので、主人の名が漸く分つた。夫を見附け出して、みんなに聞こえるやうに讀んだのは、目敏い吾一の手柄であつた。中を覗くと天井も壁も悉く黒く光つてゐた。人間としては婆さんが一人居たがりである。其婆さんが、今日は天氣が好くないので、大方

御出でぢやあるまいと云つて早く海へ出ましたから、今濱へ下りて呼んできませうと斷りを述べた。船へ乗つて出たのかねと叔父が聞くと、婆さんは多分あの船だらうと答へて、手で海の上を指した。露はまだ晴れなかつたけれども、先刻よりは空が大分明るくなつたので、沖の方は比較的判切見える中に、指された船は遠くの向うに小さく横たはつてゐた。

「あれぢや大變だ」

高木は携へて來た双眼鏡を覗きながら斯う云つた。

「随分呑氣ね、迎ひに行くつて、何うしてあんな所へ迎ひに行けるんでせう」と千代子は笑ひながら、高木の手から双眼鏡を受取つた。

婆さんは何直きですと答へて、草履を穿いた儘、石段を馳け下りて行つた。叔父は田舎者は氣樂だなど笑つてゐた。吾一は婆さんの後を追ひ掛けた。百代子はぼんやりして汚い縁へ腰を卸ろした。僕は庭を見廻した。庭といふ名の勿體なく聞こえる縁先は五坪にも足りなかつた。隅に無花果が一本あつて、腥い空氣の中に、青い葉を少し許り茂らしてゐた。枝にはまだ熟しない實が云ひ譯程結つて、其一本の股の所に、空の蟲籠が懸かつてゐた。其下には瘠せた鶏が二三羽無暗に爪を立てた地面の中を餓えた嘴で啄いてゐた。僕は其傍に伏せてある鐵網の鳥籠らしいものを

眺めて、その恰好が丁度佛手柑の如く不規則に歪んでゐるのに一種滑稽な思ひをした。すると叔父が突然、何分臭いねと云ひ出した。百代子は、あたし最う御魚なんか何うでも好いから、早く歸りたくなつたわと心細さうな聲を出した。此時迄双眼鏡で海の方を見ながら、断えず千代子と話してゐた高木はすぐ後を振り返つた。

「何をしてゐるだらう。一寸行つて様子を見て來ませう」

彼はさう云ひながら、手に持つた雨外套と双眼鏡を置くために後の縁を顧た。傍に立つた千代子は高木の動かない前に手を出した。

「此方へ御出しなさい。持つてるから」

さうして高木から二つの品を受け取つた時、彼女は改めて又彼の半袖姿を見て笑ひながら、「とうとう蠻般になつたのね」と評した。高木は唯苦笑した丈で、すぐ濱の方へ下りて行つた。僕は左も運動家らしく發達した彼の肩の肉が、急いで石段を下りる爲に手を振る毎に動く様を後から無言のまゝ注意して眺めた。

二十三

船に乗るためにみんなが揃つて濱に下り立つたのは夫から約一時間の後であつた。濱には何の祭の前か過ぎか、深く砂の中に埋められた高い幟の棒が二本僕の眼を惹いた。吾一は何處からか磯へ打ち上げた枯枝を拾つて來て、廣い砂の上に大きな字と大きな顔をいくつも並べた。

「さあ御乗り」と坊主頭の船頭が云つたので、六人は順序なくごたごたに船縁から這ひ上がった。偶然の結果千代子と僕は後のものに押されて、仕切りの附いた舳の方に二人膝を突き合はせて坐つた。叔父は一番先に、胴の間といふのか、真中の廣い所に、家長らしく胡坐をかいして坐つた。さうして高木を其日の客として取り扱ふ積りか、さあ何うぞと案内したので、彼は否應なしに叔父の傍に座を占めた。百代子と吾一は彼等の次の間と云つた様な仕切りの中に船頭と一所に這入つた。

「何うです此方が空いてますから入らつしやいませんか」と高木はすぐ後の百代子を顧た。百代子は難有うといつたさきり席を移さなかつた。僕は始めから千代子と一つ薄縁の上に坐るのを快く思はなかつた。僕の高木に對して嫉妬を起した事は既に明らかに明白して置いた。其嫉妬は程度に於て昨日も今日も同じだつたかも知れないが、それと共に競争心は未だ嘗て微塵も僕の胸に萌さなかつたのである。僕も男だから是から先いつ何んな女を的に劇烈な戀に陥らないとも限ら

ない。然し僕は斷言する。若し其戀と同じ度合の劇烈な競争を敢てしなければ思ふ人が手に入らないなら、僕は何んな苦痛と犠牲を忍んでも、超然と手を懐にして戀人を見棄てて仕舞ふ積りでゐる。男らしくないとも、勇氣に乏しいとも、意志が薄弱だとも、他から評したら何うにでも評されるだらう。けれども夫程切ない競争をしなれば吾有に出来にくい程、何方へ動いても好い女なら、夫程切ない競争に價しない女だとしか僕には認められないのである。僕には自分に靡かない女を無理に抱く喜びよりは、相手の戀を自由の野に放つて遣つた時の男らしい氣分で、わが失戀の瘡痕を淋しく見詰めてゐる方が、何の位良心に對して満足が多いか分らないのである。僕は千代子に斯う云つた。

「千代ちやん行つちや何うだ。彼方の方が廣くつて樂な様だから」

「何故、此所に居ちや邪魔なの」

千代子はさう云つた儘動かうともしなかつた。僕には高木がゐるから彼方へ行けといふのだといふ様な説明は、露骨と聞こえるにしろ、厭味と受取られるにしろ、全く口にする勇氣は出なかつた。たゞ彼女から斯う云はれた僕の胸に、一種の嬉しさが閃めいたのは、口と腹と何う裏表になつてゐるかを曝露する好い證據で、自分で自分の薄弱な性情を自覺しない僕には痛い打撃であつた。

つた。

昨日會つた時よりは氣の所爲か少し控へ目になつたやうに見える高木は、千代子と僕の間に起つた此問答を聞きながら知らぬ振をしてゐた。船が磯を離れたとき、彼は「好い案排に空模様が直つて來ました。是ぢや日がかん／＼照るより却て結構です。船遊びには持つて來いといふ御天氣で」といふ様な事を叔父と話し合つたりした。叔父は突然大きな聲を出して、「船頭、一體何を捕るんだ」と聞いた。叔父も其他のものも、此時迄何を捕るんだか一向知らずにゐたのである。坊主頭の船頭は、粗末な言葉で、蛸を捕るんだと答へた。此奇抜な返事には千代子も百代子も驚くよりも可笑しかつたと見えて、忽ち聲を出して笑つた。

「蛸は何處にゐるんだ」と叔父が又聞いた。

「此所いらにゐるんだ」と船頭は又答へた。

さうして湯屋の留桶を少し深くした様な小判形の桶の底に、硝子を張つたものを水に伏せて、其中に顔を突込む様に押し込みながら、海の底を覗き出した。船頭は此妙な道具を鏡と稱へて、二つ三つ餘分に持ち合はせたのを、すぐ僕等に貸して呉れた。第一にそれを利用したのは船頭の傍に座を取つた吾一と百代子であつた。

鏡が夫から夫へと順々に回つた時、叔父は是や鮮やかだね、何でも見ると非道く感心してゐた。叔父は人間社會の事に大抵通じてゐる所爲か、萬に高を括る癖に、斯ういふ自然界の現象に襲はれるとぢき驚く性質なのである。自分は千代子から渡された鏡を受け取つて、最後に一枚の硝子越しに海の底を眺めたが、かねて想像したと少しも異なる所のない極めて平凡な海の底が眼に入つた丈である。其所には小さい岩が多少の凸凹を描いて一面に連なる間に、蒼黒い藻草が限りなく蔓延つてゐた。其藻草が恰も生温い風に煽られる様に、波のうねりで靜かに又永久に細長い莖を前後に搖かした。

「市さん蛸が見えて」

「見えない」

僕は顔を上げた。千代子は又首を突込んだ。彼女の被つてゐたへな／＼の麥藁帽子の縁が水に浸かつて、船頭に操られる船の勢ひに逆らふ度に、可憐な波をちよ／＼起した。僕は其後に見える彼女の黒い髪と白い頸筋を、其顔よりも美しく眺めてゐた。

「千代ちゃんには、見附かつたかい」

「駄目よ。蛸なんか何處にも泳いでゐやしないわ」

「餘つ程慣れないと中々見附ける譯に行かないんださうです」

是は高木が千代子の爲に説明して呉れた言葉であつた。彼女は兩手で桶を抑へたまゝ、船縁から乗り出した身體を高木の方へ捻ぢ曲げて、「道理で見えないのね」といつたが、其儘水に戯れる様に、兩手で抑へた桶をぶく／＼動かしてゐた。百代子が向うの方から御姉さんと呼んだ。吾一は居所も分らない蛸を無暗に突き廻した。突くには二間許りの細長い女竹の先に一種の穂先を着けた變なものをを用ひるのである。船頭は桶を齒で銜へて、片手に棹を使ひながら、船の動いて行くうちに、蛸の居所を探し中てるや否や、その長い竹で巧みにぐにや／＼した怪物を突き刺した。蛸は船頭一人の手で、何疋も船の中に入つたが、何れも同じ位な大きさで、是はと驚く程のものではなかつた。始めのうちこそ皆珍らしがつて、捕れるたびに騒いで見たが、仕舞には流石元氣な叔父も少し飽きて來たと見えて、「斯う蛸ばかり捕つても仕方がないね」と云ひ出した。高木は煙草を吹かしながら、船底にかたまつた獲物を眺め始めた。

「千代ちゃん、蛸の泳いでゐる所を見た事がありますか。一寸來て御覽なさい、餘つ程妙です」

高木は斯う云つて千代子を招いたが、傍に坐つてゐる僕の顔を見た時、「須永さん何うです、蛸が泳いでゐますよ」と附け加へた。僕は「左うですか。面白いでせう」と答へたなり直ぐ席を立たうともしなかつた。千代子はどれと云ひながら高木の傍へ行つて新しい座を占めた。僕は故の所から彼女にまだ泳いでゐるかと思つた。

「え、面白いわ、早く来て御覧なさい」

蛸は八本の足を真直に揃へて、細長い身體を一気にすつくと區切りつゝ、水の中を一直線に船板に突き當たる迄進んで行くのであつた。中には鳥賊の様に黒い墨を吐くのも交つてゐた。僕は中腰になつて一寸其光景を覗いたなり故の席に戻つたが、千代子は夫限り高木の傍を離れなかつた。

叔父は船頭に向つて蛸はもう澤山だと云つた。船頭は歸るのかと聞いた。向うの方に大きな竹籃の様なものが二つ三つ浮いてゐたので、蛸ばかりで淋しいと思つた叔父は、船を其一つの側へ漕ぎ寄せさせた。申し合はせた様に、船中立ち上がつて籃の内を覗くと、七八寸もあらうと云ふ魚が、縦横に狭い水の中を馳け廻つて居た。その或ものは水の色を離れない蒼い光を鱗に帯びて、

自分の勢ひで前後左右に作る波を肉の裏に透す様に輝いた。

「一つ掬つて御覧なさい」

高木は大きな掬網の柄を千代子に握らした。千代子は面白半分それを受取つて水の中で動かさうとしたが、動きさうにもしないので、高木は己の手を添へて二人一所に籃の中を覺束なく攪き廻した。然し魚は掬へる所ではなかつたので、千代子は直ぐそれを船頭に返した。船頭は同じ掬網で叔父の命ずる儘に何疋でも水から上へ擇り出した。僕等は奇怪な蛸の單調を破るべく、鰯魚、鱸、黒鯛の變化を喜んで又岸に上つた。

二十五

僕は其晩一人東京へ歸つた。母はみんなに引き留められて、歸るときには吾一か誰か送つて行くといふ條件の下に、猶二三日鎌倉に留まる事を肯じた。僕は何故母が彼等の勧める儘に、人を好く落ち附いてゐるのだらうと、鋭く磨がれた自分の神經から推して、悠長過ぎる彼女を齒痒く思つた。

高木には夫から以後つひど顔を合はせた事がなかつた。千代子と僕に高木を加へて三つ巴を描

いた一種の關係が、夫限り發展しないで、其中の劣敗者に當たる僕が、恰も運命の先途を豫知した如き態度で、中途から渦卷の外に逃れたのは、此話を聞くものに取つて、定めし不本意であらう。僕自身も幾分か火の手はまだ收まらないうちに、取り急いで纏を撤した様な心持がする。と云ふと、僕に始めからある目論見があつて、わざ／＼鎌倉へ出掛けたとも取れるが、嫉妬心だけあつて競争心を有たない僕にも相應の己惚は陰氣な暗い胸の何處かで時々ちら／＼陽炎つたのである。僕は自分の矛盾をよく研究した。而して千代子に對する己惚を飽く迄積極的に利用し切らせない爲に、他の思想やら感情やらが、入れ代り立ち替り雜然として吾心を奪ひに来る煩はしさに悩んだのである。

彼女は時によると、天下に唯一人の僕を愛してゐる様に見えた。僕は夫でも進む譯に行かないのである。然し未來に眼を塞いで、思ひ切つた態度に出ようかと思案してゐるうちに、彼女は忽ち僕の手から逃れて、全くの他人と違はない顔になつて仕舞ふのが常であつた。僕が鎌倉で暮らした二日の間に、斯ういふ潮の満干は既に二三度あつた。或時は自分の意志で此變化を支配しつつ、わざと近寄つたり、わざと遠退いたりするのでなからうかといふ微かな疑惑をさへ、僕の胸に烟らせた。それ計りではない。僕は彼女の言行を、一の意味に解釋し終つたすぐ後から、丸で

反對の意味に同じものを又解釋して、其實何方が正しいのか分らない徒らな忌々しさを感じた例も少なくはなかつた。

僕は此二日間に娶る積りのない女に釣られさうになつた。さうして高木といふ男が、苟も眼の前に出没する限りは、厭でも仕舞迄釣られて行きさうな心持がした。僕は高木に對して競争心を有たないと先に斷つたが、誤解を防ぐために、もう一度同じ言葉を繰り返したい。もし千代子と高木と僕と三人が巴になつて戀か愛か人情かの旋風の中に狂ふならば、其時僕を動かす力は高木に勝たうといふ競争心でない事を僕は斷言する。夫は高い塔の上から下を見た時、恐ろしくなると共に、飛び下りなければ居られない神經作用と同じ物だと斷言する。結果が高木に對して勝つか負けるかに歸着する上部から云へば、競争と見えるかも知れないが、動力は全く獨立した一種の働きである。しかも其動力は高木が居さへしなければ決して僕を襲つて來ないのである。僕は其二日間に、此怪しい力の閃きを物凄く感じた。さうして強い決心と共にすぐ鎌倉を去つた。

僕は強い刺激に充ちた小説を讀むに堪へない程弱い男である。強い刺激に充ちた小説を實行する事は猶更出來ない男である。僕は自分の氣分が小説になり掛けた刹那に驚いて、東京へ引き返したのである。だから汽車の中の僕は、半分は優者で半分は劣者であつた。比較的乗客の少ない

二九六
中等列車のうちで、僕は自分と書き出して自分と裂き棄てた様な此小説の續きを色々に想像した。其所には海があり、月があり、磯があつた。若い男の影と若い女の影があつた。始めは男が激して女が泣いた。後では女が激して男が宥めた。終には二人手を引き合つて音のしない砂の上を歩いた。或は額があり、疊があり、涼しい風が吹いた。二人の若い男が其所で意味のない口論をした。それが段々熱い血を頬に呼び寄せて、終には二人共自分の人格に拘る様な言葉使ひをしなれば濟まなくなつた。果ては立ち上がつて拳を揮ひ合つた。或は……芝居に似た光景は幾幕となく眼の前に描かれた。僕は其何れをも嘗め試みる機会を失つて却て自分の爲に喜んだ。人は僕を老人見た様だと云つて嘲るだらう。もし詩に訴へてのみ世の中を渡らないのが老人なら、僕は嘲られても満足である。けれども若し詩に溺れて乾びたのが老人なら、僕は此品評に甘んじたくない。僕は始終詩を求めて藻掻いてゐるのである。

二十六

僕は東京へ歸つてからの氣分を想像して、或は刺激を眼の前に控へた鎌倉にゐるよりも却て焦躁つきはしまいかと心配した。さうして相手もなく一人焦躁つく事の甚しい苦痛を徒らに胸の中

に描いて見た。偶然にも結果は他の一方に外れた。僕は僕の希望した通り、平生に近い落附きと冷静と無頓着とを、比較的容易に、淋しいわが二階の上に齎し歸る事が出来た。僕は新しい匂ひのする蚊帳を座敷一杯に釣つて、軒に鳴る風鈴の音を楽しんで寐た。宵には町へ出て草花の鉢を抱へながら格子を開ける事もあつた。母が居ないので、凡ての世話は作といふ小間使がした。鎌倉から歸つて、始めてわが家の膳に向つた時、給仕の爲に黒い丸盆を膝の上に置いて、僕の前に畏まつた作の姿を見た僕は、今更の様に彼女と鎌倉にゐる姉妹との相違を感じた。作は固より好い器量の女でも何でもなかつた。けれども僕の前に出て畏まる事より外に何も知つてゐない彼女の姿が、僕には如何に慎しやかに如何に控へ目に、如何に女として憐れ深く見えたらう。彼女は戀の何物であるかを考へるさへ、自分の身分では既に生意氣過ぎると思ひ定めた様子で、大人しく坐つてゐたのである。僕は珍らしく彼女に優しい言葉を掛けた。さうして彼女に年は幾何だと聞いた。彼女は十九だと答へた。僕は又突然嫁に行きたくはないかと尋ねた。彼女は赧い顔をしてお下を向いたなり、露骨な問を掛けた僕を氣の毒がらせた。僕と作とは夫迄殆ど用の口より外に利いた事がなかつたのである。僕は鎌倉から新しい記憶を持つて歸つた反動として、其時始めて、自分の家に使つてゐる下婢の女らしい所に氣が附いた。愛とは固より彼女と僕の間に云ひ得べき

言葉でない。僕はたゞ彼女の身の周囲から出る落ち附いた、氣安い、大人しやかな空気を愛したのである。

僕が作の爲に安慰を得たと云つては、自分ながら可笑しく聞こえる。けれども今考へて見ても、夫より外の原因は全く考へ附かない様だから、矢つ張り作が——作がといふより、其時の作が代表して僕に見せて呉れた女性のあつた方面の性質が、想像の刺激にすら焦躁立ちたがつてゐた僕の頭を静めて呉れたのだらうと思ふ。白状すれば鎌倉の景色は折々眼に浮かんた。其景色のうちには無論人間が活動してゐた。たゞ夫が僕の遠くにゐる、僕とは到底利害を一にし得ない人間の活動らしく見えたのは幸福であつた。

僕は二階に上つて書架の整理を始めた。綺麗好きな母が始終氣を附けて掃除を怠らなかつたに拘らず、一々書物を並べ直すとなると、思はぬ埃の色を、目の届かない陰に見附けるので、残らず揃へる迄には、中々手間取つた。僕は暑中に似合はしい閑業として、成る可く時間の掛かる様に、氣が向けば手にした本を何時迄も読み耽つて見ようといふ氣樂な方針で蝸牛の如く進行した。作は時ならない拂塵の音を聞き附けて、梯子段から銀杏返しの頭を出した。僕は彼女に書架の一部を雑巾で拭いて貰つた。然し何時迄掛かるか分らない仕事の手傳を、濟むまでさせるのも

氣の毒だと思つて、直ぐ階下へ下げた。僕は一時間程書物を伏せたり立てたりして少し草臥れたから煙草を吹かして休んでゐると、作が又梯子段から顔を出した。さうして、私でよろしければ何ぞ致しませうかと尋ねた。僕は作に何かさせて遣りたかつた。不幸にして西洋文字の讀めない彼女には手の出せない書物の整理なので、僕は氣の毒だけでも、何好いよと斷つて又下へ追ひ遣つた。

作の事をさう一々云ふ必要もないが、つい前からの關係で、彼女の其時の行動を覚えて居たから話したのである。僕は一本の巻煙草を呑み切つた後で又整理に掛かつた。今度は作の爲にわれ一人の世界を妨げられる虞れなしに、書架の二段目を一氣に片附けた。其時僕は久しく友達に借りて、つい返すのを忘れてゐた妙な書物を、偶然棚の後から發見した。それは寧ろ薄い小形の本だつたので、つい外のものに向う側へ落ちたなり埃だらけになつて、今日迄僕の眼を掠めて居たのである。

二十七

僕に此本を貸して呉れたものは或文學好きの友達であつた。僕はかつて此男と小説の話をし

て、思慮の勝つたものは、萬事に考へ込む丈で、一向華やかな行動を仕切る勇氣がないから、小説に書いても詰らないだらうと云つた。僕の平生からあまり小説を愛讀しないのは、僕に小説中の人物になる資格が乏しいので、資格が乏しいのは、考へ／＼して愚圖つく所爲だらうと兼々思つてゐたから、僕はつい斯ういふ質問が掛けて見たくなつたのである。其時彼は机上にあつた此本を指して、此所に書いてある主人公は、非常に目覺ましい思慮と、恐ろしく凄じい思ひ切つた行動を具へてゐると告げた。僕は一體何んな事が書いてあるのかと聞いた。彼はまあ讀んで見ると云つて、其本を取つて僕に渡した。標題にはゲダンケといふ獨逸字が書いてあつた。彼は露西亞物の翻譯だと教へて呉れた。僕は薄い書物を手にしながら、重ねてその梗概を彼に尋ねた。彼は梗概などは何うでも好いと答へた。さうして中に書いてある事が嫉妬なのだか、復讐なのだか、深刻な悪戯なのだか、醉興な計略なのだか、眞面目な所作なのだか、氣狂の推理なのだか、常人の打算なのだか、殆ど分らないが、何しろ華々しい行動と同じく華々しい思慮が伴なつてゐるから、兎も角も讀んで見ると云つた。僕は書物を借りて歸つた。然し讀む氣はしなかつた。僕は讀み耽らない癖に、小説家といふものを一切馬鹿にしてゐた上に、友達のいふ様な事には些とも心を動かすべき興味を有たなかつたからである。

此出來事を悉皆忘れてゐた僕は、何の氣も附かずに其ゲダンケを今棚の後から引き出して厚い塵を拂つた。さうして見覺えのある例の獨逸字の標題に眼を附けると共に、かの文學好きの友達と彼の其時の言葉とを思ひ出した。すると突然何處から起つたか分らない好奇心に驅られて、直ぐ其一頁を開いて初めから讀み始めた。中には恐るべき話を書いてあつた。

或女に意のあつた或男が、其婦人から相手にされないのでのみか、却てわが知り合ひの人の所へ嫁入られたのを根に、新婚の夫を殺さうと企てた。但し唯殺すのではない。女房が見てゐる前で殺さなければ面白くない。しかも其見てゐる女房が彼を下手人と知つてゐながら、何時迄も指を衝へて、彼を見てゐる丈で、夫より外に何うにも手の附けやうのないといふ複雑な殺し方をしなければ氣が濟まない。彼は其手段として一種の方法を案出した。ある晩餐の席へ招待された好機を利用して、彼は急に劇しい發作に襲はれた振をし始めた。傍から見ると丸で狂人としか思へない舉動を其場で敢てした彼は、同席の一人残らずから、全くの狂人と信じられたのを見済まして、心の内で圖に當たつた策略を祝賀した。彼は人目に觸れ易い社交場裡で、同じ所作を猶二三度繰り返した後、發作の爲に精神に狂ひの出る危険な人といふ評判を一般に博し得た。彼は此手數の懸かつた準備の上に、手の附けやうのない殺人罪を築き上げる積りでゐたのである。屢起る彼

の發作が、華やかな交際の色を暗く損なひ出してから、今迄懇意に往來してゐた誰彼の門戸が、彼に對して急に固く鎖される様になつた。けれども夫は彼の苦にする所ではなかつた。彼は猶自由に入りの出来る一軒の家を持つてゐた。それが取りも直さず彼の將に死の國に蹴落とさうとしつゝある友と其細君の家だつたのである。彼は或日何氣ない顔をして友の住居を敲いた。其所で世間話に時を移すと見せて、暗に目の前に飛び掛かる機を窺つた。彼は机の上にあつた重い文鎖を取つて、突然是で人が殺せるだらうかと尋ねた。友は固より彼の問を眞に受けなかつた。彼は構はず出来る丈の力を文鎖に込めて、細君の見てゐる前で、最愛の夫を打ち殺した。さうして狂人の名の下に、瘋癲院に送られた。彼は驚くべき思慮と分別と推理の力を以て、以上の顛末を基礎に、自分の決して狂人でない譯をひたすら辯解してゐる。かと思ふと、其辯解を又疑つてゐる。のみならず、其疑ひを又辯解しようとしてゐる。彼は必竟正氣なのだらうか、狂人なのだらうか、——僕は書物を手にした儘慄然として恐れた。

二十八

僕の頭は僕の胸を抑へる爲に出來てゐた。行動の結果から見て、甚しい悔を遣さない過去を顧

ると、是が人間の常態かとも思ふ。けれども胸が熱しかける度に、嚴肅な頭の威力を無理に加へられるのは、普通誰でも經驗する通り、甚しい苦痛である。僕は意地張りといふ點に於て、何方かといふと寧ろ陰性の痛癢持ちだから、發作に心を襲はれた人が急に理性の爲に喰ひ留められて、劇しい自動車の速力を即時に殺す様な苦痛は滅多に嘗めた事がない。夫ですら或場合には命の心棒を無理に曲げられるとでも云はなければ形容しやうのない活力の燃焼を内に感じた。二つの争ひが起る度に、常に頭の命令に屈従して來た僕は、或時は僕の頭が強いから屈従させ得るのだと思ひ、或時は僕の胸が弱いから屈従するのだとも思つたが、何うしても此争ひは生活の爲の争ひでありながら、人知れず、わが命を削る争ひだといふ畏怖の念から解脱する事が出來なかつた。夫だから僕はゲダンケの主人公を見て驚いたのである。親友の命を蟲の息の様に軽く見る彼は、理と情との間に何等の矛盾をも扞格をも認めなかつた。彼の有する凡ての知力、悉く復讐の燃料となつて、残忍な兇行を手際よく仕遂げる方便に供せられながら、毫も悔ゆる事を知らなかつた。彼は周密なる思慮を率ゐて、滿腔の毒血を相手の頭から浴びせ掛け得る偉大なる俳優であつた。若しくは尋常以上の頭腦と情熱とを兼ねた狂人であつた。僕は平生の自分と比較して、斯う顧慮なく一心に振舞へるゲダンケの主人公が大いに羨ましかつた。同時に汗の滴る程恐ろしかつ

た。出来たら嘸痛快だらうと思つた。出来た後は定めし堪へがたい良心の拷問に逢ふだらうと思つた。

けれども若し僕の高木に對する嫉妬がある不可思議の徑路を取つて、向後今の數十倍に烈敷く身を焼くなら何うだらうと僕は考へた。然し僕は其時の自分を自分で想像する事が出来なかつた。始めは人間の元來からの作りが違ふんだから、到底斯んな真似は爲得まいといふ見地から、直ぐ此問題を棄却しようとした。次には、僕でも同じ程度の復讐が充分遣つて除けられるに違ひないといふ氣がし出した。最後には、僕の様には、平生は頭と胸の争ひに惱んで愚圖ついでゐるものにして始めて斯んな猛烈な兇行を、冷靜に打算的に且組織的に、逞しうするのだと思ひ出した。僕は最後に何故斯う思つたのか自分にも分らない。たゞ斯う思つた時急に變な心持に襲はれた。其心持は純然たる恐怖でも不安でも不快でもなく、夫等よりは遙かに複雑なものに見えた。が、纏まつて心に現はれた状態から云へば、丁度大人しい人が酒の爲に大膽になつて、是なら何でも遣れといふ満足を感じつゝ、同時に酔ひに打ち勝たれた自分は、品性の上に於て平生の自分より遙かに墮落したのだと氣が附いて、さうして墮落は酒の影響だから何處へ何う避けても人間として到底逃れる事は出来ないのだと沈痛に諦めを附けたと同じ様な變な心持であつた。僕は此變な心

持と共に、千代子の見てゐる前で、高木の腦天に重い文鎮を骨の底迄打ち込んだ夢を、大きな眼を開きながら見て、驚いて立ち上がった。

下へ降りるや否や、いきなり風呂場へ行つて、水をざあ／＼頭へ掛けた。茶の間の時計を見る時、もう午過ぎなので、それを好い機會に、其所へ坐つて飯を片附ける事にした。給仕には例の通り作が出た。僕は二口、三口無言で飯の塊りを頬張つたが、突然彼女に、おい作僕の顔色はどうかあるかいと聞いた。作は吃驚した眼を大きくして、いゝえと答へた。夫れ問答が切れると、今度は作の方が何うか遊ばしましたかと尋ねた。

「いゝや、大して何うもしない」

「急に御暑う御座いますから」

僕は黙つて二杯の飯を食ひ終つた。茶を注がして飲み掛けた時、僕は又突然作に、鎌倉杯へ行つて混雑するより宅にゐる方が靜かで好いねと云つた。作は、でも彼の方が御涼しう御座いますと云つた。僕はいや却て東京より暑い位だ、あんな所にゐると氣ばかり焦燥々々して不可ないと説明して遣つた。作は御隠居さまはまだ當分彼地に御出でで御座いますかと尋ねた。僕はもう歸るだらうと答へた。

僕は僕の前まへに坐すわつてゐる作さくの姿すがたを見て、一筆ひとしづがきの朝あさ貌がほの様やうな氣きがした。只ただ貴たつとい名家めいかの手てにならぬのが遺憾ひがであるが、心こころの中なかはさう云いふ種類しゆるゐの畫ゑと同じく簡略かんりやくに出來上できあがつてゐるとしか僕ぼくには受取うけとれなかつた。作さくの人柄ひとがらを畫ゑに喩たとへて何なんの爲ためになると聞きかれるかも知しれない。深ふかい意味いみもなからうが、實じつは彼女の給仕きよじを受けて飯めしを食くふ間に、今いましがたゲダンケを讀よんだ自分じぶんと、今いま黒塗くろりの盆ぼんを持つて畏かしこまつてゐる彼女かのぢよとを比較ひかくして、自分じぶんの腹はらは何故なぜ斯かう執濃しつこい油繪あぶらゑの様やうに複雑ふくざつなのだらうと呆あきれたからである。白狀はくじやうすると僕は高等教育かうとうけいよくを受けた證據しやうことして、今日こんにち迄まで自分の頭あたまが他ひとより複雑ふくざつに働はたらくのを自慢じまんにしてゐた。所ところが何時いつか其働そのはたらきに疲つかれてゐた。何なんの因果いんぐわで斯かう迄まで事を細こまかに刻きざまなければ生きて行ゆかれないのかと考かんがへて情なさけなかつた。僕は茶碗ちやわんを膳ぜんの上に置おきながら、作さくの顔かほを見て尊たつとい感かんじを起おこした。

「作御前さくごまへでも色々いろくも物を考かんがへる事ことがあるかね」

「私わたくしなんぞ別べつに何なにも考かんがへる程ほどの事ことが御座ございませんから」

「考かんがへないかね。それが好いいね。考かんがへる事ことがないのが一番いちばんだ」

「あつても智慧ちゑが御座ございませんから、筋道すぢみちが立たちません。全く駄目だめで御座ございます」

「仕合せだ」

僕は思おもはず斯かう云いつて作さくを驚おどろかした。作さくは突然とつぜん僕ぼくから冷ひややかされたとても思おもつたらう。氣きの毒どくな事ことをした。

其夕暮そのゆふぐれに思おもひ掛かけない母ははが出だし抜ぬけに鎌倉かまくらから歸かへつて來きた。僕は其時そのとき日の陰かげり掛かけた二階にかいの縁えんに籐椅子とういすを持ち出だして、作さくが跣足はだしで庭先にはさきへ水みづを打うつ音を聞きいてゐた。下したへ降りて玄關げんくわんへ出でた時とき、僕は母ははを送おくつて來きるべき筈はずの吾わが一の代かりに、千代子ちよこが彼女かのぢよの後あとに跟くつて沓脱くつゆきから上あがつたのを見みて非常ひじょうに驚おどろいた。僕は籐椅子とういすの上うへで千代子ちよこの事ことを全まったく考かんがへずに居ゐたのである。考かんがへても彼女かのぢよと高木たかとを離はなす事ことは出來なかつたのである。さうして二人ふたりは當分たうぶん鎌倉かまくらの舞臺ぶたいを動うごき得えないものと信しんじてゐたのである。僕は日に燒やけて心持こころもち色の黒くろくなつたと思おもはれる母ははと顔かほを見合みあはして挨拶あいさつを取り替かはす前に、先まづ千代子ちよこに向むかつて何なにうして來きたのだと聞ききたかつた。實際じつさい僕は其通そのとほりの言葉ことばを第一だいいちに用もちひたのである。

「叔母おほはさんを送おくつて來きたのよ。何故なぜ。驚おどろいて」

「そりや難有ありがたう」と僕ぼくは答こたへた。僕ぼくの千代子ちよこに對たいする感情かんじゆうは鎌倉かまくらへ行く前まへと、行いつてからとで

大分違つてゐた。行つてからと歸つて来てからとでも亦大分違つてゐた。高木と一所に束ねられた彼女に對するのと、斯う一人に切り離された彼女に對するのとでも亦大分違つてゐた。彼女は年を取つた母を吾一に託するのが不安心だつたから、自分で隨つて來たのだと云つて、作が足を洗つてゐる間に、母の單衣を箆笥から出したたり、夫を旅行着と着換へさせたり抔して、元の千代子の通り豆やかに振舞つた。僕は母にあれから何か面白い事がありましたかと尋ねた。母は満足らしい顔をしながら、別には是といふ珍らしい事も無かつたと答へたが、「でもね、久し振に好い氣保養をしました。御蔭で」と云つた。僕にはそれが傍にゐる千代子に對しての禮の言葉と聞こえた。僕は千代子に今日是从是から又鎌倉へ歸るのかと尋ねた。

「泊つて行くわ」

「何處へ」

「さうね。内幸町へ行つても好いけど、あんまり廣過ぎて淋しいから。——久し振に此所へ泊らうかしら、ねえ叔母さん」

僕には千代子が始めから僕の家に寝る積りで出て來たやうに見えた。自白すれば僕は其所へ坐つて十分と經たないうちに、又眼の前にゐる彼女の言語動作を一種の立場から觀察したり、評價

したり、解釋したりしなればならない様になつたのである。僕はそこに氣が附いた時、非常な不愉快を感じた。又さういふ努力には自分の神經が疲れ切つてゐる事も感じた。僕は自分で自分に逆らつて餘儀なく斯う心を働かすのか。或は千代子が厭がる僕を無理に強ひて動く様にするのか。何方にしても僕は腹立たしかつた。

「千代ちゃんが來ないでも吾一さんで澤山だのに」

「だつて妾責任があるぢやありませんか。叔母さんを招待したのは妾でせう」

三十

「ぢや僕も招待を受けたんだから、送つて來て貰へば好かつた」

「だから他の云ふ事を聞いて、もつと入らつしやれば好いのに」

「いゝえ彼の時にさ。僕の歸つた時にさ」

「左様すると丸で看護婦見た様ね。好いわ看護婦でも、附いて來て上げるわ。何故さう云はなかつたの」

「云つても斷られさうだつたから」

「妾こそ断られさうだつたわ、ねえ叔母さん。偶に招待に應じて来て置きながら、厭に六づかしい顔ばかりしてゐるんですもの。本當に貴方は少し病氣よ」

「だから千代子に附いて来て貰ひたかつたのだらう」と母が笑ひながら云つた。

僕は母の歸るついで一時間前迄千代子の來る事を豫想し得なかつた。夫は今改めて繰り返す必要もないが、それと共に僕は母が高木に就いて齎す報道を殆ど確實な未來として豫期してゐた。穩やかな母の顔が不安と失望で曇る時の氣の毒さも豫想してゐた。僕は今此豫期と全く反對の結果を眼の前に見た。彼等は二人とも常に變らない親しげな叔母姪であつた。彼等の各自は各自に特有な温か味と清々しさを、何時もの通り互の上に、又僕の上に心持よく加へた。

其晩は散歩に出る時間を儉約して、女二人と共に二階に上がつて涼みながら話しをした。僕は母の命ずる儘軒端に七草を描いた岐阜提灯を懸けて、其中に細い蠟燭を點けた。熱いから電燈を消さうと發議した千代子は、遠慮なく疊の上を暗くした。風のない月が高く上つた。柱に凭れてゐた母が鎌倉を思ひ出すと云つた。電車の音のする所で月を看るのは何だか可笑しい氣がすると、此間から海邊に馴染んだ千代子が評した。僕は先刻の藤椅子の上に腰を卸ろして團扇を使つてゐた。作が下から二度許り上がつて來た。一度は煙草盆の火を入れ更へて、僕の足の下に置いて行

つた。二返目には近所から取り寄せた氷菓子を盆に載せて持つて來た。僕は其度毎階級制度の嚴重な封建の代に生れた様に、卑しい召使の位置を生涯の分と心得てゐる此作と、何んな人の前へ出て貴女として振舞つて通るべき氣位を具へた千代子とを比較しない譯に行かなかつた。千代子は作が出て來ても、作でない外の女が出來たと同じ様に、なんにも氣に留めなかつた。作の方では一旦起つて梯子段の傍迄行つて、もう降りようとする間に實際に屹度振り返つて、千代子の後姿を見た。僕は自分が鎌倉で高木を傍に見て暮らした二日間を思ひ出して、材料がないから何も考へないと明言した作に、千代子といふハイカラな有毒の材料が與へられたのを憐れに眺めた。

「高木は何うしたらう」といふ問が僕の口元迄屢々出た。けれども單なる消息の興味以外に、何か爲にする不純なものが自分を前に押し出すので、其都度卑怯だと遠くで罵られる爲か、つい聞くのを屑しとしなくなつた。夫に千代子が歸つて母丈になりさへすれば、彼の話は遠慮なく出るのである。さうして彼女が彼を何う思つてゐるか、夫を判切胸に疊み込んで置きたかつたのである。是は嫉妬の作用なのだらうか。もし此話を聞くものが、嫉妬だといふなら、僕には少しも異存がない。今の料簡で考へて見ても、何うも外の名は附け悪いやうである。それなら僕が夫程千

代子に戀してゐたのだらうか。問題がさう推移すると、僕も返事に窮するより外に仕方がなくなる。僕は實際彼女に對して、そんなに熱烈な愛を脈搏の上に感じてゐなかつたからである。すると僕は人より二倍も三倍も嫉妬深い譯になるが、或はさうかも知れない。然しもつと適當に評したら、恐らく僕本來の我儘が原因なのだらうと思ふ。たゞ僕は一言それに附け加へて置きたい。僕から云はせると、既に鎌倉を去つた後猶高木に對しての嫉妬心が斯う燃えるなら、それは僕の性情に缺陷があつたばかりでなく、千代子自身に重い責任があつたのである。相手が千代子だから、僕の弱點が是程に濃く胸を染めたのだと僕は明言して憚らない。では千代子の何の部分が僕の人格を墮落させるのだらうか。夫は到底分らない。或は彼女の親切ぢやないかと考へてゐる。

三十一

千代子の様子は何時もの通り明けつ放しなものであつた。彼女は何んな問題が出て来ても苦もなく口を利いた。それは必竟腹の中に何も考へてゐない證據だとしか取れなかつた。彼女は鎌倉へ行つてから水泳を自習し始めて、今では春の立たない所迄行くのが楽しみだと云つた。夫を用心深い百代子が劍呑がつて、詫る様に悲しい聲を出して止めるのが面白いと云つた。其時母は半ば心

配で半ば呆れた様な顔をして、「何ですぬ女の癖にそんな輕機みな眞似をして。是からは後生だから叔母さんに免じて、あぶない悪巫山戯は止して御呉れよ」と頼んでゐた。千代子はたゞ笑ひながら、大丈夫よと答へた丈であつたが、ふと縁側の椅子に腰を掛けてゐる僕を顧て、市さんもさう云ふ御轉婆は嫌ひでせうと聞いた。僕は唯、あんまり好きぢやないと云つて、月の光の隈なく落ちる表を眺めてゐた。もし僕が自分の品格に對して尊敬を拂ふ事を忘れたなら、「然し高木さんには氣に入るんだらう」といふ言葉を其後に屹度附け加へたに違ひない。其所迄引き摺られなかつたのは、僕の體面上まだ仕合せであつた。

千代子は斯くの如く明けつ放しであつた。けれども夜が更けて、母がもう寐ようと云ひ出すまで、彼女は高木の事をとう／＼一口も話頭に上せなかつた。其所に僕は甚しい故意を認めた。白い紙の上に一點の暗い印氣が落ちた様な氣がした。鎌倉へ行くまで千代子を天下の女性のうちで、最も純粹な一人と信じてゐた僕は、鎌倉で暮らした僅か二日の間に、始めて彼女の技巧を疑ひ出したのである。其疑ひが今漸く僕の胸に根を卸るさうとした。

「何故高木の話をしないのだらう」

僕は寐ながら斯う考へて苦しんだ。同時に斯んな問題に睡眠の時間を奪はれる愚かさを自分で

よく承知してゐた。だから苦しむのが馬鹿々々しくて猶痲が起つた。僕は例の通り二階に一人寐
てゐた。母と千代子は下座敷に蒲團を並べて、一つ蚊帳の中に身を横たへた。僕はすやく寝て
ゐる千代子を自分の直ぐ下に想像して、必竟のつそつ苦しがる僕は負けてゐるのだと考へない譯
に行かなくなつた。僕は寐返りを打つ事さへ厭になつた。自分がまだ眠られないといふ弱味を階
下へ響かせるのが、勝利の報知として千代子の胸に傳はるのを恥辱と思つたからである。

僕が斯うして同じ問題を色々考へてゐるうちに、同じ問題が僕には色々に見えた。高木の名
前を口へ出さないのは、全く彼女の僕に對する好意に過ぎない。僕に氣を悪くさせまいと思ふ親
切から彼女はわざとそれ丈を遠慮したのである。斯う解釋すると鎌倉にゐた時の僕は、あれ程單
純な彼女をして、僕の前に高木の二字を公にする勇氣を失はしめた程、不合理に機嫌を悪く振舞
つたのだらう。もし左様だとすれば、自分は人の氣を悪くする爲に、人の中へ出る、不愉快な動
物である。宅へ引つ込んで交際さへ爲なければ夫で宜い。けれども若し親切を冠らない技巧が彼
女の本義なら……僕は技巧といふ二字を細かに割つて考へた。高木を媒鳥に僕を釣る積りか。
釣るのは、最後の目的もない癖に、唯僕の彼女に對する愛情を一時的に刺激して楽しむ積りか。
或は僕にある意味で高木の様になれといふ積りか。さうすれば僕を愛しても好いといふ積りか。

或は高木と僕と戦ふ所を眺めて面白かつたといふ積りか。又は高木を僕の眼の前に出して、斯う
いふ人がゐるのだから、早く思ひ切れといふ積りか。——僕は技巧の二字を何處迄も割つて考へ
た。さうして技巧なら戦争だと考へた。戦争なら何うしても勝負に終るべきだと考へた。

僕は寐附かれないで負けてゐる自分を口惜しく思つた。電燈は蚊帳を釣るとき消して仕舞つた
ので、室の中に隙間もなく蔓延る暗闇が窒息する程重苦しく感ぜられた。僕は眼の見えない所に
眼を明けて頭丈働かす苦痛に堪へなくなつた。寐返りさへ慎んで我慢してゐた僕は、急に起つて
室を明るくした。序に縁側へ出て兩戸を一枚細目に開けた。月の傾いた空の下には動く風もなか
つた。僕はたゞ比較的冷やかな空氣を肌と咽喉に受けた丈であつた。

三十二

翌日は何時も一人で寐てゐる時より一時間半も早く眼が覺めた。すぐ起きて下へ降りると、銀
杏返しの上へ白地の手拭を被つて、長火鉢の灰を篩つてゐた作が、ちやもう御目覺めでと云ひな
がら、すぐ顔を洗ふ道具を風呂場へ並べて呉れた。僕は歸りに埃だらけの茶の間を爪先で通り抜
けて玄關へ出た。其時序に二人の寐てゐる座敷を蚊帳越しに覗いて見たら、目敏い母も昨日の汽

車の疲れが出た所爲か、未だ静かな眠りを貪つてゐた。千代子は固より夢の底に埋まつてゐる様に正體なく枕の上に首を落としてゐた。僕は目的もなく表へ出た。朝の散歩の趣きを久しく忘れてゐた僕には、常に變らない町の色が、暑さと雑沓とに染め附けられない安息日の如く穏やかに見えた。電車の線路が研ぎ澄まされた光を真直に地面の上に伸ばすのも落附いた感じであつた。けれども僕は散歩がしたくつて出たのではなかつた。唯眼が早く覺め過ぎて、中有に延びた命の断片を、運動で埋める積りで歩くのだから、夫程の興味は空にも地にも乃至町にも見出だす事が出来なかつた。

一時間ばかりして僕は寧ろ疲れた顔を母からも千代子からも怪しまれに戻つて來た。母は何處へ行つたのと聞いたが、後から、色澤が好くないよ、何うか御仕かいと尋ねた。

「昨夕好く寐られなかつたんでせう」

僕は千代子の此言葉に對して答ふべき術を知らなかつた。實を云ふと、昂然としてなに好く寐られたよと云ひたかつたのである。不幸にして僕は夫程の技巧家でなかつた。と云つて、正直に寐られなかつたと自白するには餘り自尊心が強過ぎた。僕は遂に何も答へなかつた。

三人が同じ食卓で朝飯を濟ますや否や、母が昨日涼しいうちにと頼んで置いた髪結が來た。洗

ひ立ての白い胸掛をかけて、敷居越しに手を突いた彼女は、御歸りなさいましと親しい挨拶をした。彼女は此職業に共通な目出度い口振を有つてゐた。それを得意に使つて、内氣な母に避暑を誇りの種に話させる機会を一句毎に作つた。母は満足らしくも見えだが、さう喋々しくは饒舌り得なかつた。髪結はより效き目のある相手として、すぐ年の若い千代子を選んだ。千代子は固より誰彼の容赦なく一樣に氣易く應對の出来る女だつたので、御嬢様と呼び掛けられる度に相當の受け答へをして話しを勢ました。千代子の泳ぎの噂が出た時、髪結は活潑で宜しう御座います、近頃の御嬢様方はみんな水泳の稽古をなさいますと誰が聞いても拵へたやうな御世辭を云つた。妙な事を吹聴する様で可笑しいが、實を云ふと僕は女の髪を上げる所を見てゐるのが好きであつた。母が乏しい髪を工面して、何うか斯うか鬘に結び上げる様子は、いくら上手が纏めるにしても、夫程見榮えのある晝ではないが、それでも退屈を凌ぐには恰好な慰みであつた。僕は髪結の手の動く間に、自然と出來上がつて行く小さな母の丸鬘を眺めてゐた。さうして腹の中で、千代子の髪を日本流に櫛を入れたら嘸見事だらうと思つた。千代子は色の美しい、癖のない、長く多過ぎる髪を所有者だつたからである。此場合何時もの僕なら、千代ちやんも序に結つて御貫ひなと屹度勧める所であつた。然し今の僕にはそんな親しげな要求を彼女に向つて投げ掛ける氣

が出悪かつた。すると偶然にも千代子の方で、何だか妾も一つ結つて見たくなつたと云ひ出した。母は御結ひよ久し振にと誘つた。髪結は是非御上げ遊ばせな、私始めて御髪を拜見した時から束髪にして入らつしやるのは勿體ないと思つとりましたと左も結びたさうな口振を見せた。千代子はとう／＼鏡臺の前に坐つた。

「何に結はうかしら」

髪結は島田を勧めた。母も同じ意見であつた。千代子は長い髪を背中に垂れた儘突然市さんと

呼んだ。

「貴方何が好き」

「旦那様も島田が好きだと屹度仰しやいますよ」

僕はぎくりとした。千代子は丸で平氣の顔に見えた。わざと僕の方を振り返つて、「ぢや島田に結つて見せあげませうか」と笑つた。「好いだらう」と答へた僕の聲は如何にも鈍に聞こえた。

三十三

僕は千代子の髪の出來上がらない先に二階へ上がった。僕の様な神經質なものが拘つて來ると、

無關係の人の眼には殆ど子供らしいと思はれる様な所作を敢てする。僕は中途で鏡臺の傍を離れて、美しい島田髻をいたゞく女が男から強奪する嘆賞の租税を免れた積りでゐた。其時の僕は夫程此女の虚榮心に媚びる好意を有たなかつたのである。

僕は自分で自分の事を彼此取り繕つて好く聞こえるやうに話したくない。然し僕如きものでも長火鉢の傍で起るこんな戦術よりはもう少し高尚な問題に頭を使ひ得る積りでゐる。たゞ其所迄引き摺り落とされた時、僕の弱點として何うしても脱線する氣になれないのである。僕は自分でその詰らなさ加減をよく心得てゐた丈に、それを敢てする僕を自分で憎み自分で鞭うつた。

僕は空威張りを卑劣と同じく嫌ふ人間であるから、低くても小さくても、自分らしい自分を話すのを名譽と信じて成るべく隠さない。けれども、世の中で認めてゐる偉い人とか高い人とかいふものは、悉く長火鉢や臺所の卑しい人生の葛藤を超越してゐるのだらうか。僕はまだ學校を卒業した計りの經驗しか有たない青二才に過ぎないが、僕の知力と想像に訴へて考へた所では、恐らくそんな偉い人高い人は何時の世にも存在してゐないのではなからうか。僕は松本の叔父を尊敬してゐる。けれども露骨な事を云へば、あの叔父の様なのは偉く見える人、高く見せる人と評すれば夫で足りてゐると思ふ。僕は僕の敬愛する叔父に對しては偽物質物の名を加へる非禮と僻

見とを憚りたい。が、事實上彼は世俗に拘泥しない顔をして、腹の中で拘泥してゐるのである。小事に齷齪しない手を拱いて、頭の奥で齷齪してゐるのである。外へ出さない丈が、普通より品が好いと云つて僕は讃辭を呈したく思つてゐる。さうして其外へ出さないのは財産の御蔭、年齢の御蔭、學問と見識と修養の御蔭である。が、最後に彼と彼の家庭の調子が程よく取れてゐるからでもあり、彼と社會の關係が逆な様で實は順に行くからでもある。——話しがつい横道へ外れた。僕は僕の屑々した所を餘り長く辯護し過ぎたかも知れない。

僕は今いふ通り早く二階へ上がつて仕舞つた。二階は日が近いので、階下よりは餘程凌ぎ悪いのだけれども、平生居つけた所爲で、僕は一日の大部分を此所で暮らす事にしてゐたのである。僕は何時もの通り机の前に坐つたなり唯頬杖を突いて茫然してゐた。今朝煙草の灰を棄てたマジヨリカの灰皿が綺麗に掃除されて僕の脇の前に載せてあつたのに氣が附いて、僕は其中に現はされた二羽の鴛鴦を眺めながら、其灰を空けた作の手を想像に描いた。すると下から梯子段を踏む音がして誰か上がつて來た。僕は其足音を聞くや否や、直ぐそれが作でない事を知つた。僕は斯う盆槍屈託してゐる所を千代子に見られるのを屈辱の様に感じた。同時に側にあつた書物を開けて、先刻から讀んでゐた振をする程器用な機轉を用ひるのを好まなかつた。

「結へたから見て頂戴」

僕は僕の前へすぐ斯う云ひながら坐る彼女を見た。

「可笑しいでせう。久しく結はないから」

「大變美しく出來たよ。是から何時でも島田に結ふと可い」

「二三度壞しちや結び、壞しちや結びしないと不可なのよ。毛が馴染まなくつて」

斯んな事を聞いたり答へたり三四返してゐるうちに、僕は何時の間にか昔と同じ様に美しい素直な邪氣のない千代子を眼の前に見る氣がし出した。僕の心持が何かの調子で和げられたのか、千代子の僕に對する態度が何處かで角度を改めたのか、それは判然と云ひ悪い。斯うだと説明の出來る捕へ所は兩方になかつたらしく記憶してゐる。もし此氣易い状態が一二時間も長く續いたなら、或は僕の彼女に對して抱いた變な疑惑を、過去に溯つて當初から眞直に黒い棒で誤解といふ名の下に消し去る事が出來たかも知れない。所が僕はつい不味い事をしたのである。

三十四

夫は外でもない。少時千代子と話してゐるうちに、彼女が單に頭を見せに上がつて來た計りで

なく、今日是从鎌倉へ歸るので、其左様ならを云ひに一寸顔を出したのだと云ふ事を知つた時、僕はつい用意の足りない躓き方をしたのである。

「早いね。もう歸るのかい」と僕が云つた。

「早かないわ、もう一晩泊つたんだから。だけど斯んな頭をして歸ると何だか可笑しいわね、御嫁にでも行く様で」と千代子が云つた。

「まだみんな鎌倉に居るのかい」と僕が聞いた。

「えゝ。何故」と千代子が聞き返した。

「高木さんも」と僕が又聞いた。

高木といふ名前は今迄千代子も口にせず、僕も話頭に上すのをわざと憚つてゐたのである。が、何かの機會で、平生通りの打ち解けた遠慮のない氣分が復活したので、其中に引き込まれた矢先、つい何の氣も附かずに使つて仕舞つたのである。僕はふらふらと此間を掛けて彼女の顔を見た時、忽ち後悔した。

僕が煮え切らない又捌けない男として彼女から一種の輕蔑を受けてゐる事は、僕の疾うに話した通りで、實を云へば二人の交際は此默許を認め合つた上の親しみに過ぎなかつた。其代り千代

子が常に畏れる點を、幸ひにして僕はたゞ一つ有つてゐた。夫は僕の無口である。彼女の様に萬事明けつ放しに腹を見せなければ氣の濟まない者から云ふと、何時でも、しんねりむつとりと構へてゐる僕などの態度は、決して氣に入る筈がないのだが、其所に又妙に見透かせない心の存在が仄めくので、彼女は昔から僕を全然知り抜く事の出來ない、従つて輕蔑しながらも何處かに恐ろしい所を有つた男として、或意味の尊敬を拂つてゐたのである。是は公にこそ明言しないが、向うでも腹の底で正式に認めるし、僕も冥々のうちに彼女から僕の權利として要求してゐた事實である。

所が偶然高木の名前を口にした時、僕は忽ち此尊敬を永久千代子に奪ひ返された様な心持がした。と云ふのは「高木さんも」といふ僕の間を聞いた千代子の表情が急に變化したのである。僕はそれを強ちに勝利の表情とは認めたくない。けれども彼女の眼のうちに、今迄僕が未だ嘗て彼女に見出だした試みのない、一種の侮蔑が輝いたのは疑ひもない事實であつた。僕は豫期しない瞬間に、平手で横面を力任せに打たれた人の如くにびたりと止まつた。

「あなた夫程高木さんの事が氣になるの」

彼女は斯う云つて、僕が兩手で耳を抑へたい位な高笑ひをした。僕は其時鋭い侮辱を感じた。

けれども咄嗟の場合何といふ返事も出し得なかつた。

「貴方は卑怯だ」と彼女が次に云つた。此突然な形容詞にも僕は全く驚かされた。僕は、御前こそ卑怯だ、呼ばないでものを所をわざ／＼人を呼び附けて、と云つて遣りたかつた。けれども年弱な女に對して、向うと同じ程度の激語を使ふのはまだ早過ぎると思つて我慢した。千代子もそれなり黙つた。僕は漸くにして「何故」といふ僅か二字の間を掛けた。すると千代子の濃い眉が動いた。彼女は、僕自身で僕の卑怯な意味を充分自覺してゐながら、たま／＼他の指摘を受ける、自分の弱點を相手に隠す爲に、取り繕つて空つ遠惚けるものと此間を解釋したらしい。

「何故つて、貴方自分でよく解つてゐるぢやありませんか」

「解らないから聞かして御呉れ」と僕が云つた。僕は階下に母を控へてゐるし、感情に訴へる若い女の氣質もよく呑み込んだ積りでゐたから、出来る丈相手の氣を抜いて話しを落ち附かせる爲に、其時の僕としては、殆ど無理な程の、低いかつ緩い調子を取つたのであるが、夫が却て千代子の氣に入らなかつたと見える。

「それが解らなければ貴方馬鹿よ」

僕は恐らく平生より蒼い顔をしたらうと思ふ。自分では唯眼を千代子の上に凝と据ゑた事丈を

記憶してゐる。其時何物も恐れない千代子の眼が、僕の視線と無言のうちに行き合つて、兩方共しばらく其所に止まつてゐた事も記憶してゐる。

三十五

「千代ちやんの様な活潑な人から見たら、僕見たいに引込み思案なものは無論卑怯なんだらう。僕は思つた事をすぐ口へ出したり、又は其儘所作にあらはしたりする勇氣のない、極めて因循な男なんだから。其點で卑怯だと云ふなら云はれても仕方がないが……」

「そんな事を誰が卑怯だと云ふもんですか」

「然し輕蔑はしてゐるだらう。僕はちやんと知つてる」

「貴方こそ妾を輕蔑してゐるぢやありませんか。妾の方が餘つ程よく知つてるわ」

僕は殊更に彼女の此言葉を肯定する必要を認めなかつたから、わざと返事を控へた。

「貴方は妾を學問のない、理窟の解らない、取るに足らない女だと思つて、腹の中で馬鹿にし切つてゐるんです」

「それは御前が僕を愚圖と見縊つてゐると同じ事だよ。僕は御前から卑怯と云はれても構はな

い積りだが、苟も徳義上の意味で卑怯と云ふなら、そりや御前の方が間違つてゐる。僕は少なくとも千代ちゃんに關係ある事柄に就いて、道徳上卑怯な振舞をした覚えはない筈だ。愚圖とか煮え切らないとか云ふべき所に、卑怯と云ふ言葉を使はれては、何だか道義的勇氣を缺いた——といふより、徳義を解しない下劣な人物の様に聞こえて甚だ心持が悪いから訂正して貰ひたい。夫とも今いつた意味で、僕が何か千代ちゃんに對して濟まない事でもしたのなら遠慮なく話して貰はう」

「ぢや卑怯の意味を話して上げます」と云つて千代子は泣き出した。僕は是迄千代子を自分より強い女と認めてゐた。けれども彼女の強さは單に優しい一途から出る女氣の凝り塊りとのみ解してゐた。所が今僕の前に現はれた彼女は、唯勝ち氣に充ちた丈の、世間に有りふれた、俗っぽい婦人としか見えなかつた。僕は心を動かす所なく、彼女の涙の間から如何なる説明が出るだらうと待ち設けた。彼女の唇を洩れるものは、自己の體面を飾る強辯より外に何も有る筈がないと、僕は固く信じてゐたからである。彼女は濡れた睫毛を二三度繁叩いた。

「貴方は妾を御轉婆の馬鹿だと思つて始終冷笑してゐるんです。貴方は妾を……愛してゐないんです。つまり貴方は妾と結婚なさる氣が……」

「そりや千代ちゃんの方だつて……」

「まあ御聞きなさい。そんな事は御互だと云ふんでせう。そんなら夫で宜うござんす。何も貰つて下さいとは云やしません。唯何故愛してもゐず、細君にもしようと思つてゐない妾に對して……」

彼女は此所へ来て急に口籠つた。不敏な僕は其後へ何が出て來るのか、まだ覺れなかつた。「御前に對して」と半ば彼女を促す様に問を掛けた。彼女は突然物を衝き破つた風に、「何故嫉妬なさるんです」と云ひ切つて、前よりは劇しく泣き出した。僕はさつと血が顔に上る時の熱りを兩方の頬に感じた。彼女は殆ど夫を注意しないかの如くに見えた。

「貴方は卑怯です、徳義的に卑怯です。妾が叔母さんと貴方を鎌倉へ招待した料簡さへ貴方は既に疑つて入らつしやる。それが既に卑怯です。が、それは問題ぢやありません。貴方は他の招待に應じて置きながら、何故平生の様に愉快にして下さることが出來ないんです。妾は貴方を招待した爲に恥を搔いたも同じ事です。貴方は妾の宅の客に侮辱を與へた結果、妾にも侮辱を與へてゐます」

「侮辱を與へた覚えはない」

「あります。言葉や仕打ちは何うでも構はないんです。貴方の態度が侮辱を與へてゐるんです。態度が與へてゐないでも、貴方の心が與へてゐるんです」

「そんな立ち入つた批評を受ける義務は僕にないよ」

「男は卑怯だから、さう云ふ下らない挨拶が出来るんです。高木さんは紳士だから貴方を容れる雅量が幾何でもあるのに、貴方は高木さんを容れる事が決して出来ない。卑怯だからです」

松本の話

一

夫から市藏と千代子との間が何うなつたか僕は知らない。別に何うもならないんだらう。少なくとも傍で見ていると、二人の關係は昔から今日に至る迄全く變らない様だ。二人に聞けば色々な事を云ふだらうが、夫は其時限りの氣分に制せられて、真しやかに前後に通じない嘘を、永久の價値ある如く話すのだと思へば間違ひない。僕はさう信じてゐる。

あの事件なら其當時僕も聞かされた。しかも両方から聞かされた。あれは誤解でも何でも無い。両方でさう信じてゐるので、さうして其信じ方に両方とも無理がないのだから、極めて尤もな衝突と云はなければならぬ。従つて夫婦にならうが、友達として暮らさうが、あの衝突は到底免れる事の出来ない、まあ二人の持つて生れた、因果と見るより外に仕方がなからう。所が不幸にも二人は或意味で密接に引き附けられてゐる。しかも其引き附けられ方が又傍のものに何うする權威もない宿命の力で支配されてゐるんだから恐ろしい。取り澄ました警句を用ひると、彼等

は離れる爲に合ひ、合ふ爲に離れると云つた風の氣の毒な一對を形づくつてゐる。斯う云つて君に解るか何うか知らないが、彼等が夫婦になると、不幸を醸す目的で夫婦になつたと同様の結果に陥るし、又夫婦にならないと不幸を續ける精神で夫婦にならないのと擇ぶ所のない不満足を感じるのである。だから二人の運命は唯成行に任せて、自然の手で直接に發展させて貰ふのが一番上策だと思ふ。君だの僕だのが何の蚊のと要らぬ世話を焼くのは却て當人達のために好くあるまい。僕は知つての通り、市藏から見ても千代子から見ても他人ではない。ことに須永の姉からは、二人の身分に就いて今迄頼まれたり相談を受けたりした例は何度もある。けれども天の手際で旨く行かないものを、何うして僕の方で纏める事が出来よう。つまり姉は無理な夢を自分一人で見ているのである。

須永の姉も田口の姉も、僕と市藏の性質が餘りよく似てゐるので驚いてゐる。僕自身も何うして斯んな變り者が親類に二人揃つて出来たのだらうかと考へては不思議に思ふ。須永の姉の料簡では、市藏の今日は全く僕の感化を受けた結果に過ぎないと見てゐるらしい。僕が姉の氣に入らない點を幾何でも有つてゐる内で、最も彼女を不愉快にするものは、不明なる僕のわが明に及ぼしたと認められてゐる此悪い影響である。僕は僕の市藏に對する今日迄の態度に顧て、此非難を

尤もだと肯ずる。それが爲に市藏を田口家から疎隔したといふ不服も序に承認して差支へない。たゞ彼等姉二人が僕と市藏とを、同じ型から出来上がった偏窟人の様に見做して、同じ眉を僕等の上に等しく顰めるのは疑ひもなく誤つてゐる。

市藏といふ男は世の中と接觸する度に内へとぐるを捲き込む性質である。だから一つ刺激を受けると、其刺激が夫から夫へと廻轉して、段々深く細かく心の奥に喰ひ込んで行く。さうして何處まで喰ひ込んで行つても際限を知らない同じ作用が連續して、彼を苦しめる。仕舞には何うかして此内面の活動から逃れたいと祈る位に氣を悩ますのだけれども、自分の力では如何ともすべからざる咒ひの如くに引つ張られて行く。さうして何時か此努力の爲に斃れなければならない。たつた一人で斃れなければならないといふ怖れを抱くやうになる。さうして氣狂の様に疲れる。是が市藏の命根に横たはる一大不幸である。この不幸を轉じて幸ひとするには、内へ内へと向く彼の命の方向を逆にして、外へとぐるを捲き出させるより外に仕方がない。外にある物を頭へ運び込むために眼を使ふ代りに、頭で外にある物を眺める心持で眼を使ふやうにしなければならぬ。天下にたつた一つで好いから、自分の心を奪ひ取るやうな偉いものか、美しいものか、優し

市藏は始め浮氣を輕蔑して懸かつた。今は其浮氣を渴望してゐる。彼は自己の幸福のために、何うかして翩翩たる輕薄才子になりたいと心から神に念じてゐるのである。輕薄に浮かれ得るより外に彼を救ふ途は天下に一つもない事を、彼は、僕が彼に忠告する前に、既に承知してゐた。けれども實行は未だに出來ないで藻掻いてゐる。

二

僕は斯ういふ市藏を仕立て上げた責任者として親類の者から暗に恨まれてゐるが、僕自身も其點に就いては疚しい所が大いにあるのだから仕方がない。僕はつまり性格に應じて人を導く術を心得なかつたのである。唯自分の好尚を移せる丈市藏の上に移せば夫で充分だといふ無分別から勝手次第に若いものの柔らかない精神を動かして來たのが、凡ての禍の本になつたらしい。僕が此過失に氣が附いたのは今から二三年前である。然し氣が附いた時はもう遅かつた。僕はたゞ爲す能力のない手を拱いて、心の中で嘆息した丈であつた。

事實を一言でいふと、僕の今遣つてゐるやうな生活は、僕に最も適當なので、市藏には決して向かないのである。僕は本來から氣の移り易く出來上がつた、極めて安價な批評をすれば、生れ

附いての浮氣ものに過ぎない。僕の心は絶えず外に向つて流れてゐる。だから外部の刺激次第で何うにでもなる。と云つた丈ではよく腑に落ちないかも知れないが、市藏は在來の社會を教育する爲に生れた男で、僕は通俗な世間から教育されに出た人間なのである。僕が此位好い年をしながら、まだ大變若い所があるのに引き更へて、市藏は高等學校時代から既に老成してゐた。彼は社會を考へる種に使ふけれども、僕は社會の考へに此方から乗り移つて行く丈である。其所に彼の長所があり、かねて彼の不幸が潜んでゐる。其所に僕の短所があり又僕の幸福が宿つてゐる。僕は茶の湯をやれば靜かな心持になり、骨董を捻くれば寂びた心持になる。其外寄席、芝居、相撲、凡て其時々々の心持になれる。其結果あまり眼前の事物に心を奪はれ過ぎるので、自然に己なき空疎な感に打たれざるを得ない。だから斯んな超然生活を營んで強ひて自我を押し立てようとするのである。所が市藏は自我より外に當初から何物も有つてゐない男である。彼の缺點を補ふ——といふより、彼の不幸を切り詰める生活の徑路は、唯内に潜り込まないで外に應ずるより外に仕方がないのである。然るに彼を幸福にし得る其唯一の策を、僕は間接に彼から奪つて仕舞つた。親類が恨むのは尤もである。僕は本人から恨まれないのをまだしもの仕合せと思つてゐる位である。

今から慥か一年位前の話だと思ふ。何しろ市藏がまだ學校を出ない時の話だが、ある日偶然遣つて来て、一寸挨拶をしたがり直ぐ何處かへ見えなくなつた事がある。其時僕はある人に頼まれて、書齋で日本の活花の歴史を調べてゐた。僕は調べものの方に氣を取られて、彼の顔を出した時、やあと唯振り返つた丈であつたが、夫でも彼の血色が甚だ勝れないのを苦にして仕事の區切りが附くや否や彼を探しに書齋を出た。彼は妻とも仲が善かつたので、或は茶の間で話してもしてゐる事かと思つたら、其所にも姿は見えなかつた。妻に聞くと子供の部屋だらうといふので、縁傳ひに戸を開けると、彼は咲子の机の前に坐つて、女の雑誌の口繪に出てゐる、ある美人の寫眞を眺めてゐた。其時彼は僕を顧て、今斯ういふ美人を發見して、先刻から十分許り相對してゐる所だと告げた。彼は其顔が眼の前にある間、頭の中の苦痛を忘れて自ら愉快になるのださうである。僕は早速何處の何者の令嬢かと尋ねた。すると不思議にも彼は寫眞の下に書いてある女の名前をまだ讀まずにゐた。僕は彼を迂濶だと云つた。夫程氣に入つた顔なら何故名前から先に頭に入れないかと尋ねた。時と場合によれば、細君として申し受ける事も不可能でないと思つたからである。然るに彼は又何の必要があつて姓名や住所を記憶するかと云つた風の眼使ひをして僕の注意を怪しんだ。

つまり僕は飽く迄も寫眞を實物の代表として眺め、彼は寫眞をたゞの寫眞として眺めてゐたのである。若し寫眞の背後に、本當の位置や身分や教育や性情が附け加はつて、紙の上の肖像を活かしに掛かつたなら、彼は却て氣に入つた其顔迄併せて打ち棄てて仕舞つたかも知れない。是が市藏の僕と根本的に違ふ所である。

三

市藏の卒業する二三ヶ月前、たしか去年の四月頃だつたらうと思ふ。僕は彼の母から彼の結婚に關して、今迄にない長時間の相談を受けた。姉の意思は固より田口の嫁娘を彼の嫁として迎へたいといふ單純にしてかつ頑固なものであつた。僕は女に理窟を聞かせるのを、男の恥の様に思ふ癖があるので、六づかしい事は成るべく控へたが、何しろ斯ういふ問題を就いて、出来る丈本人の自由を許さないのは親の義務に背くのも同然だといふ意味を、昔風の彼女の臍に落ちるやうに碎いて説明した。姉は御承知の通り極めて穩やかな女ではあるが、いざとなると同じ意見を何度でも繰り返して憚らない婦人に共通な特性を一人前以上に具へてゐた。僕は彼女の執拗を惡むよりは、其根氣の好過ぎる所に却て妙な憐みを催した。それで、今親類中に、市藏の尊敬してゐ

るものは僕より外にないのだから、兎も角も一遍呼び寄せて篤と話して見て呉れぬかといふ彼女の請を快く引受けた。

僕が此目的を果たすために市藏と此座敷で會見を遂げたのは、夫から四日目の日曜の朝だと記憶する。彼は卒業試験間近の多忙を目の前に控へながら座に着いて、何試験なんか何うなつたつて構やしませんかと苦笑した。彼の説明によると、かねて其話は彼の母から何度も聞かされて、何度も決答を繰り延ばした陳腐なものであつた。尤も彼のそれに對する態度は、問題の陳腐と反比例に頗る切なさうに見えた。彼は最後に母から口説かれた時、卒業の上、何うとも解決するから、夫迄待つて呉れると母に頼んで置いたのださうである。夫をまだ試験も済まない先から僕に呼び附けられたので、多少迷惑らしく見えた計りか、年寄は氣が短かくつて困ると言葉に出して迄訴へた。僕も尤もだと思つた。

僕の推測では、彼が學校を出る迄兎角の決答を延ばしたのは、そのうちに千代子の縁談が、自分よりは適當な候補者の上に纏ひ附くに違ひないと鑑定して、直接に母を失望させる代りに、周囲の事情が母の意思を翻させるため自然と彼女に壓迫を加へて來るのを待つ一種の逃避手段に過ぎないと思はれた。僕は市藏にさうぢや無いかと聞いた。市藏はさうだと答へた。僕は彼に何う

しても母を満足させる氣はないかと尋ねた。彼は何事によらず母を満足させたいのは山々である
と答へた。けれども千代子を貰はうとは決して云はなかつた。意地づくで貰はないのかと聞いた
ら、或はさうかも知れないと云ひ切つた。もし田口が遣つても好いと云ひ、千代子が來ても好い
と云つたら何うだと念を押したら、市藏は返事をしらずに黙つて僕の顔を眺めてゐた。僕は彼の此
顔を見ると、決して話しを先へ進める氣になれないのである。畏怖といふと仰山すぎるし、同情
といふと丸で憐れつぽく聞こえるし、此顔から受ける僕の心持は、何と云つて可いか殆ど分らな
いが、永久に相手を諦めて仕舞はなければならぬ絶望に、ある凄味と優し味を附け加へた特殊
の表情であつた。

市藏はしばらくして自分は何故斯う人に嫌はれるんだらうと突然意外な述懐をした。僕は其の
時ならないのと平生の市藏に似合はしからぬのとで驚かされた。何故そんな愚癡を零すのかと
窘める様な調子で反問を加へた。

「愚癡ぢやありません。事實だから云ふのです」

「ぢや誰が御前を嫌つてゐるかい」

「現にさういふ叔父さんからして僕を嫌つてゐるぢやありませんか」

僕は再び驚かされた。あまり不思議だから三度押し問答の末推測して見ると、彼に特有な一種の表情に支配されて話しの進行を停止した時の態度を、全然彼に對する嫌惡の念から出たと受けてゐるらしかつた。僕は極力彼の誤解を打破しに掛かつた。

「おれが何で御前を惡む必要があるかね。子供の時から關係でも知れてゐるぢやないか。馬鹿を云ひなさんな」

市藏は叱られて激した様子もなく益蒼い顔をして僕を見詰めた。僕は燐火の前に坐つてゐる様な心持がした。

四

「おれは御前の叔父だよ。何處の國に甥を憎む叔父があるかい」

市藏は此言葉を聞くや否や忽ち薄い唇を反らして淋しく笑つた。僕は其淋しみの裏に、奥深い輕侮の色を透かし見た。自白するが、彼は理解の上にて僕よりも優れた頭の所有者である。僕は百も夫を承知でゐた。だから彼と接觸するときには、彼から馬鹿にされるやうな愚を成るべく慎んで外に出さない用心を怠らなかつた。けれども時々、つい年長者の傲る心から、親しみの

強い彼を眼下に見下して、淺薄と心附きながら、其場限りの無意味に勿體を附けた訓戒など與へる折も無いではなかつた。賢い彼は僕に恥を搔かせるために、自分の優越を利用する程、品位を缺いた所作を敢てし得ないのであるが、僕の方では其都度彼に對する此方の相場が下落して行くやうな屈辱を感ずるのが例であつた。僕はすぐ自分の言葉を訂正しに掛かつた。

「そりや廣い世の中だから、敵同志の親子もあるだらうし、命を危め合ふ夫婦も居ないとは限らないさ。然しまあ一般に云へば、兄弟とか叔父甥とかの名で繋がつてゐる以上は、繋がつてゐる丈の親しみは何處かにあらうぢやないか。御前は相應の教育もあり、相應の頭もある癖に、何だか妙に一種の僻みがあるよ。夫が御前の弱點だ。是非直さなくつちや不可ない。傍から見ても不愉快だ」

「だから叔父さん迄僕を嫌つてゐると云ふのです」

僕は返事に窮した。自分で氣の附かない自分の矛盾を今市藏から指摘された様な心持もした。

「僻みさへさらりと棄てて仕舞へば何でもないぢやないか」と僕は左も事もなげに云つて退けた。

「僕に僻みがあるでせうか」と市藏は落ち附いて聞いた。

「あるよ」と僕は考へずに答へた。

「何ういふ所が僻んでゐるでせう。判然聞かして下さい」

「何ういふ所がつて、——あるよ。あるから有ると云ふんだよ」

「ぢや左ういふ弱點があるとして、其弱點は何處から出たんでせう」

「そりや自分の事だから、少し自分で考へて見たら可からう」

「貴方は不親切だ」と市藏が思ひ切つた沈痛な調子で云つた。僕はまづ其調子に度を失つた。次に彼の眼の色を見て萎縮した。其眼は如何にも恨めしさうに僕の顔を見詰めてゐた。僕は彼の前一言の挨拶さへする勇氣を振ひ起し得なかつた。

「僕は貴方に云はれない先から考へてゐたのです。仰しやる迄もなく自分の事だから考へてゐたのです。誰も教へて呉れ手がないから獨りで考へてゐたのです。僕は毎日毎夜考へました。餘り考へ過ぎて頭も身體も續かなくなる迄考へたのです。夫でも分らないから貴方に聞いたのです。貴方は自分から僕の叔父だと明言して入らつしやる。それで叔父だから他人より親切だと云はれる。然し今の御言葉は貴方の口から出たにも拘らず、他人よりも冷刻なものとしか僕には聞こえませんでした」

僕は頬を傳はつて流れる彼の涙を見た。幼少の時から馴染んで今日に及んだ彼と僕との間に、こんな光景は未だ嘗て一回も起らなかつた事を僕は君に明言して置きたい。従つて此昂奮した青年を何う取り扱つて可いかの心得が、僕に丸で無かつた事も序に斷つて置きたい。僕は唯茫然として手を拱いてゐた。市藏は又僕の態度などを眼中に置いて、自分の言葉を調節する餘裕を有たなかつた。

「僕は僻んでゐるでせうか。慥かに僻んでゐるでせう。貴方が仰しやらないでも、よく知つてゐる積りです。僕は僻んでゐます。僕は貴方からそんな注意を受けなくても、よく知つてゐます。僕はたゞ何うして斯うなつたか其譯が知りたいのです。いゝえ母でも、田口の叔母でも、貴方でもみんな好く其譯を知つてゐるのです。唯僕丈が知らないのです。唯僕丈に知らせないのです。僕は世の中の人間の中で貴方を一番信用してゐるから聞いたのです。貴方はそれを残酷に拒絶した。僕は是から生涯の敵として貴方を咒ひます」

市藏は立ち上がった。僕は其咄嗟の際に決心をした。さうして彼を呼び留めた。

僕はかつて或學者の講演を聞いた事がある。其學者は現代の日本の開化を解剖して、かゝる開化の影響を受ける吾等は、上滑りにならなければ必ず神經衰弱に陥るに極まつてゐるといふ理由を、臆面なく聴衆の前に曝露した。さうして物の真相は知らぬ内こそ知りたいたいのだが、いざ知つたとなると、却て知らぬが佛で済ましてゐた昔が羨ましくつて、今の自分を後悔する場合も少なくなはない。私の結論杯も或はそれに似たものかも知れませんが、苦笑して壇を退いた。僕は其時市藏の事を思ひ出して、斯ういふ苦しい眞理を承はらなければならぬ我々日本人も随分氣の毒なものだが、彼の様にたつた一人の秘密を、攫まうとしては恐れ、恐れては又攫まうとする青年は一層見慘に違ひあるまいと考へながら、腹の中で暗に同情の涙を彼のために濺いだ。

是は單に僕の一族内の事で、君とは全く利害の交渉を有たない話だから、君が市藏のために折角心配して呉れた親切に對する前からの行掛りさへなければ、打ち明けない筈だつたが、實を云ふと、市藏の太陽は彼の生れた日から既に曇つてゐるのである。

僕は誰にでも明言して憚らない通り、一切の秘密はそれを開放した時始めて自然に復る落着を見る事が出来るといふ主義を抱いてゐるので、穩便とか現狀維持とかいふ言葉には一般の人ほど重きを置いてゐない。従つて今日迄に自分から進んで、市藏の運命を生れた當時に溯つて、逆に

照らしてやらなかつたのは僕としては寧ろ不思議な手落ちと云つても可い位である。今考へて見ると、僕が市藏に呪はれる間際迄、何故此事件を秘密にしてゐたものか、其意味が殆ど分らない。僕は此秘密に風を入れた所で、彼等母子の間柄が悪くならうとは夢にも想像し得なかつたからである。

市藏の太陽は彼の生れた日から既に曇つてゐたといふ僕の言葉の裏に、何んな事實が含まれてゐるかは、彼と交りの深い君の耳で考へたら、既に具體的な響となつて解つてゐるかも知れない。一口でいふと、彼等は本當の母子ではないのである。猶誤解のないやうに一言付け加へると、本當の母子よりも遙かに仲の好い繼母と繼子なのである。彼等は血を分けて始めて成立する通俗な親子關係を輕蔑しても差支へない位、情愛の糸で離れられないやうに、自然から確り括り附けられてゐる。何んな魔の振る斧の刃でも此糸を絶ち切る譯に行かないのだから、何んな秘密を打ち明けても怖がる必要は更にないのである。夫だのに姉は非常に恐れてゐた。市藏も非常に恐れてゐた。姉は秘密を手に握つた儘、市藏は秘密を手に握らせられるだらうと待ち受けた儘、二人して非常に恐れてゐた。僕はどうく彼の恐れるものの正體を取り出して、彼の前に他意なく並べて遣つたのである。

僕は其時の問答を一々繰り返して今君に告げる勇氣に乏しい。僕には固より夫程の大事件とも始めから見えず、又成る可く平氣を装ふ必要から、詰り何でもない事の様に話したのだが、市藏は夫を命懸けの報知として、必死の緊張の下に受けたからである。唯前の續きとして、事實丈を一口に約めて云ふと、彼は姉の子でなくつて小間使の腹から生れたのである。僕自身の家につた事でない上に、二十五年以上も経つた昔の話だから、僕も詳しい顛末は知らう筈がないが、何しろ其小間使が須永の種を宿した時、姉は相當の金を遣つて彼女に暇を取らしたのださうである。夫から宿へ下がつた姪婦が男の子を生んだといふ報知を待つて、又子供引き取つて表向き自分の子として養育したのださうである。是は姉が須永に對する義理からでもあらうが、一つは自分に子の出来ないのを苦にしてゐた矢先だから、本氣に吾子として愛しむ考へも無論手傳つたに違ひない。實際彼等は君の見る如く、又吾々の見る如く、最も親しい親子として今日迄發展して來たのだから、御互に事情を明かし合つた所で毫も差支への起る譯がない。僕に云はせると、世間に有り勝ちな反りの合はない本當の親子よりも何の位肩身が廣いか分りやしない。二人だつて、さうと知つた上で、今迄の睦まじさを回顧した時の方が、何んなに愉快が多いだらう。少なくとも僕ならさうだ。それで僕は市藏のために特に此美しい點を力の有らん限り彩どる事を怠らなかつた。

六

つた。

「おれは左う思ふんだ。だから少しも隠す必要を認めてゐない。御前だつて健全な精神を持つてゐるなら、おれと同じ様に思ふべき筈ぢやないか。もし左う思ふ事が出來ないといふなら、夫が即ち御前の僻みだ。解つたかな」

「解りました。善く解りました」と市藏が答へた。僕は「解つたら夫で好い、もう其問題に就いて彼是といふのは止しにしようよ」と云つた。

「もう止します。もう決して此事に就いて、貴方を煩はす日は來ないでせう。成程貴方の仰しやる通り僕は僻んだ解釋ばかりしてゐたのです。僕は貴方の御話を聞く迄は非常に怖かつたです。胸の肉が縮まる程怖かつたです。けれども御話を聞いて凡てが明白になつたら、却て安心して氣が樂になりました。もう怖い事も不安な事もありません。其代り何だか急に心細くなりました。淋しいです。世の中にたつた一人立つてゐる様な氣がします」

「だつて御母さんは元の通りの御母さんなんだよ。おれだつて今迄のおれだよ。誰も御前に對

して變るものはありません。神経を起しちや不可ない」

「神經は起さなくつても淋しいんだから仕方がありません。僕は是から宅へ歸つて母の顔を見ると屹度泣くに極まつてゐます。今から其時の涙を豫想しても淋しくつて堪りません」

「御母さんには黙つてゐる方が可からう」

「無論話しやしません。話したら母が何んな苦しい顔をするか分りません」

二人は黙然として相對した。僕は手持無沙汰に煙草盆の灰吹を叩いた。市藏は俯向いて袴の膝を見詰めてゐた。やがて彼は淋しい顔を上げた。

「もう一つ伺つて置きたい事があります、聞いて下さいませるか」

「おれの知つてる事なら何でも話して上げる」

「僕を生んだ母は今何處に居るんです」

彼の實の母は、彼を生むと間もなく死んで仕舞つたのである。それは産後の肥立ちが悪かつた所爲だとも云ひ、又は別の病だとも聞いてゐるが、是も詳しい話を爲て遣る程の材料に缺乏した僕の記憶では、到底餓ゑた彼の眼を靜めるに足りなかつた。彼の生母の最後の運命に關する僕の話は、僅か二三分で盡きて仕舞つた。彼は遺憾な顔をして彼女の名前を聞いた。幸ひにして僕

はお弓といふ古風な名を忘れずにゐた。彼は次に死んだ時の彼女の年齢を問うた。僕は其點に關して、何といふ確とした知識も有つてゐなかつた。彼は最後に、彼の宅に奉公してゐた時分の彼女に會つた事があるかと尋ねた。僕はあると答へた。彼はどんな女だと聞き返した。氣の毒にも僕の記憶は頗る朦朧としてゐた。事實僕は其當時十五六の少年に過ぎなかつたのである。

「何でも島田に結つてた事がある」

此位より外に要領を得た返事は一つも出来ないで、僕も甚だ残念に思つた。市藏は漸く諦めたといふ眼附をして、一番仕舞に「ぢや切めて寺丈教へて呉れませんか。母が何處へ埋まつてゐるんだか、夫丈でも知つて置きたいと思ひますから」と云つた。けれどもお弓の菩提所を僕が知らう筈がなかつた。僕は呻吟しながら、己むを得なければ姉に聞くより外に仕方があるまいと答へた。

「御母さんより外に知つてるものは無いでせうか」

「まあ有るまいね」

「ぢや分らないでも宜ござんす」

僕は市藏に對して氣の毒なやうな又濟まないやうな心持がした。彼はしばらく庭の方を向いて、

麗らかな日脚の中に咲く大きな椿を眺めてゐたが、やがて視線を故に戻した。

「御母さんが是非千代ちやんを貰へといふのも、矢つ張り血統上の考へから、身縁のものを僕の嫁にしたいといふ意味なんでせうね」

「全く其所だ。外に何も無いんだ」

市藏は夫では貰はうとも云はなかつた。僕も夫なら貰ふかとも聞かなかつた。

七

此會見は僕にとつて美しい経験の一つであつた。双方で腹藏なく凡てを打ち明け合ふ事が出来たといふ點に於て、いまだに僕の貧しい過去を飾つてゐる。相手の市藏から見ても、或は生れて始めての慰藉ではなかつたかと思ふ。兎に角彼が歸つたあとの僕の頭には、善い功德を施したといふ愉快な感じが残つたのである。

「萬事おれが引き受けて遣るから心配しないがいゝ」

僕は彼を玄關に送り出しながら、最後に斯ういふ言葉を彼の背に暖かく掛けて遣つた。其代り姉に會見の結果を報告する時は甚だ不味かつた。己むを得ないから、卒業して頭に暇さへ出來れ

ば、はつきり何うにか片を附けると云つてゐるから、夫迄待つが好からう、今彼は突つつくのは試験の邪魔になる丈だからと、姉が聞いても無理のない所で、一先宥めて置いた。

僕は同時に事情を田口に話して、成るべく市藏の卒業前に千代子の縁談が運ぶやうに工夫した。委細を聞いた田口の口振は平生の通り如才なく且無雑作であつた。彼は僕の注意がなくなつても、其邊は心得てゐる積りだと答へた。

「けれども必竟は本人の爲に嫁入けるんで、さう申しちや角が立つが」姉さんや市藏の便宜のために、千代子の結婚を無理に繰り上げたり、繰り延べたりする譯にも行かないものだから」

「御尤もだ」と僕は承認せざるを得なかつた。僕は元來田口家と親類並の交際をしてゐるにはあるが、其實彼等の娘の縁談に、進んで口を出したこともなければ、又向うから相談を受けた例も有たないのである。夫で今日迄千代子に何んな候補者があつたのか、間接にさへ殆ど其噂を耳にしなかつた。たゞ前の年鎌倉の避暑地とかで市藏が會つて氣を悪くしたといふ高木丈は、市藏からも千代子からも名前を教へられて覚えてゐた。僕は突然ながら田口に其男は何うなつたかと尋ねた。田口は愛嬌らしく笑つて、高木は始めから候補者として打つて出たのではないと告げた。けれども相當の身分と教育があつて獨身の男なら、誰でも候補者になり得る権利は有つてゐるの

だから、候補者でないとは決して断言出来ないとも告げた。此曖昧な男の事を僕は猶委しく聞いて見て、彼が今上海にゐる事を確めた。上海にゐるけれども何時歸るか分らないといふ事も確めた。彼と千代子との間柄は其後何等の發展も見ないが、信書の往復は未だに絶えない、さうして其信書は屹度父母が眼を通した上で本人の手に落つるといふ條件附きの往復であるといふ事迄確めた。僕は一も二もなく、千代子には其男が好いぢやないかと云つた。田口はまだ何處かに慾があるのか、又は別に考へを有つてゐるのか、さうする積りだとは明言しなかつた。高木の如何なる人物かを丸で解しない僕が、それ以上勧める権利もないから、僕はつひ其儘にして引き取つた。僕と市藏とは其後久しく會はなかつた。久しくと云つた所で僅か一ヶ月半許りの時日に過ぎないのだが、僕には卒業試験を眼の前に控へながら、家庭問題に屈託しなければならぬ彼の事が非常に氣に掛かつた。僕はそつと姉を訪ねてそれとなく彼の近況を探つて見た。姉は平氣で、何でも大分忙しさうだよ、卒業するんだから其筈さねと云つて澄ましてゐた。僕は夫でも不安心だつたから、或日一時間の夕を僕と會食する爲に割かせて、彼の家近所の洋食店で共に晚餐を食ひながら、密かに彼の様子を窺つた。彼は平生の通り落ち附いてゐた。なに試験なんか何うにか斯うにか遣つ附けまさと受け合つた所に、満更の虚勢も見えなかつた。大丈夫かいと念を押し

た時、彼は急に情なさうな顔をして、人間の頭は思つたより堅固に出来てゐるもんですね、實は僕自身も怖くつて堪らないんですが、不思議にまだ壞れません、此様子ならまだ當分は使へるでせうと云つた。冗談らしくもあり、又眞面目らしくもある此言葉が、妙に憐れ深い感じを僕に與へた。

八

若葉の時節が過ぎて、湯上りの單衣の胸に、團扇の風を入れたく思ふ或日、市藏が又ふらりと遣つて來た。彼の顔を見るや否や僕が第一に掛けた言葉は、試験は何うだつたといふ一語であつた。彼は昨日漸く濟んだと答へた。さうして明日から一寸旅行して來る積りだから暇乞に來たと告げた。僕は成績もまだ分らないのに、遠く走る彼の心理状態を疑つて又多少の不安を感じた。彼は京都附近から須磨明石を経て、ことに因ると、廣島邊迄行きたいといふ希望を述べた。僕は其旅行の比較的大袈裟なのに驚いた。及第とさへ極まつてゐれば夫でも好からうがと間接に不贊成の意を仄めかして見ると、彼は試験の結果などには存外冷淡な挨拶をした。そんな事に氣を遣ふ叔父さんこそ平生にも似合はしからんぢやありませんかと云つて、殆ど相手にならなかつた。

話してゐるうちに、僕は彼の思ひ立ちが及落の成績に關係のない別方面の動機から萌してゐるといふ事を發見した。

「實はあの事件以來妙に頭を使ふので、近頃では落ちついて書齋に坐つてゐる事が困難になりましてね。何うしても旅行が必要なんですから、まあ試験を中途で已めなかつたのが感心だ位に賞めて許して下さい」

「そりや御前の金で御前の行きたい所へ行くのだから少しも差支へはないさ。考へて見れば少しは飛び歩いて氣を換へるのも好からう。行つて來るがい」

「え」と云つて市藏はやゝ満足らしい顔をしたが「實は大きな聲で話すのも氣の毒で勿體ないんですが、叔父さんにあの話を聞いてから以後は、母の顔を見るたびに、變な心持になつて堪らないんです」と附け足した。

「不愉快になるのか」と僕は寧ろ嚴かに聞いた。

「いゝえ、只氣の毒なんです。始めは淋しくつて仕方がなかつたのが、段々段々氣の毒に變化して來たのです。實は此所丈の話しですけれども、近頃では母の顔を朝夕見るのが苦痛なんです。今度の旅行だつて、かねてから卒業したら母に京大阪と宮島を見物させて遣りたいと思つてゐた

のだから、昔の僕なら供をする氣で留守を叔父さんにも頼みに出掛けて來る所なんです、今云つた様な譯で、關係が丸で逆になつたもんだから、少しでも母の傍を離れたらといふ氣ばかりして」

「困るね、さう變になつちやあ」

「僕は離れたら又屹度母が戀しくなるだらうと思ふんですが、何うでせう。さう旨くは行かないもんでせうか」

市藏は左も懸念らしく斯ういふ問を掛けた。彼より經驗に富んだ年長者を以て自任する僕にも、此點に關する彼の未來は殆ど想像出來なかつた。僕はたゞ自分に信念がなくなつて、わが心の事を他に尋ねて安心したいと願ふ彼の胸の裡を憐れに思つた。上部は如何にも優しさうに見えて、實際は極めて意地の強く出來上がった彼が、こんな弱い音を出すのは、殆ど例のない事だつたからである。僕は僕の力の及ぶ限り彼の心に保證を與へた。

「そんな心配はする丈損だよ。おれが受け合つてやる。大丈夫だから遊んで來るが好い。御前の御母さんはおれの姉だ。しかもおれよりも學問をしない丈に、餘程純良に出來てゐる、誰からも敬愛されべき婦人だ。あの姉と君のやうな情愛のある子が何うして離れつ切りに離れられる

ものか。大丈夫だから安心するが好い」

市藏は僕の言葉を聞いて實際安心したらしく見えた。僕も稍安心した。けれども一方では、此位根のない慰藉の言葉が、明晰な頭腦を有つた市藏に、是程の影響を與へるとすれば、それは彼の神經が何處か調子を失つてゐる爲ではなからうかといふ疑ひも起つた。僕は突然極端の出來事を豫想して、一人身の旅行を危み始めた。

「おれも一所に行かうか」

「叔父さんと一所ぢや」と市藏は苦笑した。

「不可ないかい」

「平生なら此方から誘つても行つて貰ひたいんだが、何しろ何時何處へ立つんだか分らない、云はゞ氣の向き次第豫定の狂ふ旅行だから御氣の毒でね。それに僕の方でも貴方がゐると束縛があつて面白くないから……」

「ぢや止さう」と僕はすぐ申し出を撤回した。

九

市藏が歸つた後でも、しばらくは彼の事が變に氣に掛かつた。暗い祕密を彼の頭に判で押した以上、それから出る一切の責任は、當然僕が背負つて立たなければならぬ氣がしたからである。僕は姉に會つて、彼女の様子を見もし、又市藏の近況を聞きもしたくなつた。茶の間にゐた妻を呼んで、相談旁理由を話すと、存外物に驚かない妻は、貴方があんまり餘計な御喋舌をなさるからですよと云つて、始めは殆ど取り合はなかつたが、仕舞に、なんで市さんに間違ひがあるもんですか、市さんは年こそ若い、貴方より餘つ程分別のある人ですものと、獨りで受け合つてゐた。

「すると市藏の方で、却ておれの事を心配してゐる譯になるんだね」

「さうですとも、誰だつて貴方の懐手ばかりして、舶來のパイプを銜へてゐる所を見れば、心配になりませう」

其内子供が學校から歸つて来て、家の中が急に賑やかになつたので、市藏の事はつい忘れた限り、夕方までとうとう思ひ出す暇がなかつた。其所へ姉が自分の方から突然尋ねて來た時は、僕も覺えず冷りとした。

姉は何時もの通り、家族の集まつてゐる真中に坐つて、無沙汰の詫びやら、時候の挨拶やらを

長々しく妻と交換してゐた。僕も其所に座を占めた儘動く機會を失つた。

「市藏が明日から旅行するつて云ふぢやありませんか」と僕は好い加減な時分に聞き出した。「それに就いてね……」と姉は稍眞面目になつて僕の顔を見た。僕は姉の言葉を皆まで聞かずに、「なに行きたいなら行かして御遣んなさい。試験で頭を散々使つた後だもの。少しは樂もさせないと身體の毒になるから」と恰も市藏の行動を辯護する様に云つた。姉は固より同じ意見だと答へた。たゞ彼の健康状態が旅行に堪へるか何うかを氣遣ふ丈だと告げた。最後に僕の見るところは大丈夫なのかと聞いた。僕は大丈夫だと答へた。妻も大丈夫だと答へた。姉は安心といふよりも、寧ろ物足りない顔をした。僕は姉の使ふ健康といふ言葉が、身體に關係のない精神上的の意味を有つてゐるに違ひないと考へて、腹の中で一種の苦痛を感じた。姉は僕の顔附から直覺的に影響を受けたらしい心細さを額に刻んで、「恒さん、先刻市藏が此方へ上がった時、何か様子の變つた所でも有りやしませんでしたかい」と聞いた。

「何そんな事があるもんですか。矢つ張り普通の市藏でさあ。ねえお仙」

「え、些とも違つて御出でぢやありません」

「わたしも左うかと思ふけれども、何だか此間から調子が變でね」

「何んななんです」

「何んなだと云はれると又話しやうもないんだが」

「全く試験の爲だよ」と僕はすぐ打ち消した。

「姉さんの神經ですよ」と妻も口を出した。

僕等は夫婦して姉を慰めた。姉は仕舞に稍納得したらしい顔附をして、みんなと夕食を共にする迄話し込んだ。歸る時には散歩がてら、子供を連れて電車まで見送つたが、夫でも氣が濟まないで、子供を先へ歸して、斷る姉の傍に席を取つたなり、とう／＼彼女の家迄來た。

僕は幸ひ二階にゐた市藏を姉の前に呼び出した。御母さんが御前の事を大層心配してわざ／＼矢來まで來たから、今おれが色々云つて漸く安心させた處だと告げた。従つて旅行に出すのは、つまり僕の責任なんだから、成るべく年寄に心配を掛けない様に、着いたら着いた所から、立つなら立つ所から、又逗留するなら逗留する所から、必ず音信を怠らない様にして、何時でも用が出來次第此方から呼び返す事の出來る注意をしたら好からうと云つた。市藏は其位の面倒なら僕に注意される迄もなく既に心得てゐると答へて、彼の母の顔を見ながら微笑した。

僕は是で幾分か姉の心を柔げ得たものと信じて十一時頃又電車で矢來へ歸つて來た。

僕を迎へに玄關に出た妻は、待ちかねたやうに、何うでしたと尋ねた。僕はまあ安心だらうよと答へた。實際僕は安心した様な心持だったのである。で、明るる日は新橋へ見送りにも行かなかつた。

十

約束の音信は到る所からあつた。勘定すると大抵日に一本位の割になつてゐる。其代り多くは旅先の繪端書に二三行の文句を書き込んだ簡略なものに過ぎなかつた。僕は其端書が着く度に、まづ安心したといふ顔附をして、妻からよく笑はれた。一度僕が此様子なら大丈夫らしいね、何うも御前の豫言の方が適中したらしいと云つた時、妻は愛想もなく、當り前ですわ、三面記事や小説見たやうな事が、滅多にあつて堪るもんですかと答へた。僕の妻は小説と三面記事とを同じ物の如く見做す女であつた。さうして兩方とも嘘と信じて疑はない程浪漫斯に縁の遠い女であつた。

端書に満足した僕は、彼の封筒入りの書翰に接し出した時更に眉を開いた。といふのは、僕の恐れを抱いてゐた彼の手が、陰鬱な色に巻紙を染めた痕迹が、其の何處にも見出だせなかつたからである。彼の状袋の中に巻き納めた文句が、彼の端書よりも如何に鮮やかに、彼の變化した氣分を示してゐるかは、實際それを讀んで見ないと分らない。此所に二三通取つてある。彼の氣分を變化するに與つて效力のあつたものは京都の空氣だの宇治の水だの色々ある中に、上方地方の人の使ふ言葉が、東京に育つた彼に取つては最も興味の多い刺激になつたらしい。何遍もあの邊を通過した經驗のあるものから云ふと馬鹿げてゐるが、市藏の當時の神經にはあゝ云ふ滑らかで靜かな調子が、鎮經劑以上に優しい影響を與へ得たのではなからうかと思ふ。なに若い女の？それは知らない。無論若い女の口から出れば効目は多いだらう。市藏も若い男の事だから、求めてさう云ふ所へ近附いたかも知れない。然し此所に書いてあるのは、不思議に御婆さんの例である。

「僕は此邊の人の言葉を聞くと微かな酔ひに身を任せた様な氣分になります。ある人はべたつて厭だと云ひますが、僕は丸で反對です。厭なのは東京の言葉です。無暗に角度の多い金米糖のやうな調子を得意になつて出します。さうして聽手の心を粗暴にして威張ります。僕は昨日京都から大阪へ來ました。今朝日新聞にゐる友人を尋ねたら、其友人が箕面といふ紅葉の名所へ案内して呉れました。時節が時節ですから、紅葉は無論見られませんでした。が、溪川があつて、

山があつて、山の行き當りに瀧があつて、大變好い所でした。友人は僕を休ませる爲に社の俱樂部とかいふ二階建の建物の中へ案内しました。其所へ這入つて見ると、幅の廣い長い土間が、堅に家の間口を貫いてゐました。さうして其が悉く敷瓦で敷き詰められてゐる模様が、何だか支那の御寺へでも行つたやうな沈んだ心持を僕に與へました。此家は何でも誰かが始め別荘に拵へたのを、朝日新聞で買ひ取つて俱樂部用にしたのだとか聞きましたが、よし別荘にせよ、瓦を疊んで出来てゐる、此廣々とした土間は何の爲でせう。僕はあまり妙だから友人に尋ねて見ました。所が友人は知らんと云ひました。尤も是は何うでも構はない事です。たゞ叔父さんが斯う云ふ事に明らかなら、或は知つて御出でかも知れないと思つて、一寸蛇足に書き添へた丈です。僕の御報知したいのは實は此廣い土間ではなかつたのです。土間の上に下りてゐた御婆さんが問題だつたのです。御婆さんは二人ゐました。一人は立つて、一人は椅子に腰を掛けてゐました。但し両方ともくりく坊主です。其立つてゐる方が、僕等が這入るや否や、友人の顔を見て挨拶をしました。さうして『おや御免やす。今八十六の御婆さんの頭を剃つとる所だすよつて。——御婆さん凝として居なはれや、もう少しだけ。——よう剃つたけれ毛は一本も有りやせんよつて、何も恐ろしい事ありやへん』と云ひました。椅子に腰を掛けた御婆さんは頭を撫でて『大きに』

と禮を述べました。友人は僕を顧みて野趣があると笑ひました。僕も笑ひました。唯笑つた丈ではありませぬ。百年も昔の人に生れたやうな暢氣した心持がしました。僕は斯ういふ心持を御土産に東京へ持つて歸りたいと思ひます」

僕も市藏が斯ういふ心持を、姉へ御土産として持つて來て呉れ、ば可いと思つた。

十一

次のは明石から來たもので、前に比べると多少複雑な丈に、市藏の性格をより鮮やかに現はしてゐる。

「今夜此所に來ました。月が出て庭は明らかなですが、僕の部屋は陰になつて却て暗い心持がします。飯を食つて煙草を呑んで海の方を眺めてゐると、——海はつい庭先にあるのです。漣さへ打たない静かな晩だから、河縁とも池の端とも片の附かない渚の景色なんです、其所へ涼み船が一艘流れて來ました。其船の形好は夜でよく分らなかつたけれども、幅の廣い底の平たい、何うしても海に浮かぶものとは思へない穩やかな形を具へてゐました。屋根は確かあつた様に覺えます。其軒から晝の具で染めた提灯が幾何もぶら下がつてゐました。薄い光の奥には無論人が坐

つてゐる様でした。三味線の音も聞こえませんでした。けれども總體が如何にも落ち附いて、滑る様に楽しんで僕の前を流れて行きました。僕は靜かに其影を見送つて、御祖父さんの若い時分の話といふのを思ひ出しました。叔父さんは固より御存じでせう、御祖父さんが昔の通人のした月見の舟遊びを實際に遣つた話を。僕は母から二三度聞かされた事があります。屋根船を綾瀬川迄漕ぎ上せて、靜かな月と靜かな波の映り合ふ真中に立つて、用意してある銀扇を開いた儘、夜の光の遠くへ投げるのだと云ふぢやありませんか。扇の要がぐるぐる廻つて、地紙に塗つた銀泥をさらさらさせながら水に落ちる景色は定めて美事だらうと思ひます。それも只の一本ならですが、船のものが總掛りて、ひらくする光を投げ競ふ光景は想像しても凄艶です。御祖父さんは銅壺の中に酒を一杯入れて、其酒で徳利の燭をした後を悉く棄てさした程の豪奢な人だと云ふから、銀扇の百本位一度に水に流しても平氣なのでせう。さう云へば、遺傳だか何だか、叔父さんにも貧乏な割にはと云つては失禮ですが、何處かに贅澤な所がある様ですし、あんな内氣な母にも、妙に陽氣な事の好きな方面が昔から見えてゐました。唯僕丈は、——斯ういふと又あの問題を持ち出したなと早合點なさるかも知れませんが、僕はもうあの事に就いて叔父さんの心配な程屈託して居ない積りですから安心して下さい。唯僕丈はと斷るのは決して苦い意味で云ふのではあ

りません。僕は此點に於て、叔父さんとも母とも生れ附きが違つてゐると申したいのです。僕は比較的樂に育つた、物質的に幸福な子だから、贅澤と知らずに贅澤をして平氣で居ました。着物などでも、母の注意で、人前へ出て恥づかしくない様なものを身に着けながら、是が當然だと澄ましてゐました。けれども夫は永く習慣に養はれた結果、自分で知らない不明から出るので、一度其所に氣が附くと、急に不安になります。着物や食事はまあ何うでも可いとして、僕は此間ある富豪の無暗に金を使ふ様子を聞いて恐ろしくなつた事があります。其男は藝者や幫間を大勢集めて、靴の中から出した札の束を、其前でずた／＼に裂いて、それを御祝儀とか稱へて、みんなに遣るのださうです。夫から立派な着物を着た儘湯に這入つて、あとは三助に呉れるのださうです。彼の亂行はまだ澤山ありましたが、何れも天を恐れない暴慢極まるもののみでした。僕は其話を聞いた時無論彼を惡みました。けれども氣概に乏しい僕は、惡むよりも寧ろ恐れしました。僕から彼の所行を見ると、強盜が白刃の拔身を疊に突き立てて良民を脅迫してゐるのと同じ様な感じになるのです。僕は實に天とか、人道とか、若しくは神佛とかに對して申し譯がないといふ、真正に宗教的な意味に於て恐れたのです。僕は是程臆病な人間なのです。驕奢に近づかない先から、驕奢の絶頂に達して躍り狂ふ人の、一轉化の後を想像して、怖くて堪らないのであります。

「僕は斯んな事を考へて、静かな波の上を流れて行く涼み船を見送りながら、此位な程度の慰みが人間として丁度手頃なんだらうと思ひました。僕も叔父さんから注意された様に、段々浮氣になつて行きます。賞めて下さい。月の射す二階の客は、神戸から遊びに来たとかで、僕の厭な東京語ばかり使つて、折々詩吟などを遣ります。其中に艶かしい女の聲も交つてゐましたが、二十三分前から急に大人しくなりました。下女に聞いたらもう神戸へ歸つたのださうです。夜も大分更けましたから、僕も休みます」

十一

「昨夕も手紙を書きましたが、今日も亦今朝以来の出来事を御報知します。斯う續けて叔父さんに計り手紙を上げたら、叔父さんは屹度皮肉な薄笑ひをして、彼奴何處へも文を遣る所がないものだから、己むを得ず姉と己に對して丈、時間を費やして音信を怠らないだと、腹の中で云ふでせう。僕も筆を執りながら、一寸さういふ考へを起しました。然し僕にもしそんな愛人が出来たら、叔父さんはたとひ僕から手紙を貰はないでも、喜んで下さるでせう。僕も叔父さんに音信を怠つても、其方が幸福だと思ひます。實は今朝起きて二階へ上がつて海を見下ろしてゐると、

さういふ幸福な二人連れが、磯通ひに西の方へ行きました。是は事によると僕と同じ宿に泊つてゐる御客かも知れません。女がクリム色の洋傘を翳して、素足に着物の裾を少し捲くりながら、浅い波の中を、男と並んで行く後姿を、僕は羨ましさうに眺めたのです。波は非常に澄んでゐるから高い所から見下ろすと、陸に近いあたりは、日の照る空氣の中と變りなく何でも透いて見えます。泳いでゐる海月さへ判切見えます。宿の客が二人出て来て泳ぎ廻つてゐますが、彼等の水中で遣る所作が、一舉一動悉く手に取る様に見えるので、藝としての水泳の價値が、大分下落する様です。(午前七時半)」

「今度は西洋人が一人水に浸かつてゐます。あとから若い女が出て來ました。其女が波の中に立つて、二階に残つてゐるもう一人の西洋人を呼びます。「ユー、カム、ヒヤ」と云つた英語を使ひます。「イット、イズ、エリ、ナイス、イン、ウオーター」と云ふ様な事を連りに申します。其英語は中々達者で流暢で羨ましい位旨く出ます。僕は到底及ばないと思つて感心して聞いてゐました。けれども英語の達者な此女から呼ばれた西洋人は中々下りて來ませんでした。女は泳げないんだか、泳ぎたくないんだか、胸から下を水に浸けた儘波の中に立つてゐました。すると先へ下りた方の西洋人が女の手を執つて、深い所へ連れて行かうとしました。女は身を竦めるやう

にして拒みました。西洋人はとうとう海の中で女を横に抱きました。女の跳ねて水を蹴る音と、其笑ひながら、きやつ／＼騒ぐ聲が、遠方まで響きました。(午前十時)」

「今度は下の座敷に藝者を二人連れて泊つてゐた客が端艇を漕ぎに出て来ました。此端艇は何處から持つて来たか分かりませんが、極めて小さい且頗る怪しいものです。客は漕いでやるからと云つて、藝者を乗せようと思いますが、藝者の方では怖いからと斷つて中々乗りません。然しとうとう客の意の通りになりました。其時年の若い方が、わざ／＼喫驚して見せる科が、餘程馬鹿らしい御座いました。端艇が其所いらを漕ぎ廻つて歸つて來ると、年上の藝者が、宿屋のすぐ裏に繋いである和船に向つて、船頭はん、其船空いてゐまつかと、大きな聲で聞きました。今度は和船の中に、御馳走を入れて、又海の上に出る相談らしいのです。見て居ると、藝者が宿の下女を使つて、麥酒だの水菓子だの三味線だのを船の中へ運び込まして置いて、仕舞に自分達も乗りました。所が肝心の御客は餘程威勢の可い男で、遙か向うの方にまだ端艇を漕ぎ廻してゐました。誰も乗せ手がなかつたと見えて、今度は黒裸の浦の子僧を一人生捕つてゐました。藝者はあきれた顔をして、しばらく其方を眺めてゐましたが、やがて根限りの大きな聲で、阿呆と呼びました。すると阿呆と呼ばれた客が端艇を此方へ漕ぎ戻して來ました。僕は面白い藝者で又面白い客だと

思ひました。(午前十一時)」

「僕がこんな煩瑣しい事を物珍らしさうに報道したら、叔父さんは物數奇だと云つて定めし苦笑なさるでせう。然し是は旅行の御蔭で僕が改良した證據なのです。僕は自由な空氣と共に往來する事を始めて覺えたのです。こんな詰らない話を一々書く面倒を厭はなくなつたのも、つまりは考へずに観るからではないでせうか。考へずに観るのが、今の僕には一番藥だと思ひます。僅かの旅行で、僕の神經だか性癖だかが直つたと云つたら、直り方があまり安つぽくつて恥づかしい位です。が、僕は今より十層倍も安つぽく母が僕を生んで呉れた事を切望して已まないのです。白帆が雲の如く簇がつて淡路島の前を通ります。反對の側の松山の上に人丸の社があるさうです。人丸といふ人はよく知りませんが、閑があつたら序だから行つて見ようと思ひます」

結 末

敬太郎の冒険は物語に始まつて物語に終つた。彼の知らうとする世の中は最初遠くに見えた。近頃は眼の前に見える。けれども彼は遂に其中に這入つて、何事も演じ得ない門外漢に似てゐた。彼の役割は絶えず受話器を耳にして「世間」を聴く一種の探訪に過ぎなかつた。

彼は森本の口を通して放浪生活の断片を聞いた。けれども其断片は輪廓と表面から成る極めて浅いものであつた。従つて罪のない面白味を、野性の好奇心に充ちた彼の頭に吹き込んだ丈である。けれども彼の頭の中の隙間が、瓦斯に似た冒険譚で膨脹した奥に、彼は人間としての森本の面影を、夢現の如く見る事を得た。さうして同じく人間としての彼に、知識以外の同情と反感を與へた。

彼は田口と云ふ實際家の口を通して、彼が社會を如何に眺めてゐるかを少し知つた。同時に高等遊民と自稱する松本といふ男から其人生觀の一部を聞かされた。彼は親しい社會的關係によつて繋がれてゐながら、丸で毛色の異なつた此二人の對照を胸に据ゑて、幾分か己の世間的經驗が廣くなつた様な心持がした。けれども其經驗は唯廣く面積の上にて延びる丈で、深さは左程増

したとも思へなかつた。

彼は千代子といふ女性の口を通して幼児の死を聞いた。千代子によつて敍せられた「死」は、彼が世間並に想像したものとは違つて、美しい畫を見る様な所に、彼の快感を惹いた。けれども其快感の中には涙が交つてゐた。苦痛を逃れるために己むを得ず流れるよりも、悲哀を出来る丈長く抱いてゐたい意味から出る涙が交つてゐた。彼は獨身ものであつた。小兒に對する同情は極めて乏しかつた。それでも美しいものが美しく死んで美しく葬られるのは憐れであつた。彼は雛祭の宵に生れた女の子の運命を、恰も御雛様のその如く可憐に聞いた。

彼は須永の口から一調子狂つた母子の關係を聞かされて驚いた。彼も國元に一人の母を有つ身であつた。けれども彼と彼の母との關係は、須永ほど親しくない代りに、須永ほどの因果に纏綿されてゐなかつた。彼は自分が子である以上、親子の間を解し得たものと信じて疑はなかつた。同時に親子の間は平凡なものと諦めてゐた。より込み入つた親子は、たとひ想像が出来るにしても、一向腹には應へなかつた。それが須永の爲に深く掘り下げられた様な氣がした。

彼は又須永から彼と千代子との間柄を聞いた。さうして彼等は必竟夫婦として作られたものか、朋友として存在すべきものか、もしくは敵として睨み合ふべきものかを疑つた。其疑ひの結果は、

半分の好奇と半分の好意を驅つて彼を松本に走らしめた。彼は案外にも、松本をたゞ舶來のバイ
プを銜へて世の中を傍觀してゐる男でないと發見した。彼は松本が須永に對して何んな考へで何
ういふ處置を取つたかを委しく聞いた。さうして松本のさういふ處置を取らなければならなくな
つた事情も審らかにした。

顧ると、彼が學校を出て、始めて實際の世の中に接觸して見たいと志してから今日迄の經歷は、
單に人の話しを其所此所と聞き廻つて歩いた丈である。耳から知識なり感情なりを傳へられなか
つた場合は、小川町の停留所で洋杖を大事さうに突いて、電車から下りる霜降りの外套を着た男
が若い女と一所に洋食屋に這入る後を跟けた位のものである。夫も今になつて記憶の臺に載せて
眺めると、殆ど冒険とも探検とも名附けやうのない兒戲であつた。彼は夫がために位地に有りつ
く事は出來た。けれども人間の經驗としては滑稽の意味以外に通用しない、たゞ自分に丈眞面目
な、行動に過ぎなかつた。

要するに人世に對して彼の有する最近の知識感情は、悉く鼓膜の働きから來てゐる。森本に始
まつて松本に終る幾席かの長話は、最初廣く薄く彼を動かしたつ、漸々深く狭く彼を動かすに至つ
て突如として已んだ。けれども彼は遂に其中に這入れなかつたのである。其所が彼に物足らない

所で、同時に彼の仕合せな所である。彼は物足らない意味で蛇の頭を咒ひ、仕合せな意味で蛇の
頭を祝した。さうして、大きな空を仰いで、彼の前に突如として已んだ様に見える此劇が、是か
ら先何う永久に流轉して行くだらうかを考へた。